

kinokopress.com  
www.kinokopress.com

地球温暖化の果てに 第一部

熱水列島

生野 以久男

## プロローグ

地球温暖化に関する科学的知見を収集・評価する目的で、一九八八年に世界気象機関（W H O）と国連環境計画（U N E P）が設立したI P C C（気候変動に関する政府間パネル）は第1作業部会第4次評価報告書（2007）で、この一〇〇年で世界の平均気温は〇・七四度上昇し、一〇〇年後には一・八〇四度上昇すると予測した。

二酸化炭素などの温室効果ガスが大気中に増加すると、ガスの温室効果によって熱が閉じ込められ、気温が上昇する。これによって地球が温暖化し、気候変動が発生するのだ。

地球温暖化は、従来、温室効果ガスの増加に応じて徐々に線型（リニア）で気温が上昇する（「緩慢な気候変動」タイプ）と考えられ、予測も一〇〇年後に気温が何度上昇するといったものだった。I P C Cの予測もこれに準じたものである。

だが、一九九〇年代に入って、グリーンランド氷床から採取したアイスコアの分析で、従来と異なる新しいタイプの気候変動が見つかった。これは一〇年単位の短い時間で気温が急変するもので、短期間に一〇度以上もジャンプして急激に上昇するという、これまでと異なるもの（「急激な気候変動」タイプ）だった。

この気候激変型の「急激な気候変動」はグリーンランド地域に限られた現象ではなかった。日本海をはじめ、世界各地の堆積物の分析から、同様の気候激変現象が東アジアや北ヨーロッパなど、各地でも起きていた。

この新たな「急激な気候変動」タイプは、短期間に急激に気温が上昇し、

温暖化がピークを迎えると、今度はゆっくりと寒冷化しはじめ、末期になると次第にスピードを上げて寒冷化して終りを迎えるといったパターンをたどるらしい。その間、数一〇〇年から数一〇〇〇年の間隔だという。

このタイプの気候変動は何回も繰り返して出現するらしく、この一〇万年の間に二〇回以上も起きていた。

この発見以来、現在進んでいるとみられる地球温暖化が温室効果ガスの増加に応じてじわりじわりと進むリニアタイプ（線型）の「緩慢な気候変動」タイプなのか、それとも突然急激に激変するノンリニアタイプ（非線型）の「急激な気候変動」タイプなのか、議論が分かれていた。

もし、現在進行中の地球温暖化が「急激な気候変動」タイプだとすれば、動植物のみならず、人間社会への影響も甚大で、地球環境および現代文明社会に対しても計り知れない被害をおよぼすおそれがあった。だが、いまだそのメカニズムが明らかでなく、「急激な気候変動」タイプと断定することはできなかった。

# 第一章

1

「これりや一体なんだ？」

突然、誰もいない研究室に九鬼陽一郎の突拍子もない素っ頓狂な声が響いた。彼は午前中からずっとデイスプレーとにらめっこしていた。

九鬼は海洋科学研究所の研究員になって二年目にもなるのに、彼にはいまだ新しい研究所にどことなく馴染めないところがあった。昼時になると、同僚の若い研究員たちが一団となって昼食に出掛けるが、彼にはこれが異様に思えて仕方がなかった。

最初のころは誘いに乗って彼らと行動を共にすることもあった。だがどうしても彼らと好みやペースが合わず、彼の方から避けることが多くなると、同僚たちも次第に声を掛けなくなつた。というより、同僚たちのほうが調子の合わない大きいかつい顔の彼を厄介払いしたというのが正しいかも知れない。それはそれで双方にとってハッピーな帰結であつた。

九鬼はいま地球上で進行している温暖化が急激な気候変動タイプにちがいないという思いが強かつた。彼は暇を見つけては急激な気候変動の兆候を探していた。

急激な気候変動の原因やメカニズムはまだ明らかでなかつた。兆候さえ判然としなかつた。それでも彼は兆候を探しつづけていた。

急激な気候変動では突然気温が急上昇するのだ。植物や動物ばかりでなく、人の健康や社会に計り知れない影響をおよぼすにちがいない。彼はじつ

としておられなかつた。

すでに急激な気候変動がすでにはじまつているのではないかという予感があつた。大学の助手から海洋科学研究所に移って間もない彼には、まだ研究テーマを自分で選ぶことはできなかった。急激な気候変動がはじまるとすれば、北大西洋から北極海付近になんらかの兆候が現れるにちがいないと踏んでいたが、ここを対象とした研究調査を行なうことはいまの彼には考えられないことだつた。このことが彼をことのほか苛立たせた。

彼は北大西洋を日本近海に置き換え、密かに急激な気候変動の兆候やメカニズムを探っていた。

同僚たちが昼食に出掛けた留守に、彼はひとり研究室に残り、デイスプレーと向かい合い、キーボードを叩く。

彼は目を光らせ、いかつい大きな顔をもう一度デイスプレーに近づける。衛星から撮つた画像が映し出されていた。高度七〇〇ないし八〇〇キロメートルの上空から地球探査衛星に搭載してある赤外マルチスペクトルスキャナースステムやマイクロ波放射計などで観測した海面水温のデータを映像化してオンラインで送られてきたものだつた。分解能も衛星を打ち上げるたびに高まり、最近では五〇センチメートル足らずの物体の識別が可能なものもある。

だがマイクロ波放射計では使用する周波数が低いと解像力が落ちる。それに観測可能な海水温は海面の一ミリ以下のごく表面にすぎない。この衛星画像で表示されるごく表面の海水温は、もちろん、一般の観測で用いられている海面下一メートルの水温の値とは異なる。もつとも、海面から数メートルまでの海水の垂直方向の温度分布は海域や気象条件などで変化するものの、特別の条件下でないかぎり、多くの場合、海面と海面下一

メートルの水温とはほぼ近い値を示す。

衛星画像の画面では、高温域は周囲の海域と温度差が肉眼で識別できるように幾分濃淡を誇張して表現してあった。

誰もいない研究室で、彼は嬉々としてディスプレイに見入った。

何日もわたって、彼は南シナ海から日本近海までの海水温をチェックしていた。そしてとうとう見つけたと思った。

「おい、どうした？」

不意に耳元から声がした。

振り向くと、間近に一癖のあるグループリーダーの中西の太った丸い顔があった。熱中していたせいも、彼は近づいてきた中西に全然気付かなかつた。大分前から彼の背後で身を屈め、ディスプレイを覗き込んでいたらしい。

「……これはなんですかね」

九鬼は驚きを抑え、しらばくれて周囲より幾分黒ずんで見えるディスプレイの一点を指さした。

「どこだ、そこは？」

「南シナ海」

「なにを探している？」

九鬼は後頭部に中西の険しい視線を感じた。グループ会議でのやりとりをまだ根に思っているのか。

数日前、研究グループの会議で、地球温暖化に関する将来計画について話しあっているとき、突然、九鬼が口を挿んだ。

「そろそろリニアタイプの研究からノンリニアタイプの『急激な気候変動』

に中心を移していくべきじゃないんですか」

会議は中西のペースで進んでいた。冒頭から中西はリーダーとして、来年以降も現在進めているリニアタイプの地球気候変動モデルの改良を継続することを前提として話を進めていた。

中西のアクの強さを知っているグループの研究員は黙って頷くだけで、誰一人異論を挟もうとしなかった。異論があればグループから離れるほかないからだ。

九鬼には一年間我慢したという思いが強かった。

彼はこの研究所に移ったときからノンリニアタイプの気候変動モデルについて研究しなかった。彼はもはや我慢することができなかった。

一万年ほどまえから地球は温暖な間氷期に入っているが、その直前は新ドライアス期と呼ばれている寒冷な氷期で、これは一万一〇〇〇年前に終わった。このような氷期と間氷期といった気候変動は一〇万年くらいの周期で起こっているが、これは地球軌道に関係して起こるらしい。

これに対して、大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが増えることによっても地球が温暖化する。この種の地球温暖化には二酸化炭素などの温室効果ガスの増に同じ比例して気温が上昇していくタイプとそうでないタイプとがある。

前者がいわゆるリニアタイプの「緩慢な気候変動」といい、従来、地球温暖化といえばこのタイプが考えられてきた。

ところが、一九九〇年代に、グリーンランド氷床の水（アイスコア）の分析から見つかった別のタイプの気候変動が見つかった。これが九鬼が目指しているノンリニアタイプの「急激な気候変動」だった。

「きみはいまの地球気候変動モデルにはもはや改良の余地がないとも思っ

ているのか」

中西は新参者がなにを言うかといった目付きをして強く言う。

九鬼は国立大学の助手から海洋科学研究所の研究員に転進してまだ二年目だったが、彼には新参者という意識がなかった。元来、おちよこちよいというか、前後を考えず見境なく行動するところがあった。代々医者をしていいる地方の旧家の長男として生まれた彼は小さいときから父の病院を継ぐように仕向けられていた。だが彼はなんとなく医者という職業が嫌いであつた。最近では大量の医薬品が出回り、医者の仕事が病気で弱った人を助けるというより、ろくに効きもしない薬を大量に処方し、病人を食いものにしていするように思えるのだ。

それでも彼は父の方針に従い、医学部を受験し、一度は入学した。それも束の間、途中で地球環境問題に関心が移り、地球温暖化にこころを奪われ、勝手に理学部に移り、気象学を専攻してしまつた。

父は怒り、大衝突のすえに家を飛び出した。弟が後を継ぐようになって、ようやく父の怒りも幾分おさまつたが、父は彼と和解することなく、三年前突然他界してしまつた。

「とんでもない。まだまだ不十分なものであるのは分かっています。でもわれわれの力は限られている。限られて力でも効率的に研究を進めるか……」

「だから、いまの研究に集中しているのだ。ほかの研究をする余力がないのだ」

「現在、外部の研究機関とも共同で研究を進めていますが、そうするほどのことがあるのですか」

「必要だからそうしているだけだ」

「わたしは現在進めている地球気候変動モデルの研究を否定するものではありません。予測精度を高めることは必要なことです。でもわれわれが精度の追及をさらにつづけてやるべきかどうか、この辺で一度考えてみる必要があるのではないんですか」

「地球規模の気候変動を予測するにはいまのモデルでもまだまだちやちなものだ。これからも改良しつづければならないのだ」

「たとえちやちなモデルでも、大気中の二酸化炭素濃度が増えればそれに応じて地球が温暖化することを十分解明できました。これで十分じゃないんですか、当研究所としては。一〇〇年後の二一〇〇年末の平均気温が二度上昇するか、四度になるか、それともそれ以上になるか分かりませんが……。研究戦略的に考えて、一〇〇年先の精緻な予測のための研究はこの辺で十分余力のある他の研究機関に任せてもいいのではありませんか。われわれが問題とすべきは……」

「うちの研究所はなあ……」

中西はいきり立つて早口でまくし立てた。こともあろうに自分よりも一〇歳も若いうえに、中途採用で入ってきてまだ一年しか経っていない新参者に当研究所の役割や研究戦略について講釈されたとあつては我慢ならぬらしい。

「……とにかく、われわれ気候変動研究グループの役割は日本を含む東アジア地区の詳細な予測が可能な気候変動モデルを開発して、スポンサーが必要とする予測情報を提供することなのだ」

「でもどんな質の情報が必要なのか、必要性の高い情報とはどんな情報かが問題なのじゃありませんか」

九鬼は殊更丁寧と言う。

「もちろん、そうだ。だからわれわれは予測の精度をあげて必要性の高い情報を提供しようとしているのだ」

「もう何年もまえから世界各地で温暖化によるとみられる異常気象が頻発していますよね。大雨、洪水、日照り、熱波、それに熱帯低気圧も強暴化し、超大型のハリケーンや暴風雨が世界各地を襲っているじゃないですか。

日本を襲う台風の巨大化もそうです。海水温も異常に上昇しているじゃないですか。でも異常気象についての予測はまだ不十分です。いっどこでどんな異常気象が起こりそうだったことがある程度精度よく予測できれば、世界中の誰もが飛びついてくるでしょう」

「あのなあ、われわれは『気候』といった年単位の変動をテーマにしているのだ。一週間ほどの短期的な現象である『気象』を対象にしていない。うちの研究所には毎日のお天気を予報するような仕事は向いていないのだ」

気候とは長期にわたる気象の平均状態で、一般に、三〇年間の平均値を指す。異常気象とは過去三〇年以上にわたって観測されなかった気温や降水量などがあつた場合である。突発的な集中豪雨などを指していることもある。あまりに異常気象がつづくので、最近では気候異変という表現もみられる。

「喩えて言つたまでです。すでにリニア（線形的）な気候変動の予測についてある程度の情報がある場合、長期にわたる計画や対策を考える立場の人々がリニアな気候変動についてさらに精度の高い予測情報を求めるか、それとも突然突発的に発生する急激なノンリニア（非線形的）な気候変動の予測情報のほうを求めるか、どちらでしょうか。両方ともできればなんとも言ふことはないのですが、それができなければ、未解明の状況にある後

者に今後は研究の重心を移すべきだとわたしは考えているということです」

九鬼は議論を終わりにしたかった。自惚れ屋で自信の塊のようなアクの強い中西が折れるはずはなかった。議論を続けなければますますエスカレートするだけだった。

産業革命以来、大気中の二酸化炭素濃度がすでに三六パーセントも増えてしまった。メタンなど、その他の温室効果のあるガスも軒並み増加し、地球温暖化が一段と進みつつあつた。グリーンランド氷床の分析から「急激な気候変動」が明日にも起こりうるということが明らかになっているのに、地球温暖化がどのようなスピードでどのようなパターンで進むのか、いまだに全く分からないのだ。

中西がさらに改良を試みようとする予測モデルでは一〇〇年先とか二〇〇年先とかといった長期的な平均的気候変動を予測できても、一〇年とか二〇年とかの短い期間で急激に変動する気候を予測することはできなかった。

九鬼は上目遣いで中西を窺つた。中西の厳しい表情のなかに彼を見る憎々しげに光る目があつた。彼は口の中で「バカを相手にしてもしょうがない」と呟くと、自分の口にかんぬきを下ろした。

「なにを探している？」

中西は目をディスプレイに釘付けにしたまま、同じ質問を繰り返した。

九鬼は返事をせずに、マウスを動かし、ディスプレイの画像を隠すように移動する。

しばらく中西は前屈みになつて執拗にディスプレイを覗いていたが、やがて諦めたのか背筋を伸ばし、ディスプレイから目を離した。

「昼飯はまだか。飯を食いに行くか」

中西は一方的に言い、返事も聞かず、黙って去っていく。ドアのところ  
で振り返ると、「打ち合わせたいことがある。二時にきてくれ」と言った。

九鬼はディスプレイに前の画像を再び映し出した。

画面の中央に周囲よりも一段と濃く色付けされているスポットがある。

注意しないと見過ごすほどの大きさのスポットだった。

九鬼はしばらく画面を見つめていた。彼は一面広がる海洋の表層に周囲  
よりも水温が著しく高い暖水塊が消滅することなく北上しつづける様子を  
想像した。

その瞬間、彼の全身に戦慄が走った。

## 2

「このところ、海水温がいやに高い。なぜですかね」

突然、電話してきた北原と名乗る男は妙に馴れ馴れしくいう。K電力の  
環境立地部の担当課長だといい、前に会ったことがあるらしいが、中西に  
はどうしてもその男の顔を思い出すことができなかつた。あれこれ記憶を  
たどりながら、これまで会ったことがあるそれらしい男たちの顔を思い浮  
かべながら、彼は適当に受け応えをする。

「発電所付近の漁民が心配しているんですよ。海水温がこうも高くなると  
魚が逃げていくし、生け簀の養殖カレイもダメになるといつてね。何度も  
痛い目に遇っているんで必死なんですよ。先生、原因は一体なんですかね。  
いつまで続きますかね。地球温暖化のせいですかね。こんな状態が続くと

いつ電力にとばっちりが飛んでこないともかぎりませんよ。なにしろ大量  
の温排水を発電所から放出していますからね」

「温暖化のせいだとはつきり言いきるまでにはまだ解明されていないこと  
が多々あるのですが、多くの科学者は……」

平年の平均気温を超える異常な日が毎年現れ、年々平均気温が書き換え  
られていく。温暖化の傾向が明らかなのに、中西は用心深く曖昧に答える。

その年も七月に入るまえからめらめらと不吉に燃える太陽が一日中ギラ  
ギラと輝き、四〇度を超す日が連日つづいた。灼熱の太陽で焼かれた研究  
所のコンクリートやタイルは太陽が沈んでも冷えることなく、クーラーが  
フル回転していた。屋内の熱気が屋外に吐き出され、外気が五〇度を超え  
ることも珍しくなかつた。

都市はエネルギーを大量に消費し、大量の排熱を放出する。都市は燃え  
上がり、夜になつても冷えることのない巨大なヒートアイランドと化した。

水の消費量が急増した。雨が降らず、貯水池が干上がり、給水制限が日  
常的に実施された。熱中症や日射病で倒れ、病院へ担ぎ込まれるものが続  
出した。

「連中の言うことは確かなものですかね。漁民たちは理屈を言つて聞かせ  
ても納得しないんですよ。それに困ったことが起こりましてね。実は……」

北原という男は声をひそめた。

発電所立地するとき予測した温排水による昇温域が予測範囲を超えて広がる  
現象が最近頻繁に生じているというのだ。

原子力発電所であれ火力発電所であれ、高温高圧蒸気でタービンを回転  
させて発電する汽力発電所では大量の冷却水が必要とする。周りを海に囲  
まれた日本では冷却水に海水を用いるので、汽力発電所は海水が取水しや

すい臨海部に立地してきた。そのため、日本列島の海岸には太平洋側のみならず、日本海側にも大規模の発電所が立ち並び、これらの発電所から大量の温排水が海へ放出されていた。

大量の温排水を放出すると、付近の海水温を上昇させ、棲息する魚介類や海域の生態系にダメージを与える。当然、漁業で生計を立てている漁民へも影響する。

そこで発電所を立地し大量の温排水を放出するときには、その海域を漁獲場としている漁民たちと事前に話し合い、彼らが有している魚介類を獲る権利である漁業権を譲り受けるか、温排水を放出する権利を取得することになる。発電所側は通例、温排水によって海水温が一度上昇する範囲にわたる海域の漁業権を対象に、それを所有する漁民たちの団体である漁協（漁業協同組合）を交渉相手として漁業権消滅等の交渉を行う。漁業権を譲り渡すと、漁民たちはその範囲で漁獲する権利を喪失し、漁業できないことになる。

問題となっているのは、漁業権を消滅した範囲や許可を受けた範囲を超えて温排水による一度上昇範囲が広がっていることだった。北原は最近の海水温上昇傾向がこれを加速しているのではないかとという。

「海水温上昇が一度上昇範囲を広げていると言うのですか。それは調べて見ないと分からないですね……」

中西は気象庁が発表した暖水塊の観測データを思い出し、不吉な予感を感じた。

二〇〇一年七月、海面に盛り上がる渦をともなった暖水塊が太平洋を西に進み、沖繩本島に接近したことがあった。本島周辺で二〇センチを超す異常潮位をもたらしたという。

異常潮位とは台風の際の高潮や地震による津波とは異なり、原因の分からない潮位の変化現象をさすが、その渦は周囲よりも水温が高く、直径約四〇〇キロほどの範囲にわたってレンズ状に海面が盛り上がり、時計回りの渦流をともなっていた。二月から七月にかけて、渦は潮岬の南方約一〇〇キロの地点から一カ月約一五〇キロの速度で西に移動し、沖繩本島の南東に到達したらしいが、渦内部には表面から水深八〇〇メートル付近まで水温が一度から三度高い海水が広がっていた。ことに水深三〇〇メートルから六〇〇メートル付近には深さ三〇〇メートル直径数十キロにわたる約三度高い巨大な暖水塊が存在していたのだ。

「この際、海洋科学研究所で海水温上昇のからくりを徹底的に解明してもらいたいと思っっているんですよ。依頼研究を出しますからよろしく願います」

海洋科学研究所は半官半民的性格の研究機関で、国からの研究費と電力会社を中心とする関係民間企業からの出資で運営されていた。本部機構は都心に置いているが、主力研究施設は都心から離れた郊外にあった。太平洋側と日本海側のそれぞれに臨海実験設備を有している。

地球温暖化研究グループの中西らは大型実験施設やスーパーコンピュータなどのある主力研究所に所属していた。

「そうですか……、とにかく一度打ち合わせをさせていただいてから……」

中西は打ち合わせの約束をして、かろうじて北原の執拗な電話を切るこたができた。受話器を置いてからも、目の前に巨大な暖水塊がちらつき、しばらくにも手が付かず、彼はただぼんやりと机に座り続けていた。

不意に、九鬼陽一郎の好奇心に光る丸い目といかつい大きな顔が浮かんだ。



中西はとりあえず部長に依頼研究の件を報告しておこうと思い、立ち上がった。

廊下に出ると、開放されているドアの隙間から窓を背にしたスチール机の席で椅子に背を凭せ、手にした書類に目を通していている桜木の姿が見えた。

中西は足早に近づく。

「部長、一寸、よろしいですか。実は、K電力から依頼を出したいと言ってきたのですが、北原という男をご存知ですか。環境立地部の担当課長らしいのですが……」

「え？ 北原だつて？ 一体なにを言ってきたんだ」

桜木は一瞬間を曇らせ、手に持った書類を机に放り投げるように置いた。

中西は部長の机のまえに近くの椅子を引き寄せると、電話でのやり取りの一部始終を告げた。

「なにをいままさら……、そんなことは……」

桜木は啞然とした面持ちで、まじまじと中西の顔を見た。

「環境アセスメントのことですか」

発電所を建設する場合、事前に環境への影響を予測し評価して必要な対策を講じることが定められている。これが環境アセスメントである。その一項目に発電所から放出される温排水の海域環境や海生生物への影響を予測し評価することが求められているが、これを実施するためには発電所から放出される温排水が前面海域でどのように広がっていくか、温排水の拡散範囲を前もって予測する必要がある。

「問題は……、漁業権消滅範囲だ」

日本列島周辺の沿岸海域で漁業権のないところは殆どないし、漁業権のある海域には温排水を無断で海へ放出できない。発電所から温排水を放出

するには漁業権を消滅させるか、漁業権者の了解を取るかほかないのだ。

発電所立地に際して漁業権を消滅させる場合、温排水によって海水温が一度以上上昇する範囲を影響のおよぶ海域として、この範囲海域の漁業権者である漁民（漁業協同組合）に対して補償を支払い、漁業権を消滅させるのが通例であった。

漁業権を消滅させる範囲は漁業権者にとつても発電所側にとつても補償額の大小にかかわる重要な要素であるほか、それ以上に、漁業を生業としている漁民にとつて漁業権を消滅させることは死活問題でもあるのだ。

漁業権を消滅させる範囲の確定は温排水の拡散予測に基づくが、実際問題として消滅範囲を決めることは簡単なことではない。漁業権者である漁民（漁協）側では安全を見込んでゆとりある範囲を望むが、これに対して、発電所側では漁業権消滅範囲が狭ければ狭いほど補償額も少なくて済むからだ。

桜木の話では、温排水の拡散予測を依頼してきたときには、北原は予測の際のゆとりを認めず、できるだけ範囲を狭くすることを望んだという。

「そんなことができるのですか」

予測を担当する側では、自然現象が相手だけに不慮の事態に備えてある程度安全サイドに立ってゆとりを取っておきたいのに、どこで誰が手を入れるのか最終段階では無視されてしまうことが多かった。これでは風や気温といった条件の変化によつては温排水による一度上昇範囲が漁業権の消滅範囲を超えて広がるが出てくる可能性が残るのだ。

予測は予測モデルの精度とデータの正確さに依存する。

特定海域における温排水の拡散範囲予測は海域の地形や海象条件のデータをもとに当該海域における拡散係数を導き出し、これに温排水の放出速

度、放出水量や水温などの条件を予測モデルに与えてはじき出す。これにはコンピュータによる数値シミュレーションによる方法と縮尺模型による水理実験の方法を用いる。それぞれの方法で単独に予測することもできるが、予測精度を上げる目的で、細かいところの再現が難しい数値シミュレーションを補うために模型による水理実験を併用することが多い。

いくら再現性の高い精度のいいモデルでも使用するデータが不正確でいい加減なものであれば予測結果もデータラメで、いい加減なものになる。ことに海域の拡散係数の決め方ひとつで温排水の拡散範囲が大きくもなれば小さくも出来る。観測のデータが変われば予測結果も変わる。

「消滅対象範囲から外れて補償金を手にできなかった漁民や漁協のやつかみもないことはないだろうが、なにしろ漁民にとって海は生業の場だから彼らが真剣になるのは当然だよ。それなのになんとか理屈を捏ねて拡散範囲を無理やり狭く抑えようとしてきたんだ、彼は。漁民たちに放水口が塞がれるような事態が生じなければいいんだが……」

「では、依頼はどうしますか。できたら断りたいところですがね……」

海洋科学研究所で実施する研究は研究所自ら自主的に研究計画を立案して実施する自主研究のほかに、電力会社などスポンサーからの依頼を受けて実施する依頼研究、国等からの受託研究、外部に委託する委託研究、外部研究機関等との共同研究など、多岐に分かれている。

研究員にとって問題となることは、研究種別の違いによって成果の取り扱いに違いがあることであつた。自主研究の成果は内部の手続きを経ておむね学会などにおいて発表できるが、依頼研究や受託研究は依頼元や受託元への報告のみで、許可がなければ対外発表はできない。研究者にとって研究結果の発表は単に業績に対する評価をうる機会を意味するばかりで

なく、外部からの批判やコメントを通して研究をさらに展開する機会でもあるのだ。

だが依頼研究には成果の対外発表を研究の実施前から保留するものが多かった。むしろ依頼報告書として纏められた研究成果は公表しないのが当然かのように扱われがちであつた。特定地点からむ事象の解明や事故原因の調査などははじめからマル秘扱いだつた。不利な結果を隠したがるのは世の常としても、依頼担当者は研究や調査を実施していることさえ知られたくない傾向が強かつた。問題があるから研究や調査を実施しているのではないかと住民や反対派に思われるというのだ。

「とんでもない。断つたら、あの奴、なにを言い出すか分からん」

桜木は神経質に何度も瞬きを繰り返した。

「そうですか。一度、依頼の内容をよく聞いてみます」

「そうだな。依頼の範囲をできるかぎり限定するといひ」

中西は頷きながら、椅子から腰を上げた。

### 3

「依頼したいことは、海水温の昇温メカニズムについてなんですが……」

カニの甲羅のような四角顔をした北原というK電力の課長はこう言い掛けて、促すようにもう一人の連れの若い男に目を向けた。北原と対照的に色白で夕顔のような細面の男は手元に用意していた資料のコピーを中西と九鬼の前に素早く差し出した。

九鬼はテーブルに置かれた資料を引き寄せながら、向いのカニの甲羅と

夕顔の二人を一瞥し、それから中西の横顔に目を走らせた。彼には中西がなぜ電力との打ち合わせに同席させたのか理解できずにいた。

九鬼は中西に呼ばれてリーダー室に入っていくと、机の席は空っぽで、グループの打ち合わせや作業するときに使う長テーブルの椅子にスーツ姿の二人の男が所在なげに座っていた。北原ともう一人の若い男だった。

一端、九鬼は二人と挨拶を交わすことなく室の外に出たが、戻ってみるとすでに中西は彼らの前の席にいて、隣に座れと目で合図した。

彼は目の前の二人に目を向ける。はじめに口を切った北原と言う男は頭が切れそうだが、いかにも小狡そうな目付きをしている。若い男のほうはメガネの奥で目をすばしっこく動かしているが、融通は利かないようだ。だが言いつけを徹底して守るように見える。

「『海水温昇温メカニズムの解明』とありますが、どこの海域ですか。時期や範囲はどう考えておられるのですか」

手に取った資料のコピーから目を上げると、中西は北原に不審そうな目を向け、コピーをテーブルに置いた。大体依頼題目からおおまか過ぎるが、調査研究項目も抽象的で、対象海域、対象範囲、対象時期も特定されていないのだ。

「紙に書いたものは洩れると厄介ですからな。かといってこんなものをマール秘扱いするのもなんですからな」

北原は先回りするように言う。

「……なにしろ、去年の夏は大分痛めつけられましたな。漁民たちが本社まで押し寄せてきて抗議しよった。社長や部長にはお小言を喰らうし、発電所の連中からは泣き付かれるやら、全く参りましたよ。そこでまえもって理論武装をしておこうというわけですな。いまから準備をしていること

が敵に洩れたら一大事だし、発電所の連中も神経質になっているので隠密に行動することにしたというわけです」

前置きを言つて、北原は今年の出来事を話した。概略つぎのようだった。

今年の夏、T原子力発電所の近くの海域の生け簀で養殖中のヒラメが突然もがきだし、大量に浮きだした。三日も経たないうちに数万匹が全滅してしまった。調べてみると、有害なプランクトンも見つかったが、海水温も異常に高かったことが判明した。

漁民たちははじめのうち、例年と違って異常に暑い日が何日も続いたために海水温までが異常に高くなったと思っていた。原子力発電所関係者はこのときとばかりは地球温暖化のせいにはいかないと言った。原子力発電所は地球温暖化の原因となる二酸化炭素を出さないから地球温暖化の防止に役立つのだと触れ回っていたからだ。

「……これで収まればなんにも言うことはなかったんだが……、ところが漁民にせっつかれて行われた県の調査で、運悪く近くの原子力発電所から放出された温排水が漁業権消滅範囲を超えて拡がっているのが見つかった。いつもならありえないことなので、発表を控えてもらおうと県に働き掛けしたが、データが洩れて大騒ぎになってしまった。一体あれはどこから漏れたのかな」

北原はしばらく口を噤んでいたが、気を取り直して続ける。

「……外部に出せば情報が漏れる心配があるので内部でいろいろ検討してみたが、この際、海洋科学研究所に依頼してなぜ温排水が予測した拡散範囲を超えて拡がったのかを十分解明してもらおうことになった。今年もこのようなことが起こるようなことになればその準備にもなるし……」

「それじゃ、T原子力発電所海域ということですね」

中西は北原がかすかに頷くのを見て、続ける。

「昨年の夏の異常な拡散ケースを対象としますのでね。そのときの拡散メカニズムと昇温メカニズムの解明ということとで……」

中西が九鬼を振り返った。彼は猜疑に満ちた目の北原ともう一人の井東という若い男をぼんやり眺めていた。

「とにかく情報が敵に漏れることがないようにお願いしたいのだ……、依頼研究では成果の報告が当方に限られるのでしたね。もちろんマル秘扱いでね」

「依頼元の希望であればそのように扱うことになってはいるのですが、研究成果ができれば公表されるのが望ましい」

「すべてマル秘扱いということにさせていただきますよ」

北原は高圧的に言う。

「いいでしょう。では依頼の範囲は限定して明確にしておきましょう。はっきりしてないとあとで問題になるといけませんから」

「T原子力発電所関連はすべてマル秘にしてほしい」

「いつまでマル秘扱いになるのですかね、永久ということではないでしょう」

「それは何時になるか分かりません。当方の判断で決めさせて頂きましょうかね」

「そうですね、でも二、三年もすればオープンにできるのじゃありませんか」

「その時にならないと……」

北原はもういいだろうというような顔をした。

「ところで、お伺いしますが、T原子力発電所関連ということ……」

九鬼が口を挟んだ。

「決まっているじゃないか。T原子力発電所に関係している事柄は全部だよ」

「去年の分だけについてですね」

「いや、今年の子測も含める。なにしろ漁民たちは虎視眈々として様子を探っているからな」

北原は若い九鬼が相手だとぞんざいな口をきく。

「子測……、海水温の子測ですか」

北原はもちろんだという顔をして、九鬼を一瞥する。彼には北原のこれまでの話をどこか遠いところの話かのように聞いていた。いや、彼の脳裏にはディスプレイに映った黒みがあった一点が鮮明に映し出されていたのだ。

「あのおう、昨年の夏、その発電所の周辺海域に突然高温の海水が押し寄せてきたのでしょうか」

北原は口を閉じたまま、九鬼にしばらくじつと目を据えていた。

「先程、拡散範囲に関してありえないことが起こったとおっしゃっておられました、それは突然高温域が出現したということですか」

北原は黙って頷いた。

「となると、T発電所周辺だけの海水温を予測することは意味がありません。もっと広い範囲にわたって海水温の変動を観測する必要があります。

それに大体予測結果を伏せておくくらいなら最初から予測する必要はないんじゃないですか」

「事前に対応策を考えるのに役立つ」

余計なことは言うなと言わんばかりに、高圧的に言い放つ。

「高海水温の予測結果が出たとすれば、一体どんな対応策を考えるのですか。海水温を冷やすために冷たい水を注ぐとでもいうのですか。それとも発電所を停めて温排水の放出を止めるのですか」

「そんなことでできるか。漁民たちや反対派の連中の対策に役立てるのだ」  
「高海水温の予測結果を漁業者にも周知させて、生け簀から魚を他に移すとか、あるいは追いだすとか、漁業者に対策を取ってもらうほうがいいのではないんですか」

「そんなに物分りのいい連中じゃない。奴らは原子力発電所を止めろと押し掛けてくる。真夏の電力需要のピーク時に発電所を止め、一〇〇万、二〇〇万キロワットが落ちたらどうなると思うのか。需要に応じきれず、つぎつぎに発電所が停止し、大停電を引き起こすことになるだろう。真夏に冷房が止まれば、どうなる。都会では熱中症患者が続出し、死者さえでるかもしれない」

北原は九鬼を睨み、早口で言う。

「かといって、予測結果を伏せておけば、漁業者が発電所に押し寄せてくるのを防ぐことができるというのですか。一時の時間稼ぎができるかもしれないけれど、結局漁業者は同様の行動を取るのじゃないんですか。予測を伏せても結果がよくなるということは考えられないんじゃないんですか。大事になる前に関係者全員で対策を考えるほうがいいと思います」

九鬼も負けずに北原の目を見返して言いながら、高温海水域の出現ということは急激な気候変動に関わることもかもしれない、それを依頼研究でマル秘扱いにするとはどういう神経だ、断固阻止しなければならぬと思っ

「いいかわるいか、それはこちらで判断する。とにかく、この依頼はマル秘扱いだ。中西先生、そう願いますよ。いいですね」

「分かりました。内部の手続きを経て担当者を決めてから、詳細についての打ち合わせに伺わせていただきます」

北原の剣幕に恐れをなしたのか、上目で北原と若い男を代わる代わる見ながら、中西は俯き加減でぼそぼそ言った。

そんな中西を横目で見ながら、九鬼はマル秘扱いの依頼研究に対抗して、なんとかノンリニアタイプの急激な気候変動モデルの開発を自主研究として立ち上げることができないものかとしきりに考えていた。

4

「きょう、病院に行ってきたの」

「うん……」

「ねえ、聞いているの」

陽一郎がテーブルに広げた夕刊から顔を上げると、亜耶子の突き出た感じのする大きな目が飛び込んできた。妻の目には不安の色に混じってどこか含羞みの色があった。

「うん、どうかしたのか」

陽一郎にはまだ幾分上の空のところがあった。

「……三カ月目だそうよ」

「なにが……」

「……………」

いつも明るく輝いている亜耶子の大きな目がなぜか不安げに忙しく動いている。

「あ、そうか、できたのか」

「そうよ、わたしたちの赤ちゃんが……」

陽一郎は思わず妻の手を握りしめた。亜耶子の目がみるみる潤み、大粒の涙が溢れ落ちた。妻のほんのりと温かい手の感触を通して、彼は新しい生命の息吹が手を伝って胸の奥深くどこまでも果てしなく広がっていくように感じた。時間と空間が融合したような不思議な気分だった。

「それでいつ……」

「予定日は八月五日だそうよ」

「八月？」

陽一郎は鸚鵡返しに言いながら、思わず手を引いた。

「どうかしたの」

「暑いときだな」

「ええ……」

亜耶子は大きな目を一層大きくして、陽一郎をじつと見つめている。

この数年、梅雨が短く、つづいて長い酷暑の夏が来るといったパターンが定着していた。八月の初めというとき暑さの真っ盛りだ。そのとき、暖水塊も日本列島を襲うかもしれない。

「大丈夫かな」

一瞬、亜耶子の顔が曇った。去年の夏、テニスの最中に突然意識を失い、熱中症で病院に担ぎ込まれたことが蘇ってきたらしい。

「気をつけるから、大丈夫よ」

直ぐ気を取り直して明るく言う。

「田舎の実家で産むか。あつちのほうがここより幾分涼しいだろう」

「いやよ、お母さまにご面倒をお掛けするのは……」

亜耶子の母は五歳のとき病死した。父が男手一つで兄と妹の二人の子どもを育てていたが、しばらくして三歳下の母の妹を後添えに迎えた。亜耶子は継母となった叔母とはしっくりいっていなかった。そのことを知っている陽一郎は先回りして自分の親のもとでの出産をすすめてみたものの、小さいときから自立を強いられた彼女には受け入れられることではなかった。

「……ここでいいわよ。二階の佐野さんの奥さまが紹介してくださいました先生の先生、とても感じがいい方なの。病院はそう遠くないし、あの先生のところ産みたいわ。それに陽ちゃんがそばにいるほうが心強いし……」

三階建ての職員用住宅は研究所の隣の市にあった。街の中心から西に寄った住宅街の一番奥にぼつんと建っている。六軒あった一戸建ての職員用住宅を取り壊して一棟の集合住宅に立て替えたせいかな、敷地は広く、ゆとりがあった。

中央の階段を挟んで、東側に4LDK、西側に3LDKの間取りの三階建て六世帯用集合住宅で、九鬼たちは一階の西側3LDKに住んでいる。集合住宅とはいえ、比較的独立的な構造のところだ。亜耶子には気に入っていた。それにベランダのある南側には芝生が張られた広い庭があって、子供たちの遊び場になっている。

「一人で大丈夫かなあ」

陽一郎は自信がなかった。まだ目立った変化はないが、臨月近くになった妻をどう扱えばいいのか、はじめての子にどう接すればいいのか皆目見当がつかなかったし、研究に追われてそのために時間を裂くことができるか

さえも分からなかった。それに彼にはまだ形になっていない漠然とした不安があった。日本近海に向かつて北上する暖水塊が、彼のこのころのなかで、なにかしら得体のしれない恐怖を醸し出していった。

5

南シナ海で尖った頭を突き立てて漂流する巨大なおぼけクラゲのような暖水塊を発見したとき、九鬼は直感的に、暖水塊が海面近くに浮いたまま拡散することなく北上し、日本列島沿岸に大量の熱を運んでくるような気がした。その瞬間、彼は高緯度地域へ大量の熱を短い期間に運ぶメカニズムが解明され、急激な温暖化をもたらす「急激な気候変動」のメカニズムが氷解したように感じたのだった。

だが暖水塊が途中で拡散することなく、高緯度地域へ到達することはそう単純なことではない。

暖水塊が大量の熱を抱えたまま、中国大陸（日本列島）に沿って北上し、途中で消滅することなく、暖水塊が高緯度地域へ到達する条件はなにか。これが分かれば、同様に、北米大陸東岸に沿って北上するメキシコ湾流に浮かぶ無数の暖水塊も途中で衰えることなく北大西洋海流へ乗り移り、北極海へと突入していく条件も明らかになるのだ。

このメカニズムを解明できれば、高緯度地域における急激な気候変動のメカニズムが解かれたことになる。北極海に到達して行き場を失った暖水塊群が巨大な暖水プールを形成し、急激な温暖化をもたらす大量の熱を北極圏へ放出することになるからだ。

彼は頭の中で何度も、日本列島に沿って北上する黒潮（赤道付近から北上し、黒潮続流として北太平洋から北米西海岸をめざす大暖流の日本列島付近での呼称）に乗って移動する暖水塊の様子を思い描き、そのための条件を詰めていく。

北極海から押し出されてベーリング海を南下する冷たい海流が親潮（千島海流・寒流）となつて北上する黒潮（暖流）を抑え、暖水塊の行く手を阻むのじゃないか。それとも黒潮の暖水塊が寒流に取り込まれて熱を奪われ、途中で拡散して消滅することにはならないのか。北の寒気に遭遇すれば、大気は熱を奪われて暖水塊が冷水塊に変貌するのではないか。高緯度地域に到達する前に蒸発を繰り返して塩分濃度を増し、水温を下げて重い海水となり海中深く潜り、深層水となつていくことはないのか。

彼は頭の画像を大西洋に切り替える。

メキシコ湾流が北大西洋海流となつてアイスランドの横を通り抜け、北極海へと突入するところだ。

疑問が疑問を呼ぶ。彼は疑問を一つ一つ潰していく。だがひとつが解決したかと思うと、新たな疑問が湧く。ことに南下する寒流が難問だった。この問題を解決できなければ暖水塊が北極海へ到達することはないのだ。

ふたたび、画像を切り替える。

強力な親潮が北上する黒潮のバリアーとなつて向きを東に変えようとする。正面衝突した黒潮はなんとか親潮を乗り越えようともがく。だが正面衝突すれば暖流である黒潮の暖かく軽い海水が親潮の上に乗って表層を流れ、寒流である親潮の冷たく重い海水は黒潮の下に潜り込むのではないか。かといって、黒潮の表層を北上し続けても、暖水塊がそのままいつまでも北上しつづけることはできない。親潮の表層を流れる黒潮も徐々にエネ

ルギーを失い、やがて力尽きてしまうのじゃないか。

彼は考えたことを整理し、頭の中で何度もシミュレーションを繰り返す。

こんな作業を飽きることなくつづけながら、毎日ディスプレイに映し出された衛星画像で暖水塊を追っていた。

東沙諸島で暖水塊が引き裂かれたようにふたつに分かれた。一方は台湾海峡に向かい、他方はバシー海峡に方向を変える。だが台湾海峡に向かった暖水塊は北上を止め停滞したかと思うと、そのまま後退しはじめた。南下する海流に行く手を阻まれたらしい。

やがて南下する海流に合流してしまうと思われた暖水塊はくると反転し、台湾の南端を回ってバシー海峡へ方向を変え、先に通過した暖水塊を追っていく。先を行く暖水塊は南西諸島の沿って東側をどんどん北上しつづける。遅れた暖水塊は負けじと後を追うが、台湾に寄り過ぎたのか南西諸島の西側に入り、東シナ海を北上する。

彼は呆れ顔でディスプレイの画像を見守った。一体、どうなっているのか。かなり強固なバリアーが暖水塊を包んでいるにちがいない。

不意に、脳裏に水のなかでもがいている黒い物体が浮かんだ。彼は慌ててディスプレイに焦点を合わせ、暖水塊を探した。ふたつに引き裂かれた暖水塊は前後に分かれ、互いに引きあい追うように連なつて台湾の南の海上を北上していた。

彼は大学の研究室に佐々木教授を訪ねて、暖水塊のことを話してみようかと思つた。

ディスプレイの画像を消して机から立ったとき、彼はふと、脳裏を過つたあの黒い物体は妻の子宮のなかで羊水に浮いている小さな生命体であつたような気がした。その瞬間、ひとつの考えが閃いた。

「この暖水塊は赤道付近で形成されている暖水プールから分離したものでようですが……」

九鬼はおそろおそろ考えていることを話す。

佐々木教授は相変わらず小さな金壺眼を凝らして、じつと暖水塊の写真を見ている。

研究室を訪れるなり、挨拶の言葉を交わす間もなく、彼が手渡したディスプレイから写し取つたコピーだった。

インド洋東部から太平洋西部にわたる赤道付近の熱帯海域においては、海面水温は年平均で二十九度を超える。強い日射を受けて暖まった海水が貿易風に煽られたり、熱帯特有の激しい降雨による大量の淡水供給があるうえ、さらに複雑な海流の流れなどが重なつて暖水プール（ウォームプール）が形成されるのだ。

「今年は近年にない規模の暖水プールが出現しているらしいが……」

教授は顔を上げて、些か少年のような含羞みを湛えた人懐っこい笑顔で九鬼に向けた。彼は亜耶子の突き出た大きな目と似ても似つかない窪んだ眼窩の底で光る小さな目を見るたびに、この二人が本当の兄妹か分からなくなつてしまう。

佐々木俊太郎は三十歳そこそこで教授になった。九鬼は佐々木が教授になつたばかりの頃に大学院を了え、助手になった。若い教授のもとでいつまでも助手では可愛そうだと、そのころ気候変動予測モデルの開発を手がけはじめて何度も相談に乗つたことのある海洋科学研究所に彼を無理やり押し込んだのだ。九鬼は自分の間助手をつづけるつもりでいたが、亜耶子が彼に内緒で新しい勤め先を兄俊太郎に頼み込んでいたらしい。



「すると、今年のエルニーニョは最大級というわけですか」

エルニーニョはペルー沖の赤道域から中部太平洋にのびる広い範囲の海面水温が平年より数度高くなる現象で、ペルー沖の東風が弱まると、強い西風でインド洋東部赤道海域まで張りだした巨大な暖水プールが東に流されて起こる。

今年は海水温二〇度の等温線深度がすでに二〇〇メートルを超える最大規模級の暖水プールが形成されているという。平年なら三、四ヶ月でこれが一八〇メートルほどなのだから、二〇〇メートルを超えているとすれば暖水蓄積がかなり進んでいることになる。

エルニーニョが発生すると、インドや東南アジア、アフリカ南部に干ばつ、ペルーやブラジルに洪水など、世界各地に異常気象をもたらす。もちろん、北米でも西部に多雨、中西部に小雨が見舞うなど、多大な影響がおよぶ。

「ところで、きみの考えでは北極海に『エルニーニョ』が発生するということになるな」

「北極海に『エルニーニョ』ですか」

凶星を指されて呆気にとられている九鬼に、教授は「そういうことだろう」といわんばかりに悪戯っぽく笑った。

「そうだ。その仮説を一度学会で発表してみてもどうかね」

「でもまだ裏付けるデータはないし……、無視されるだけです。北大西洋海流をとうせん棒している北極海から流れ出る寒流の勢力が衰えるからといって、北極海に『エルニーニョ』が発生するなんて誰も信じてくれませんよ」

「ぼくの名前を貸すよ」

「え？ ご冗談でしょう」

「北大西洋ではメキシコ湾流に乗って北上した暖まった海水が蒸発を繰り返して高塩分濃度の海水となる。北極海からの寒気に触れて水温を急速に低下させてさらに重い海水となつて深層に潜り、深層水となつて海底深くへと沈んでいくんだね。だとすれば、高緯度で寒気と出会ったときに、熱を奪われなければ、暖水塊は北大西洋からそのまま北極海の表層に流れ込むはずだ。きみはそのメカニズムをどう考えているんだ」

佐々木は九鬼の考えを先取りするかのようになり、九鬼が説明した日本列島の太平洋側を北上する黒潮シミュレーションモデルをそのまま北米東海岸のメキシコ湾流に置き換えていた。

九鬼はあえて言及しようとしなかったが、考えに考えたすえに閃いた結論はまさにメキシコ湾流が黒潮の北上に先行して北極海へ大量流入するというものだった。

メキシコ湾流の暖水塊が北大西洋を通り抜けて北極海へ突入し、北極海がまず温まる。北極海が暖まればベーリング海へ流れ出る海水温が上昇し親潮の勢力が弱まるのではないか。その結果、黒潮が親潮を押しつけて高緯度地域へ入り込むようになるかもしれない。こうして北極圏や高緯度地域がさらに暖まれば、極や高緯度における温暖化が一挙に進み、地球規模の急激な気候変動がはじまるのだ。

だが黒潮が親潮を押しつけて高緯度地域へ入り込むようになるというのは突飛すぎる。北極海からベーリング海へ流れ込む海水の水温が上昇して寒流でなくなると考えるほうが妥当かもしれない。となると日本列島の周囲が暖水塊に埋め尽くされてしまうのか。

「暖水塊が途中で熱を奪われずに北極海に到達するには……」

佐々木は北極海『エルニーニョ』化に関心があるらしい。

「それは……、暖水塊の表面に熱の伝達を妨げるフタのようなものがあれば可能かもしれませんが……」

海洋の平均水深は約四〇〇〇メートルある。海のなかでは一見海水がよく混ざり合い均一の状態になっているように見えるが、決して海水が均一の状態にあることはない。水温が違ったり、溶け込んでいる塩分濃度などの違いによつて密度に違いがあれば、海水はなかなか混じり合うことがないのだ。

北極海で海水ができやすいのも、この海水が混じりにくいせいだ。これは表層に近い混合層の直ぐ下に、水温がほぼ結氷水温で深度とともに塩分濃度が増す「冷たい塩分躍層」が存在しているからである。これがフタの役目を果たし、その下に潜り込んでくる大西洋起源の高温・高塩分の暖かい大西洋海水が海表面の冷えた海水と混じり合わないようにしているのだ。

「その『冷たい塩分躍層』が北極海の『エルニーニョ』発生をも妨げることになるか」

このような躍層でもさらに重い海水には無力で、高塩分で冷たく冷えた超重量級の海水となると、躍層を破つて水深数千メートルもの深海底へと潜つていくが、微妙な塩分濃度によつてこの躍層を破れず、その上に留まっていることもある。

暖水塊が海表面に浮いたまま北極海に到達してしまえば、まさに北極海に「エルニーニョ」の発生ということになるのだ。

「北大西洋に流れ込んだ高温・高塩分の大西洋海水の流れが大気中に熱を放出して表面から冷えていくならば、まるで皮が剥けるように、大西洋海

水の表面から冷えた海水が剥げ落ちて深層へ潜っていくのだろう。だがこれを妨げるものにはどんなものがあるかね。可能性のあるものといえば……」

「暖水塊を形成する大西洋海水よりも密度が小さい……、塩分濃度の低い汽水か淡水（真水）か。そうだ、淡水の層が被膜のように覆っているからだと考えることができませんか」

「淡水層で覆われた高塩分濃度の暖かい海水の塊、これが北上する暖水塊の正体だというんだね」

「でも、北極海から南下する寒気をくぐり抜けて暖水塊のまま北極海まで北上しつづけることができるかどうか」

「それはこう考えればいい。北上する暖水塊を抱えた海流（暖流）が途中で熱を放出してしまえば水温を低下させて勢力を弱めるか消滅してしまうが、もし暖水塊が熱を奪われることなく北上しつづける条件が整うならば、暖水塊は北極海へ入っていくだろう。南下する寒流に遭つても、もし寒流の冷たい海水が重ければ暖水塊の下に潜ることだろうし、もし軽ければ暖水塊の上に乗るだろうから、密度差があれば両者が正面衝突して混合してしまうことはないだろう」

「でも冷たい海水の下層に暖水塊が潜り込んでしまうとこれまでと変わらないんじゃないんですか。暖水塊が北極海で冷水塊と正面衝突してもそれに打ち克ちエルニーニョ発生というわけにはいきませんか。北極海の高温化が急激な気候変動発生メカニズムじゃないかと睨んでいるんですが……」

「それは簡単だよ、密度差だけの問題だから。そのような条件を考えさえすれば、理論的に一応説明がつく」

「北極海に『エルニーニョ』が出現するとどうなるんですかね」

「北極海が高温化する。氷床は完全に解け出し、海が拡がり、海水の蒸発が盛んになり、大量の水蒸気が大気中に舞い上がり、積雲が形成される。やがて激しい降雨か降雪に見舞われることだろう」

「急激な気候変動のパターンのように、急速に温暖化してから徐々に寒冷化していくことになるのですかね」

「まあ、おおまかなシナリオはそんなところかな。ところで、北大西洋のほうはいいとして、北太平洋はどうかね。暖水塊がベーリング海を通り抜けて北上できるかどうか。親潮に吞まれて途中で消滅してしまうかもね」

「それはですね……」

九鬼はようやく考えついたアイデアを詳しく話す。

「……まあ、北大西洋から暖水塊が北極海に入り、海水を温め、そこが温暖化すれば、親潮のエネルギーが急速に弱まるにちがいありませんよ」

「そうか。なるほどね。北極海へは北大西洋からの暖水塊の流入が先行するんだね。ところで、日本列島に近づいてくる暖水塊の規模はどのくらいになるだろうか。これを徹底的に調べてみてはどうか。親潮の勢力が弱まれば、日本列島の周りの海水温がかなり上昇することになるかもね。とにかく詳しいデータがほしい」

「そうなんですよ。規模もそうですが、この暖水塊がどんな高温の水塊を抱えているか是非知りたいところです」

二〇〇一年七月に沖繩本島に接近した直径数百キロメートルの大渦は真下に大きな暖水塊を抱えていた。中心部には周辺海水よりも三度も高い高温水塊があった。高温水塊は水深三百から六百メートルあたりに直径数十キロメートルにわたって広がり、水温は周辺より三度ほど高かった。

「渦の大きさと暖水塊の水平方向や垂直方向への広がりとは関係があるのかな」

「画像では分からないので、一度、実際に暖水塊周辺の垂直水平の温度分布を是非観測しておきたいところなんです……」

「きみのところで観測できないのかね」

「それが……」

「突然、急激な気候変動が発生すれば、センサーである電力ばかりでなく、多方面に大きな影響をおよぼすと思うけどね」

「それはそうなんです……」

「暖水塊群が日本近海に現れたらどうなるの。発電所にも直接大いに影響するんじゃないの、たとえば……」

「日本海側には原子力発電所が集中立地しているところが何か所がある。

太平洋側にもありますね」

「冷却水に大量の海水を利用しているんだよね……」

「だから、どうしても一度観測しておきたいわけです。データがないと暖水塊の動きや拡散メカニズムも把握できないですから。急激な気候変動が生ずれば、電力だけの問題では済みませんし」

九鬼は研究成果をマル秘扱いとすると厳しく言い放った北原に激しい反発を覚えながら、彼の狡そうな目を思い浮かべた。

6

「日本の臨海発電所では冷却水用海水の水温のいかにかかわらず、復水器

での海水温度上昇は一定の値、大体七度アップ程度で設計・運転されている。だから、発電所にとっては海水温度が何度になろうと問題にならない」  
 頭髪が後退した広い額のせいいかにも尊大な感じのする男は目を下から上に動かし、九鬼を値踏みするかのようじろじろ眺め回してから、棒読みのような一本調子でぶっきらぼうに言った。同じ研究所の柏田だ。

九鬼は柏田の大きな顔を縫る思いでじつと見た。彼は海水温度上昇が発電所にとってどんなダメージをおよぼすのか具体的に知りたかった。冷却水用海水が高温になると発電所に悪影響をおよぼすという佐々木教授の指摘の裏付けが欲しかった。

彼は暖水塊を観測しておきたかった。そのためにも発電所への影響に関するデータが必要であった。

海水温データがマル秘扱いになれば関連のデータまでマル秘となる可能性がある。そうなれば、データなしで「急激な気候変動」の理論モデルを提案せざるをえないが、これでは誰も相手にしてくれない。

彼は北原によって依頼研究の網を被せられるまえに、もう一度、ノンリニアタイプの急激に起きる気候変動を予測するためのモデル開発を提案してみようと思っていたのだ。

彼は八方塞がりの状態にあった。この事態を打破しなかった。

彼はあえて中西に頼み込み、冷却水に詳しい水理部の柏田という研究員を紹介してもらった。彼はその足で水理部の研究室を訪ねたのだった。

柏田が属している水理部は九鬼の研究室がある環境部のフロアのすぐ上のフロアにあった。

「あの……、復水器というのは……」

額の禿げ上がったいささかニヒルな感じの大柄な男は九鬼をじろりと見

て、そんなことも知らないのかといった態度をあらさまにした。

「蒸気タービンから出る蒸気（排気）を冷却して凝結させ、再び水に戻すための装置だ。まあ、熱交換器といつてもいい」

「冷却装置みたいなものですか……」

火力発電所や原子力発電所など、蒸気でタービンを回転して発電する汽力発電所では、蒸気タービンの熱効率を向上させるためには蒸気圧を極力高くする一方でタービンからの排圧を極力低くし、回転を高速にする必要がある。蒸気は水に熱を加え沸騰させてつくり出す、一度仕事を終えた蒸気でもこれを冷やして一部を凝結させて水に戻せば、体積が小さくなるのでその分真空度が増え、さらに利用することができる。汽力発電所ではこのようにして熱効率を高めているが、蒸気を水に戻すための装置が復水器である。

復水器は金属の細管を何万本も束ねた中を水などの冷媒（冷却水）を高速で流し、細管のまわりを通る蒸気など熱をもつ物体から熱を奪い、急速に冷やす仕掛けだ。

一一〇万キロワット級の大容量の原子力発電所になると、復水器の冷却用に用いる海水の量も半端ではない。このクラスでは、毎秒七〇立方メートル（七〇トン相当）におよぶ大量の海水をポンプで循環させている。循環用ポンプに要する電力は発電所が発電する総発電量の一パーセント近くに達する。一一〇万キロワット級で二万キロワットほどだ。

一基の発電所で一秒間に七〇立方メートルの量の海水が冷却用として海から取水され、超スピードで復水器を通り、七度昇温した海水が温排水として海へ放出される。七〇立方メートルといえば二リットル入りのペットボトルが三万五千本だ。これが一日では三十億本を超える量になる。この

クラスの発電所が数基連なっている原子力発電所集中立地地点では利根川級の河川の水量に優に匹敵する量の温排水が海へ毎日放出されるという。

「……ところで、その復水器を通過して出てきた温排水が出口で七度アップというのはなぜですか」

「そう決められているのだ」

相変わらず、ぶっきらぼうな応えが返ってくる。

海洋にはさまざまな生き物が棲み、独特の海生生物生態系を形作っている。毎日大量の海水をかなりのスピードで取水すると、海水と一緒にそこに棲息するプランクトン、小型の魚類や魚介類の卵稚仔などが取り込まれ、復水器を通過するとき、急激な昇温ショックを受け、多くの生物は死滅する危険に曝される。死滅を防ぐぎりぎりの線が七度アップだというのだ。

電力会社は発電所立地に際して、復水器を通過する冷却水（海水）の昇温を七度の抑えるほか、放出される温排水によって海面水温が一度以上上昇する範囲にわたり漁業権の消滅を図る。

温排水の拡散範囲は放出量や放出速度のほかに、海域の海象条件などによって左右されるので一概に言えないが、毎秒七〇立方メートルのケースでは水温一度上昇範囲は放出口を中心に前方二キロの左右それぞれ一キロ強に広がる扇形となる。発電所が集中して立地され、温排水の放出口が連なるようになると、拡散範囲は複雑な形状を示す。冷却用海水の取水口と温排水の放出口が近いと、場合によって放出されたばかりの温排水を冷却用水として取り込んでしまうこともありうる。

「復水器の設計段階で海水温が決められているのですか」

九鬼は柏田のぶっきらぼうな説明を聞きながら、海岸や海中に設けられた放水口から吐き出された七度高い温排水が温水塊となつて海面に広がっ

ていく様子を頭に浮かべる。放水口から押し出された七度高い温水塊は先端部で周辺の水温の低い海水と衝突し混じる合つて希釈され水温を下げていくが、次から次に吐き出されてくる温排水に押されて高温の先端部がさらに先へと押し出していく。そして二キロ先まで一度高い温海水域をつくる。

「七度という上昇限度が決まっているから、これに設計海水温度を設定して、その条件下でもつとも効率の良い熱交換システムを設計することになる」

柏田は自分の声に酔ったように詳しい説明をつづける。

復水器の設計では設定温度上昇限度を前提にして、海水温データに基づきもつとも費用対効果の良い交換器を目指す。これには伝熱管本数、伝熱管有効長さ、伝熱管外径・内径、伝熱面積、伝熱管材料熱伝導率、伝熱管汚れ熱抵抗、循環水質量流量、設計管内流速といったことを考慮しなければならぬ。

伝熱管は直接蒸気と海水が接触するところだから、この材料には海水や熱に強いうえ、熱伝導率が高い材質で加工しやすく値段もそこそこのものが求められる。一一〇万キロ級の原子力発電所用の復水器では伝熱管にチタンが使われているが、伝熱効果を高めるため、〇・二五ミリほどの紙のように薄いチタン板で内径二五・一五ミリ程度の細い管に仕立てる。その細管のなかを海水が超スピードで通過するのだ。

発電所向け復水器には年平均気温別に寒冷地向け、標準地向け、温暖地向けの三種類がある。熱交換の心臓部には一本の長さが約十三メートルから十七メートルほどのチタン細管を六万数千本ほどを束ねて用い、秒速二・数メートルで毎秒七〇トンを超える海水を流し込むが、延べ伝熱面積は六

万数千平方メートルから八万数千平方メートルにもおよぶ。温暖地向けのほうが、細管の長さが長く伝熱面が大きくなる。

「海水の水温に応じて循環水量を調節するということはしないのですか」

「そうするのが一番合理的のようにみえるが、そのためには海水温に即応できる大容量の循環ポンプを用意しておかなければならない。これには多額の費用がかかる。それにもう二つ問題がある……」

表面から水深数メートルの海水温は日変化が二度から三度あるうえ、季節変化が激しい。東北地方の日本海岸では冬季と夏季では二〇度も違う。

「……ひとつが伝熱管内部の汚れ、付着生物の問題だ。水温が低下して水量を減らせば循環水の流速が落ちる。そうすると伝熱管内部に貝類などの付着生物が付着して、伝熱効率が低下してしまう。かといって流速をあまり早くすることもできない。海水中に取り込まれている魚卵稚仔に影響をおよぼすからだ……」

復水器の細管内を流れる海水の速度すなわち流速にも制約があるのだ。

「……もうひとつの問題は冷却水の水量を変えるたびに温排水の放出量も変化し、それにともない温排水の拡散範囲も変化することだ。ことに海水温が高い夏場に温排水の量が大量に増えれば、一度上昇の温排水の拡散範囲が途轍もなく拡大してしまう。夏場を対象に漁業権を消滅することになれば、補償金が莫大になる」

このような循環ポンプを設置すると、漁業権の問題のほかに、建設費用ばかりでなく、それを運転する動力もバカにならないのだ。

「復水器を年平均気温別に寒冷地向け、標準地向け、温暖地向けの三種類に分け、設計海水温度を一三度とか、二一・〇度とか、二七・五度とかに設定してそれぞれに専用の循環ポンプを設置しているということですか」

「そういうことだ」

九鬼にはもうひとつ聞きたいことがあった。だが両手を頭の後ろで組み、まるで「分かったか」と云わんばかりの態度で椅子に踏ん反り返っている禿げ上がった額のいかにも尊大な大きな顔を間近にしていると圧倒されてしまい、彼はそこそこに礼を言い、無意識のうちに腰を上げてしまった。

「設計海水温度より水温が高くなっても低くなっても、発電所の発電能力は落ちてしまうんですね」

九鬼は忘れていたことを思い出したようにドアのところまで振り返ると、尊大な大きな顔に匕首を突きつけるようにじつと見て、再確認するように言った。

柏田は急に暗い顔になって九鬼をじつと見つめかえしていたが、すぐ彼の考えていることを見透かすような目をして付け加える。

「設定水温より海水水温が一度上昇すると、熱出力が一定であれば、電気出力は〇・一五から〇・二パーセントほど低下する。夏季に焦点を合わせて、設計海水温度に夏季最高海水温度を採用していても、地球温暖化が進んで海水温度がそれ以上に極端に上がると問題だ。ことに原子力発電所ではかなりの出力低下を余儀なくされるだろう。とにかく夏場が問題だ」

「夏場が問題か」

九鬼の頭のなかで余韻のように柏田の声が響いていた。

7

「現代文明のアキレス腱か」

九鬼が机で暖水塊が発電所を襲ったときの問題点を整理しているとき、口から不意に吐いて出た。彼は自分でも驚き、もう一度吐いて出た言葉を思い返す。

一瞬、暖水塊に襲われ喘いで格闘している巨大な復水器が浮かんだ。

温和な気候のもとで構想され、温帯から亜寒帯にかけて隆盛を誇る現代文明にとって突然の急激な気候変動による気温や海水温の上昇は想定外なのだ。温帯や亜寒帯の地方で急激に温暖化が進めば、現代文明社会は対応できず、大混乱に陥ることだろう。

九鬼は柏田の暗い顔を思い返した。

柏田はなにか重大なことを隠しているにちがいない。彼はもう一度

柏田とのやり取りを思い起こした。

柏田は最初、問題がないと言い、帰りしなになって、夏場が問題だ、と言った。それはなぜか。一体、どこに問題があるというのか。冷却水に用いている海水の水温が復水器の設計海水温度より高くなると電気出力が低下するといっても、一度アップでたかだか〇・二パーセント程度の減じやないか。温暖地向けプラントで、設計海水温度を二七・五度としてあれば、暖水塊の水温が三五度であっても七・五度のアップで電気出力低下も一・五パーセント程度に過ぎない。

彼はあれこれと必死にヒントを探す。だがそれを邪魔するかのようには、柏田のいかにも尊大そうに見える大きな顔が脳裏に焼き付いたまま離れようとしなれないのだ。彼は柏田の大きな顔を追い出そうともがく。

彼は迷路に入り込んでいた。頭のなかで同じことをぐるぐる周回して、何度も考えて解決口を見出せずにいた。とうとう考えることを放棄して、彼は机から離れた。急に空腹感が襲ってきた。昼飯はまだだった。時計を

見ると二時をまわり、職員食堂の給食時間はとくに過ぎていた。

研究室は大部屋方式で、壁と窓に向けて机が二つずつ並び、中央に大きな作業机が置かれている。実験室に行っているのか、研究室には彼のほかに人影がなかった。彼は研究室を空にしているのか一瞬迷い、ドアのところ立ち止まった。足音がして、ひとりの研究員が戻ってきた。隣の机の高木という若い研究員だった。

「発電で一・五パーセントの出力低下というのは問題になりますか」

九鬼は藁をも掴む思いで聞いた。

「さあ、大きいといえば大きいし、ゴミのようなものといえばそうだし……」

「二〇〇万キロでは一万五千ですよね」

と念を押してみたものの、九鬼には暖水塊の水温が果たして三五度にもなるか疑問に思えてならなかった。

彼はドアから離れて廊下に出た。もう一度柏田を訪ねてみようかと思っ

た。

水利部のフロアにまわり、柏田の研究室を覗く。席は空っぽだった。

階段を降りかけようとしたとき、階段脇にあるエレベーターが止まって扉が開いた。誰も乗っていない。彼はしばらく突っ立ったまま、横目で空のエレベーターのなかを覗いた。乗り込もうかと身体向きを変えたとき、目の前で扉が静かに閉じた。

そのときふと、むやみに循環水流量を増やせないことを思い出した。設計海水温度を超えた海水が復水器に入るとどうなるか。復水器の設計温度上昇は七度だ。海水温度の上昇限度を七度に抑えるなら、それを超えるときは循環水流量を増やさなければならない。だが海水循環ポンプの容量が

決まっただけで循環水流量を変えることができない。とすれば、復水器を通過する海水温度は瞬く間のうちに七度を超えることになるだろう。ではどうなるか。

彼はゆっくり階段を下りていった。思い直して途中から引き返して席に戻ると、受話器を取った。

「東野ですが……」

電話の呼び出しベルが鳴り出した途端、受話器が取り上げられたらしく、低音の音が響いてきた。

「あのう……突然ですが……」

九鬼は慌てて口ごもる。

彼はなんとかしてノンリニアタイプの気候変動に関する研究を自主研究として立ち上げたかった。彼は最初、柏田から聞いた事柄を整理して、もう一度中西に話してみようと考えていたが、この件で激しくやり合ったことを思い出し、途中で握りつぶされるくらいなら、いつそのこと、直接、所長に直に話したほうが早いだろうと思いついたのだ。

「環境部の……九鬼ですが……、一寸、ご相談したいことがあります……」

「これから本部にいきますが……、急ぐことなら本部に五時にきてください」

東野は山の手のマンションに住んでいて、本部に出たときは直に帰宅し、研究所に戻ることはなかった。

彼は一刻も早く会って話したかった。本部なら中西にも邪魔されることもあるまい。三時から会議があるという所長と五時に本部で会う約束をして、彼は資料を整えると、研究所を飛び出した。

途中で遅い昼食を取ったが、約束の時間より大分早く都心にある本部に着いた。

海洋科学研究所の本部は古いオフィスビルの八階にある。フロアの三分の一のスペースを大小に仕切り会議室として利用しているが、九鬼が待っている控え室にも隣の会議室から話声が洩れていた。

壁の時計の針は五時三〇分を指している。彼はふと東野が約束を忘れて帰ったのかもしれないと思った。柏田から仕入れた話もなんとなく頼りなく思えた。現代文明のアクセラレーターかと思えたのに、やはり電力会社には海水温度が多少高くなってもそう問題にすることもないのかもしれない。暖水塊を発見したからといって、大騒ぎしてノンリニアタイプの気候変動に関する研究計画を立ち上げるほどの材料にならないのではないか。

彼は中西に邪魔されずに済むと思いい、所長と会うために本部までやって来たことを悔いた。

細長のテーブル一つだけの壁で囲まれた窓のない小さな室のなかで、燃えに燃えていた気持ちが萎え、気持ちが次第に沈んでいく。彼は心細くなり、息苦しさを覚えた。彼は椅子から立ち上がると、壁とテーブルの間の狭い空間を歩き出した。

一周して時計を見た。針は殆ど動いていない。五分待つて東野が現れなかったら帰ろうかと思つた。

「待たせましたね。会議が長引いてしまつて」

振り返ると、開いたままにしていたドアのところの小柄な東野が立って、じつと九鬼を見つめていた。

「お忙しいところを……」

九鬼は口ごもりながらテーブルを回り、東野と向かい合う位置の椅子を



引いた。東野の端正な造りの顔を真つ正面にして一瞬怖気付いたが、初めて会う彼に向けられた明るいこやかな笑顔に次第に落ち着きを取り戻した。彼は暖水塊のことを話し、一気に、発電所への影響を懸念して、ノンリニアタイプの気候変動の研究を自主研究として早急に立ち上げるべきだと訴えた。

「中西くんは反対なのですね」

東野はわざわざ本部まで押し掛けてきたことを察するように言う。

「はい。でも取りあえず、例の暖水塊のデータだけでも取って置きたいのです」

「分かりました」

東野は微笑みを残して去っていった。

## 第二章

8

「最近、一〇年程の短期間で急激な気温上昇をもたらす『急激な気候変動 (Rapid non-linear Climate Change)』の痕跡が世界各地で見つかって以来、地球温暖化研究は新しい局面を迎えています。」

現在当研究所は『緩慢な気候変動』ともいうべきリニアタイプの『気候変動予測モデル』の研究に取り組んでいます。そろそろ新たに『急激な気候変動』の研究にも着手する時期にきています。以下、お手元にお配りしてある資料に基づいて説明させていただきます……」

東野は一呼吸おき、出席者に目を走らせ、それぞれの手元に資料が行き渡っているかを確かめた。

定例の経営推進会議は理事長、専務理事、常務理事をメンバーとして構成され、毎週火曜日十時に理事長室に近い役員小会議室で開かれる。会議室には細長の会議用机が中央に正四角形に配置され、理事長を中心にして専務理事と常務理事が左右に席を取る。これに事務局として企画部長が加わる。議題の必要に応じて担当理事や関係所長が加わることがあった。

今日の会議には六つの席が用意されていた。東野の席は廊下に通じるドアのすぐ近くで、田中理事長と正面に向かい合う。田中は電力会社で副社長まで勤め上げた頭髪の薄い男で、口がうまいという評判だった。

東野の左手の窓側には理事長とは別の電力会社から派遣された専務理事が席を取り、専務と並んで、官庁OBである常務理事の席があった。右手

のドア側には専務理事と向かい合せて研究所生え抜きの村井という常務理事が座り、その隣が企画部長の席であった。

「それでは『急激な気候変動』の研究計画についてですが、提案理由は……」

東野はA4版の資料を手元に引き寄せ、提案理由につづき研究の必要性を訴えた。五年にわたる研究計画の概要を述べ、来年度からの研究開始に先だつて、本年度中に現在日本列島沿いを漂流している暖水塊の観測を行ないたいと結んだ。

「『急激な気候変動』というのはこれまで考えられていた地球温暖化とは異なるということですか」

田中は自信のなさそうな薄笑いを浮かべて、東野を見た。

「はい。これまで研究してきたのは、二酸化炭素などの温室効果ガスが増えるに連れて徐々に気温が上昇して地球が温暖化するケースでしたが、新しい研究計画で取り上げようとしているものは徐々にではなく、突発的に急に気温が上昇するケースです。急激に温暖化すればそれだけ環境におよぼす影響も激しいものになると考えられます」

「両者の違いは『急激か』『急激でないか』の違いですか」

「はい。そう言ってしまうばそう言うことになります」

「なぜ、ひとつの課題で、両方を研究しないのですか。新しい研究計画を立てる必要があるのですか」

東野は言われていることの意味を考えあぐね、理事長の顔をじつと見た。研究する必要があるならばわざわざ新しい研究計画を立てずにやれということなのか、それともまえの研究となぜ一緒に研究しなかったのかということか。

「以前は温暖化が急激に進むとは考えられていなかった。ところが最近グリーンランドの氷床から採取した水のサンプルを分析したところ、新しいタイプの『急激な気候変動』の証拠が見つかったということだね」

色白ののつぺらとした顔の村井という常務理事が口を挟んだ。研究所の生え抜きで研究を総括している。

「はい。そのとおりです」

東野はグリーンランド氷床の分析から見つかった急激な気候変動の痕跡について説明した。

急激な気候変動の原因はまだ明らかでなかった。ただ地球の気候変動にはさまざまな要因が複雑に絡み合っているが、そのなかでもとくに海洋大循環が深く関わっているらしいことが分かっているだけだった。

「この種の気候変動の特徴は一〇年単位の短い時間で気温が突発的に一〇℃以上も上昇するのですが、これまで考えられていたものと異なり、とにかく急激に気温が上昇しだすというのです。気温の上昇がピークを迎えるとゆつくりと寒冷化していくひとつの気候変動が終わりを告げるらしいのですが、その間、世界各地で異常気象や気候異変が頻発する恐れがあります。いまのところ、なぜ急激に気温が上昇するのか、世界中でいろいろ考えられています。まだそのメカニズムが完全に解明されていません。実はうちの研究員のひとりとそのヒントを掴んだというのです。彼が言うには、暖水塊が北極海へ熱を運ぶというのです。そこで日本海を漂流する暖水塊について至急調査を行ないたいのです」

「その研究員は誰かね」

東野に向けた田中の小さな目がメガネの奥で光る。

「九鬼陽一郎です。一年程まえに途中採用した男で、それまで大学で助手

をしていたのですが……」

「当所の気候変動に関する研究はわたしが企画課長をしていたときにはじめたものですが、アメリカとの共同研究やら、当初からなにかと注文が多く、それにこれといった成果もあがっていないようなところがあって……」

ふたたび、色白の常務理事だ。

「それは言い過ぎでしょう。当所の気候変動研究はまさにゼロからスタートしたのですが、いまではかなりの水準に達して国内外の学会でも認められる存在になっているじゃありませんか」

東野は珍しく大きな声を出した。

「当所の研究は学会に認められるまえに、スポンサーに役に立つものでなければならぬ。そうでないものは学会向けの単なるスタンドプレイに過ぎない」

村井という常務理事は最後に東野のほうに顔を向け、念を押すように言う。

「気候変動に関する当所の研究はもつとスパンの長いもので、どんな気候変動が予測され、その影響としてこんなことが考えられる、これに対してどんな対策が考えられるかといったデータを提供するものじゃありませんか。新しく提案している『急激な気候変動』においても同様です。もし急激に気候変動が起こるようなことになれば、激しい事態（影響）が社会を襲うことになるかもしれないのです。こういう情報を事前にスポンサーへ提供することこそ当所の使命じゃないのですか」

「なにもおつぴらにやることもないし、情報や研究成果もスポンサーにだけ知らせればよいことだ。これまでのようになにもかも新聞などマスコミに発表などする必要はないということだ。地球環境問題には深入りするこ

とない」

「そんなことで地球環境問題から逃げられるとも思っているんですか」

「大体、地球環境問題の研究は当所には馴染まないのだ。金がかかりすぎる。そういう研究は国に任せればいい」

「本当にほかの研究機関を任せればいいといわれるのですか」

「……………」

「とにかく、今回南シナ海で見つかった暖水塊が北上して日本列島に近づいているのですが、暖水塊が集中立地している原子力発電所に急接近する可能性があるのかないのか。もしあるとすればどんなルートでどのようなスピードで近づいてくるのか。接近すればどんな事態が生じるのか。そのためにどんな対策を講じるべきか……。といったことについて研究しておく必要はないのですか。これによって取り返しの付かないことが起きるようなことになってかまわないというんですね……」

「きみが心配することじゃない。暖水塊といっても沸騰しているわけでもないし、大丈夫だ。一体、原子力発電所になにが起こるというんだ。狼少年みたいなことをいってどうするんだ。先走って地球環境問題に深入りする必要は全然ないんだ」

村井は顔を紅潮させ、止めを刺すように言った。

しばらくの間、誰一人人口を開こうとしなかった。

「東野くん、その研究の担当者に誰を予定しているのかね」

理事長がおもむろに口を開く。

「当面はわたしが責任をもって担当するつもりです」

東野はかすかにほほ笑みを浮かべた。

「きみがね……」

「理事長、この件はこの辺でよろしいですか」

議論のころ合意を見ていた進行係の企画部長がすかさず口を挟んだ。

田中が頷くのを見て、東野は軽く会釈して席を立った。

9

急に九鬼に対する周りの視線が冷たくよそよそしくなった。

九鬼も村井常務理事と東野所長との激しいやり取りの噂を耳にしていた。

リーダーの中西を無視したばかりでなく、部長の了解も無しに、直接所長に話を持っていったことに対する反発が思ったより強かった。

九鬼はディスプレイを見ながら、胸の内に沸々と湧く怒りを持って余した。

かといって、明日にでも突然気温の急上昇が起こり、現代文明社会を半身不随に陥れるかもしれない急激な気候変動に対して手を拱いて傍観している気はさらさらなかった。彼は暖水塊の観測が難しいことが分かると、取りあえず、日本海での暖水塊の影響に関するデータを集めておこうと思った。

原子力発電所の集中立地地点を暖水塊が襲ったらどんな事態が発生するのか。一瞬、柏田のどことなくニヒルな感じのする暗い顔が浮かんだ。彼はなにかを掴んでおり、ひたすらそれを隠しているにちがいない。それはなにか。

彼の頭のなかに柏田が別れしなに言った出力低下のことがひかかっていた。専門知識のない初対面の九鬼に対して、つい気を許してしまい、不用意に洩らしてしまったのではないか。

九鬼は壁の時計を見た。一時五十分を過ぎ、食堂がそろそろ閉まる時間であった。彼は廊下に出ると、階段を駆け下りた。

前をゆつくり下りる作業服を着た大柄な男がいた。追い越そうと近づいたとき、その男が柏田であることに気付いた。

「あ、柏田さん、この前はどうも。実験ですか。作業服を着ると、全く別人のようになりますね」

振り返った柏田は大きな顔にニヒルな笑みを小さく浮かべただけだった。

二人は押し黙ったまま、前と後になって階段を下りていく。

「すみませんが、一寸、教えて欲しいことがあるのですが……」

背後からの九鬼の声が聞こえないのか、柏田は急に足早に階段を下りていく。

「あとで実験棟のほうに伺いますが、いいですか」

柏田の背に向って後ろから声をかけると、九鬼は追うのを止めた。

玄関のある一階ホールに出た。ロビーで数人の研究員が新聞を広げている。柏田はその中の一人と話を交わしていた。九鬼は柏田の横を通り抜け、玄関から外に出た。

実験棟はロビーのある本館と広い道を隔てた向こう側ある。彼は横目で実験棟を確かめながら、本館から少し離れたホールがある別棟へ向う。二階に職員食堂があった。

ホールは研究発表会などに使われることがあったが、設備が古くなって常時使われることはなく、昼食時を除けば、建物全体は深閑と静まり返っていることが多い。

エントランスから螺旋状に延びる階段を上り食堂に入ると、昼食の時間も終わりに近く、窓際のテーブルに一人の人影しかなかった。彼は食券と

引き換えにカレーライスの皿を受け取ると、コップの水とスプーンをお盆に乗せ、近くのテーブルに運んでいく。

窓から差し込んでいる陽射しにかすかに春らしい息吹があった。彼はぼんやりと陽が射し込む窓に目を向け、機械的にスプーンを口に運んだ。

暖水塊の動きが気掛りだった。暖水塊が日本の沿岸を通り抜け、どこまで北上しつづけていくだろうか。北大西洋と異なり、黒潮に乗った暖水塊が親潮に阻まれ、北太平洋からベーリング海を通り抜けて北極海に入り込むことはやはり難しいのではないか。北大西洋から流れ込む海流によって押し出されるようにしてベーリング海峡を通り抜けた北極海の冷たい海水が親潮になるとすれば、北大西洋から北極海へ流れ込む暖水塊が増えれば増えるほど、親潮の流速や流量が増大することになるのではないか。もしそうなれば、たとえ海水温が上昇しても日本列島沿いに北上する暖水塊は北から南下する親潮に阻まれ、これまでのように、東に向きを変え、東へ転進して北太平洋海流となり、北米大陸に向かってしまうことになるのか。それとも親潮の勢力が急激に強まれば、これによって北上する黒潮の流れが押さえ込まれ、行き場を失った暖水塊が日本沿岸に停滞することになるのだろうか。

カレーライスを食べたとき、食堂はすっかり静まり返っていた。昼食の時間がとくに過ぎていくことも忘れて九鬼はなおしばらく考えに耽っていたが、ようやく彼のほかに誰もいないことに気付くと、カウンターに食器を戻して外へ出た。

足は自然に研究室がある本館に向く。本館のまえまで来たとき、道路を挟んで斜め向かいにあるプレハブ造りの実験棟が彼の目に入った。

実験棟の開け放たれたままになっている扉の隙間から、九鬼は身体をす

り込ませる。

屋根を支えている剥き出しの鉄骨に直に据え付けられた蛍光灯が白い光を放ち、実験棟全体を占領している巨大な水槽を照らし出している。水槽は底を白いペンキで塗っており、浅く水が張ってあった。

よく見ると、水槽の奥のコーナーに海岸地形の模型が配置されており、模型の端から藍色のインクが流れ出て白い水槽のなかを広がっていく。

九鬼はしばらく水槽のわきに佇み、刻々と変化する藍色のインクが描く模様に見とれていた。

「温排水の拡散実験中だ」

柏田の声だった。九鬼に気付いて操作室から出てきたらしい。

「どこですか」

「K地点だ」

「……………」

「増設予定の分だ」

九鬼は黒い人影を頼りに水槽のまわりを回って、声が出たほうに近づく。

そこには研究室とは別の打ち解けた表情をした柏田の顔があった。別人となった柏田に誘われるように、九鬼の口も滑らかに動き出す。

「海水温度が上昇すると、原子力発電所の出力低下を余儀なくされると言うことでしたが、どの程度海水温度が上昇すれば、そのような事態が生じるのですか」

出力低下とはいかなる事態なのか、電気についての知識がない九鬼には皆目見当が付かなかった。発電所が止まってしまいうのか。

柏田は一瞬、戸惑った表情を浮かべた。

「原子力発電所では原子炉で発生する熱のうち発電するのに用いられてい

るのはほぼ三分の一にすぎない。残りの三分の二は捨てられているが、これをいかに効率良く捨てるかが発電効率を左右する」

蒸気でタービンを回して発電する汽力発電所では、燃料を燃やして高圧の蒸気を発生させるが、できた蒸気の一〇〇パーセントを電気に換えることはできない。この種の発電方式では熱を一〇〇パーセント利用することは無理なのだ。ことに、原子力は火力に比べ、捨てる熱が多い。現在の技術水準でも、原子力では利用することなく捨てる熱が全体の六〇から七〇パーセントにおよび、放出する温排水も当然多くなる。

「効率良く熱を捨てる……………のですか。そのための装置が復水器ということですね」

「そうだ。もし復水器の設計温度より海水温が数度高くなると出力低下が生じるだろうな。だがこれは一次的な問題だ。もしこれによって付近の海域で環境水温が著しく上がったたり、漁業権を消滅した補償範囲を超えて一度上昇範囲が広がることになれば、漁民や漁協は黙ってしまい。大変なトラブルに発展する可能性がある。こうなると出力を大幅にダウンするか、発電停止に追い込まれることになりかねない。それに……………」

柏田は一瞬顔色を変え、息を呑んだ。それきり口を開こうとしない。

「それに……………、一体なんですか」

九鬼はしびれを切らして言う。それでも柏田は水槽に目を向けたまま、一切反応しようとしなない。

「数度という……………、三〇数度ですか」

「日本列島の日本海岸や太平洋岸で、広範囲にわたって海水が三五度以上になることはまずありえないな」

柏田はようやく口を開くが、相変わらず、目を水槽に向けたまま、まる

で自分に言い聞かせるように言う。

「ところが、場合によつては、その程度の暖水塊ならさらに発生するようになるかもしれないですよ」

柏田は「まさか」といった顔付きをして振り向く。

「現に、南シナ海を暖水塊が北上している……」

なんの前触れもなく、九鬼の脳裏に暖水塊が発電所の集中立地地点を襲うイメージが現れた。その瞬間、放水口から吐き出された温排水の大きな塊が暖水塊と正面衝突して、つぎつぎと暖水塊のなかに取り込まれていくイメージが湧いた。

「ホントか、で、規模や水温は……」

「分かりません。先だつて沖縄を襲つた直径数百キロ規模の大渦は暖水塊そのもので、中心部の直径百キロほどに周辺より三度高い高温水塊を抱えていたことが気象庁の観測結果から判明していますよ。そこでいま北上し続ける暖水塊をぜひ観測しておきたいと思つていたんですが……」

「ふん、そういうことだったのか」

「え？ どういうことですか」

柏田は「中西がつんば棧敷に置かれたとつて怒つていた」と言い、ニヤツと笑つた。彼の耳にも経営推進会議の噂が届いているらしい。

「暖水塊の調査はやらんほうがいい。ヤバイ。やつても無駄骨だ」

「どうしてですか。もしかしたらこれは急激な温暖化を引き起こす因子かもしれない。もし急激に温暖化が進めば大きな影響があるはずですよ」

「大体、発電所からの温排水の拡散範囲が異常に広がるとか、出力低下をもたらすとかという内容の研究成果はまず公表できないだろうな。研究報告書はもちろんお蔵入りだ」

「お蔵入り？ 研究成果の公表ができない？」

九鬼には理解できないことだった。柏田によると、スポンサーにマイナスの影響をおよぼすおそれのある研究成果の発表は抑えられているのだという。

「だつて海洋科学研究所は学術研究機関でしょ。日本でも有数の研究機関じゃないんですか……」

「スポンサーのご機嫌を損ねちゃまずいと思つているんだな、いまのうちの経営管理層はね。それにスポンサーサイドにもそう言つて憚らないひともいるようだ」

九鬼には分からないことが多過ぎた。暖水塊の研究といつても、一概にスポンサーにとつて不利になるとは限らないではないか。暖水塊を事前に予測しておけばそれに対する対応策もゆとりをもつて準備できるはずだ。そうすれば被害を未然に防ぐことも可能となるのではないか。

また暖水塊のことを公表することによつてこのような問題があることを社会が知らされておれば、これによつてスポンサーに困つた事態が発生してもこれに対する社会の理解も得やすくなることだろう。反対運動をおそれ臭いものにフタをしてはいざというときにかえつて社会の理解が得にくくなるだけではないのか。

「暖水塊は必ずやつてくる。これを放置しておけばきつと取り返しつかない大きな問題へと発展するのじゃないんですか。さつき柏田さんが言いかけたことはなんですか。柏田さん、一体なにが起ころのですか。それをこのまま放つておいていいのですか」

柏田は遠くを見つめたまま返事をしない。九鬼は苛立ちを覚えた。自分ではどうすることもできない苛立ちだった。

「いくらもがいてみても、なるようにしかならない。推測でものを言っても誰も信用しない」

柏田がぼつんと言った。

「だから観測するのじゃないんですか。なにもしようとしなくてそんなことを言うとは無責任だ」

「じゃ、首を覚悟で、上の連中と喧嘩してでもやるか。この組織を飛び出してでもやるというのか」

「……………」

彼は柏田を見据えたまま、口を開くことができずにいた。

「企業も社会も現在のことしか考えない。先のことや未来のことは誰も真面目に考えようとしない。とにかく目の前のことが第一なんだ。何年も先のことはどうなっても構わないのだ。みな腐りきっている。こんな連中を相手になにをやるというんだ。無駄なことは止せ。腐った果実はひとりで落ちる。なにもしないで、ただひたすら待てばいい」

柏田はニヒルな薄笑いを浮かべると、それきり口を開こうとしなかった。

10

九鬼は研究室に戻ると、日本地図を広げ、ダメージが大きそうな原子力発電所の立地地点をピックアップしていく。だが仕事に集中しようとする、まるで邪魔するように、クビを覚悟しろよと言いたげな柏田のニヒルな薄笑いが浮かぶ。それと交差して身重の亜耶子が脳裏を過る。

その一方で、暖水塊が彼を急ぎ立て、追い詰めていく。

暖水塊の来襲をこのまま放置しておいていいのか。これから起こりそうな事態を予測し、スポンサーである電力会社にはもちろん、社会に対して事前に警告を発しておかなくていいのか。重大な事態の発生が予測されるなら、誰もやらない以上、最初に気付いた自分がひとりでもやるほかないのではないか。

ふたたび、亜耶子の顔が浮かんだ。彼女にどう説明するか。データもないのに、思い付きを言っただけで不安を醸し出すことにならないか。母体の不安が胎児に悪い影響を与えるのではないか。

九鬼は集中力を失い、机のうえに地図を広げたまま、身重の妻を思い、彼はどうしたらいいのか思いあぐねっていた。

突然、柏田が研究室に入ってきた。九鬼を認めると、ぬーと近づき「これ」と言っただけの一枚の地図のコピーを机に置いて出ていった。

コピーには日本海側に二カ所、太平洋側に一カ所の原子力発電所大集中立地地点がマークされ、それぞれのデータが書き込んであった。

日本海側の一カ所は大阪に近いW湾で、ここにはT、O、Mの三地点で一基出力規模合計約九七六万キロワットだ。これにすぐ近くのG地点分二基約一五二万キロワットを加えると、出力規模合計が一二八万キロワットとなる。これらの原子力発電所が数十キロ範囲の海岸線に犇めいているのだ。

さらに、そこから北東に約三〇〇キロ離れたK地点にもう一カ所、海岸線沿いに七基、出力規模合計約八二〇万キロワットの原子力発電所が十数キロにわたって並んで立地されていた。

太平洋側では、浜通りと呼ばれている海岸線のO、N地点に一〇基出力



規模合計約九一〇万キロワットの原子力発電所が約二十キロにわたって並んで設置されている。さらに、これらの原子力発電所を中心とする約五〇キロの海岸線に、北端に二〇〇万キロワット、南端に三二〇万キロワットのふたつの火力発電所が原子力発電所を挟むように隣接して立地してあった。

このほか、一カ所三〇〇万キロワット以上の出力規模の原子力発電所はH地点およびG地点などがある。

日本海側に二カ所、太平洋側の一カ所ある原子力発電所の大集中立地地点の三カ所だけで、出力規模合計二八五八万キロワットあった。これは原子力のほか、火力や水力などを含めた日本の全電力出力規模の約一五パーセントにあたる。

たとえ出力規模が一五パーセント程度でも、原子力発電所は常時継続して運転をつづけるので、全体の発電量は日本における総発電量の三〇パーセントを超える。とにかく、原子力では発電出力の規模が一五パーセントでも総発電量は倍の三〇パーセントを超えているのだ。

日本海側のK地点と太平洋側のO、N地点からは首都圏へ合計一七三〇万キロワットが送電され、東京と周辺三県に供給されていた。一方、日本のW湾一带にある原子力発電所から約一一三〇万キロワットが近畿圏に送られ、大阪を中心に供給されている。これら量はそれぞれの地域の需要量（消費量）の三〇パーセント以上を占めていた。

電気エネルギー（電力）はその特性から貯蔵しておくことが難しい。電力需要があればそれに応じてその都度電力を生産し供給するほかない。そのため、毎日その日の需要量を想定して、それに合わせて供給する量の電力を生産する必要がある。事故や想定ミスで電力供給量が不足するような

事態が生じると、予備用の電源（発電所など）を緊急に稼働させて電力を生産するか、余力のあるところから電力を融通してもらうことになる。

ここにもうひとつの重大な問題が潜んでいた。一般に使用されている電力は交流で周波数が決まっている。だが日本で供給されている電力の周波数には二種類（五〇ヘルツと六〇ヘルツ）あって、静岡県付近を境に東日本と西日本とは異なるのだ。

このため、事故などで一方に供給量が不足が生じ、電力を融通し合う必要が生じても、首都圏と近畿圏とでは周波数の違うため、これが壁となつて、周波数に変換しない限り、東西相互間で電力を融通し合うことができないのである。

原子力発電所の大集中立地にはリスク分散の点から問題があった。だが発電所の立地には漁民や住民の反対運動が根強く、立地できるとなると一カ所に発電規模が一基一〇〇万キロワットを超える発電所を何基も連ねて集中立地する傾向が強かった。

また発電所集中立地には発電所を建設する会社側にとってもコスト面でいくつかのメリットがあった。臨海発電所には港湾設備など大規模の付帯設備をつくる必要があるが、集中立地すれば設備を共用でき、工期を短縮できる。生産した電力を輸送する送電線路をも共通に利用することができる。集中立地はいろいろな面でコストをカットでき、経済的で安上がりであることは否めなかった。

だがもし集中立地している原子力発電所のなかで重大な放射能汚染事故が起きたらどうなるか。発電所や送電線の事故で大集中立地地点からの電力供給が途絶えるようなことになったらどうなるのか。電力が途絶えた人口稠密な首都圏や近畿圏では一体どんな事態が発生するだろうか。

九鬼は戦慄きながら、柏田が置いていったコピーと日本地図を重ね合わせた。

W湾はT半島先端の岬から北東に位置する対岸の岬まで直線で約七〇キロある。その内側に巾着型の海が大きく広がる。大小の入江が連なる海岸は殆どが国定公園に指定されおり、西からM湾、Z湾、O湾、G湾といった小さな湾があった。大きな主だった入江では港湾が整備され、京都や大阪に近いこともあって、昔から貿易港として栄えてきた。

そのなかに国定公園の指定から外れた辺鄙な小さな入江があった。Z湾の東隣の小さな漁港しかなかったU湾とO湾に近い口を大きく開いたU字状入江の先端の西と東の端やG半島の西側の先端部が原子力発電所立地適地として選ばれ、発電所が立地されることになったのだ。

TとOのふたつの原子力発電所は口を大きく開いたU字状入江の先端部に一〇キロほどの海面を挟んで向かい合わせに立地している。また数キロ置いてG半島西側にMとGのふたつの原子力発電所が建設された。

九鬼の脳裏に、一瞬、日本海を連なつて北上する無数の暖水塊が浮かんだ。

太平洋表層循環である亜熱帯環流の一部を担う黒潮はフィリピン群島の東側を北上して南西諸島の東側を通り抜け、日本列島太平洋側を北上する。

一部は南シナ海を北上する暖流に引き摺られて南西諸島の西側に入り、東シナ海を北上していく。沖縄島付近から九州南端で、黒潮は太平洋側と日本海側の二つに分かれて北上つづける。一方が日本列島の太平洋側を通る黒潮本流へ、もう一方が朝鮮海峡、対馬海峡から日本海に入り、日本海側を北上する対馬海流となる。

太平洋側に向きを変えた黒潮本流（日本海流）は九州、四国、紀伊半島

をなぞるように西日本の太平洋側に沿って東へ回る。若干北に向きを変えて北上し、房総半島を過ぎたところで北からの親潮と出会い、北東に旋回して黒潮続流として北太平洋をを目指すのだ。

対馬海峡から日本海に入った対馬海流は海峡を抜けたところで大きく広がり、朝鮮半島沿いに北上する流れと、日本列島の沿岸に沿って北上する流れとに分かれる。朝鮮半島沿いに北上する流れの一部は途中で方向を変えて日本海の中央部へ向かう。

日本海の中央部へ向かった流れは北から南下するリマン海流（寒流）と出会い、行く手を阻まれてさらに方向を変え、日本列島沿岸沿いを北上する流れとふたたび合流し、さらに北上をつづける。

暖水塊群はこれらの海流に乗って漂流し移動するのだ。

九鬼が考えた暖水塊の原子力発電所集中立地三地点への接近シナリオはこうだった。

日本列島の太平洋側を北上する暖水塊の群れは黒潮の大きな流れのなかに浮び、延々と黒潮本流に乗って漂流しつづける。秒速一・五メートルで毎秒五〇〇〇万トンの水量をもつ幅数一〇キロから一〇〇キロの黒潮は房総半島を過ぎて日本列島から離れて大洋へと流れ出るところで、暖水塊が地球の自転にともなうコリオリの力で勢いよく西へと押しやられ、黒潮から放り出されてふたたび沿岸沿いに寄り、北から南下する親潮と出会うまでふたたび日本列島沿岸を舐めるようにゆっくり北上する。だが岸に近づき過ぎた暖水塊は取り残されて漂い、風に押し流されなにかぎり、原子力発電所や火力発電所が居並ぶF地点の前面海域に留まることになるのだ。

一方、対馬海流に乗った暖水塊群は海流の流れに引きずられて長径一〇キロほどの楕円状に変形し、日本列島沿岸沿いにゆっくりW湾海域に近づ

く。T半島の先端の岬を過ぎると、吸い込まれるように湾内に入り込み、中央のO湾を目指す。暖水塊は口の小さな巾着型のO湾を避け、東隣の両先端部に原子力発電所が立地する口を大きく開いたU字状入江に進む。別の暖水塊はO湾の前面海域を撫で、MとG原子力発電所が立地するG半島西側海岸に向かうのだ。

さらに北上した暖水塊が能登半島先端の禄剛崎を越えて佐渡を目指す。そのなかのいくつかの暖水塊が風に流され急に向きを変え、沿岸に急接近する。富山湾沖に入り込んだ暖水塊は信濃川の流水に阻まれ、出力規模一〇〇万級の原子力発電所が七基居並ぶK沖に停滞するのだ。

九鬼は黒潮本流と対馬海流に運ばれた暖水塊群が原子力発電所の集中立地地点を襲う最適条件を探して何度もシミュレーションを試みる。彼はシミュレーションを繰り返して、条件がそろえば暖水塊がこれらの地点を十分襲う可能性があることを確かめた。

もし原子力発電所の集中立地地点に復水器の設計海水温度を超えた高温の暖水塊が迫り来れば、一体どんな事態が生じるのだろうか。

彼は何度も同じ問いを繰り返しながら、原子力発電所集中立地地点の前面海域に押し寄せた暖水塊の動きを想像する。

しばし前面海域に停滞していた巨大な高温水塊を抱えた暖水塊は、やがて大口を開けて待っている発電所の取水口へ引き寄せられて取り込まれていく。取水口から取り込まれた高温海水は復水器へめがけて勢いよく邁進し、高速で復水器の細管を通り抜ける。

つぎの瞬間、彼は高温の海水を呑み込んだのたうちまわる原子力発電所の復水器を見たような気がした。

九鬼は立ち上がるなり、階段を駆け上がり、柏田を探した。一階上の研

究室には彼の姿はなかった。実験棟か、彼は踵を返して階段を下りていく。

九鬼は赤道直下の強い日射を受け、ギラギラ輝く海面を思い浮かべた。熱帯海域で熱せられた海水は水分を蒸発させて高温高塩分の海水となる。

水蒸気は上空へと舞い上り積雲をつくり、高温高塩分の海水に覆われた海域に雨を降らす。天空から降り注ぐ淡水の降水がまるで皿やお椀を伏せたように高温高塩分の海水塊のうえを覆う。高温高塩分の海水のうえに溜まった淡水に周囲の海水が流れ込み、塩分が溶け込む。そこへ強烈な太陽が射す。海水が高温に熱せられて蒸発が盛んになり水蒸気となってふたたび上空へ……、赤道直下や熱帯の海域では強烈な太陽光線を受けて暖まった海水がこのような挙動を繰り返して、表面の淡水や塩分の薄い海水が次第に高温高塩分の海水となり、海中に沈み込み、海中に高塩分の高温水塊が形成されていくのだ。

海中の高温海水塊は東から吹く貿易風によって吹き寄せられて次第に大きな暖水塊となっていく。高温海水塊のまわりにはやがて塩分濃度と水温の違いによる躍層ができ、これが周囲の海水との混合を妨げる障壁となつて暖水塊全体を保護する役割を果たす。

こうして形成された巨大な暖水塊が塩分濃度の高い高温海水の躍層とともに拡散することなく移動し、日本列島に近づき、原子力発電所を襲うのだ。

「冷却用の海水が復水器の設計海水温度を超えると、どんなことがおこるんですか。このまえば環境水温が上がり、一度上昇の温排水拡散範囲が広がるかといってみましたか、それだけですか。それだけじゃないんじゃないですか」

実験棟で柏田を見付けると、九鬼は食つてかかるように畳みかけた。

「一体、なにを考えているんだ。それ以上、なにが起こるといふのか」

柏田は一瞬むっとした顔をした。

「設計温度上昇が七度に設定されている復水器に設計海水温度以上の高い温度の海水が突然急激に流れ込むと復水器はどうなるんですか」

「……………」

口を開こうとしない柏田に九鬼はこれまで検討した結果を話した。そして答えを促すように、質問を重ねる。

「復水器の循環ポンプがフル回転して循環水量を増やすことになるんですか」

「それには限度がある……………」

「そうすると、七度を超えた高温の温排水が排出されることになるわけですか。それとも七度以上にならないようになっているとすれば、今度は別の問題が発生することになるのではないかな。たとえば……………」

「復水器が機能停止すると……………」、そうすると、原子炉が過熱する。これは大問題だ。原子炉を緊急停止するほかないのかどうか。復水器が機能停止するまえに、復水器の機能低下に合わせて原子炉の出力低下できればいいんだが……………」

復水器が機能低下もしくは停止しても、原子炉をこれに即応して出力低下することは難しいのだ。即応して出力低下や停止できない原子炉はそのまま発熱を続けることになるだろう。蒸気は過熱しさらに圧力を高め、出口を求めてのたうち回り、臨界圧を超えて過熱した蒸気は耐えきれなくなつて安全弁から噴き出すことになるのか。大量の蒸気を安全に継続して放出することが可能なのか。

本当にこんな事態が発生するのだろうか。二人はしばらく顔を見合わせていた。

現在日本で稼働している原子力発電所の大半はPタイプ（加圧水型）かBタイプ（沸騰水型）である。これは原子炉の構造上の違いによる。Pタイプでは原子炉内で加圧した水を加熱し、そこに熱交換用の細管を組み込み、別の水を循環させて蒸気を発生させるいわば間接方式である。これに對して、Bタイプは水を原子炉内に直に入れて蒸気を発生させる直接方式である。両者間には蒸気発生効率と蒸気に放射性物質を含むか否かの点に差異がある。効率をとるか、蒸気の放射能汚染を避けるか。もちろん非常時に蒸気を噴き出す安全弁には放射性物質を排除するフィルターが設置されて環境への影響を回避しているが、問題は想定外の大量の蒸気が大気中に放出するときだ。

問題の集中立地地点の原子力発電所にはPとBのタイプがあった。K電力会社のW湾沿いにあるT、O、M発電所はPタイプで、T電力会社のK地点、F地点の発電所はすべてBタイプだった。

「海水温を事前に測定して対策を講じるほかないのではないか。それには暖水塊の観測がどうしても必要だが……………」

「それは認められないんだろ」

「かといってそのまま放置していいのですか。なんとかしておかなければ大問題になる。海洋科学研究所はなにをしていたのかと指弾されることになりかねない」

「なにもお前のような新米が出しやばることはない。クビになつてもいいのか」

「集中立地地点の原子力発電所がダウンしたらどうなる？」

九鬼の脳裏に亜耶子の顔がちらつく。

「一〇〇パーセントダウンしたら、当然関東や関西で大停電が発生するようになるだろうな」

「五〇パーセントダウンならどうなる」

「微妙なところだな。急にダウンすればどうなるかな。まあ、一部の地域では停電が避けられないかもしれないが、全域が停電するようなことはまずないだろう」

「じゃ、五〇パーセントダウンの線でなんとか押さえることができればいいのか」

「簡単じゃない。原子力では出力を急激にダウンすることは難しい」

「どうすればいいんだ」

「事前の情報がなければ手も足も出まい。暖水塊の水温分布構造や事前の挙動予測といった情報があればどうにか最悪の事態を回避できるだろうが……」

「となると、最低限、暖水塊の観測が必要だ……、一体どうすればいいんだ」

別れを告げて研究室に戻ると、九鬼はこれまで検討した結果をペーパーに纏めた。

11

「暖水塊の観測は無理でしたよ……」

九鬼は佐々木教授の机の前に椅子を引き寄せると、腰を下ろしながら言っ

た。

「暖水塊が三五度程度だと原子力発電所に大分影響が出るらしいので是非調べておきたかったです……」

佐々木は九鬼の顔を黙って見つめている。彼が研究室に入ってきたときから、佐々木は一言も発しない。

「どうかしましたか」

「おめでとう、亜耶子から聞いたよ。この前、なぜ黙っていたんだ」

「いや、なんとなく……」

九鬼は暖水塊のことを話したときの亜耶子の不安そうな顔を思い浮かべ、曖昧に応えた。

「重大事件？」

亜耶子のたまりかねたような声に、陽一郎は驚いて顔を上げた。食卓の向こうに曇った妻の顔があった。

「日本海に暖水塊が近づいているんだ」

「暖水塊？」

「海洋に浮いている水温の高い海水の塊、温水プールみたいなものだよ」

「まあ、どうして海のなかに温水プールができるの」

「海洋には水温の高いのや低いのが、塩分が濃いのが薄いのがさまざまな種類の海水の塊が混在していて簡単に混じり合うことがないんだよ。条件が重なる海洋のなかに巨大な温水プールもできることがある」

「……………」

亜耶子は「それがなぜ重大事件なの」と言いたげに、黙って口を尖らし

陽一郎は何日も黙りこくつて考えごとに耽るばかりで、折角つくった好物料理にもろくに箸を付けようとしないうでいたらしい自分に気付いた。

「暖水塊が日本列島に近づくと大変なことになるかもしれないんだよ。困ったことにならないければいいのだが……、そのために、なんとかして暖水塊の規模や水温を測ってみたいんだが、なかなかうまくいなくて……」

「いつ、どんなことが起こるの……」

亜耶子は身体を前に屈め、不安そうに顔を寄せる。

「うん……、もしかしたら真夏に発電所が止まることになるかもしれない」  
陽一郎はじつと妻の目を見た。

彼は研究所の反対を押しつけて強行すればクビのおそれがあることを伏せ、不安を煽らないように気をつけて一部始終を話した。

確実に起こるかどうかわからないことを話して、いたずらに妊娠している亜耶子を不安に陥れることを恐れた。かといって、彼の性格からこれら伏せておくことは許せなかった。妻を含めて多くの人々を危険に曝すことになりかねないことであるうえ、自分が気付いた以上、そのことを妻に話さないでおくわけにはいかなかった。

九鬼はどうすればいいのか分からないまま、佐々木教授を訪ねたのだった。目を宙に浮せ、あれやこれやと考えを巡らしている彼を佐々木はじつと見つめたまま、口を開こうとしない。教授の目にもなぜか迷いの色が浮いていた。

「暖水塊の水温が三五四度程度になることがあるのだろうか……、もしそうなれば重大事かも……」

ようやく口を開くと、佐々木はぽつんと言った。

九鬼はしばらく佐々木の顔を見ていたが、やおら鞆からホツキスで綴じたコピーを取り出した。

「暖水塊の観測の必要性について纏めたものですが、もう一度上に当たってみようかと思つて……。もし暖水塊の水温が三五、六度になるならば、どうしても放置しておくことはできませんから」

佐々木はコピーを受け取ると、目を落として読み始めた。

しばらくしてコピーから目を上げ、九鬼をじつと見た。佐々木の目から迷いの色が消えていた。

「亜耶子からきみが大学に戻れないかといつてきたので、どうしたのかと思つていたところだったが……。実は、急激な気候変動モデルについてのきみのアイデアをホームページで紹介したところ、早速反響があった。こつちにきて、これを見てくれ。いまプリントアウトするけど」

九鬼は言われるままに、佐々木の椅子の横に立った。

ディスプレイに送られてきたメールがつつぎに映し出された。単なる質問や議論に過ぎないものも混じつていたが、そのなかに共同研究や学会への招待申込があった。

「きみの研究所と共同研究しているところはどこだったかな」

「ACAR（アメリカ大気研究センター）ですよ。現在も研究員が派遣されているはずですが……」

「ACARね。確か、そこからも問い合わせがあったようだが……」

佐々木はマウスをクイックした。

「あ、あった。きみに急激な気候変動モデルの開発に参加して欲しいらしいが、どうかね。大学に戻るよりもそのほうがいいだろう。とにかく、経歴を知らせておくよ」

九鬼は手順を踏んで中西に当たって観測がダメなら、ACARに行ってもいいような気がした。原子力発電所に影響をおよぼすおそれのある暖水塊の観測を行うよりも、直接急激な気候変動モデルの開発を行なうほうにより興味があつた。

12

「中西さん、ディスプレイで追っていた暖水塊のことですが、やはり一度観測しておきたいのですが……」

九鬼は自分でも不思議なくらい口が軽く回るのに驚いた。

亜耶子が大学への復帰を打診していたことを知って以来、彼はなんとなくこころが軽くなったような気がした。彼女は単にもしものときの用心に注意深く振る舞ったに過ぎなかったのかも知れないが、彼の長年の思いを知っている妻が積極的の後押しをしてくれているように感じてならなかった。それと彼の頭のどこかに、国際的に知れ渡っている研究者に混じってノリニアタイプの気候変動モデル開発に挑戦したい気持ちがあつた。そこで断られることを承知の上で、彼はあえて中西に対して暖水塊の観測を再度提案する気になったのだつた。

中西は黙って、九鬼が差し出した提案書を受け取った。暖水塊の観測の必要性についてまとめたペーパーを書き直したものだつた。

「所長に出せばいい」

中西の目はいつになく険しかった。

「そうですね。それでいいんですね」

彼は念を押すように言うと、机に投げ出されている提案書を取り戻し、踵を返した。

研究室に戻ると、提案書を机の上に放り出し、彼は椅子にどかつと腰を下ろした。出掛けたときと違って、気分が妙に落ち込み、大分減入っていた。

村井常務と激しいやり取りがあつたという噂を耳にしていたものの、彼は所長からまだ経営推進会議の結果についてなにも聞いていなかった。だが村井とやり合った以上、研究計画案が通るとは思えなかった。それを見越して新たに中西を通して暖水塊観測の提案を試みようとしたが、彼の意図は完全に見透かされていたようだった。

いまさら所長に再度提案書を持ち出すことはできなかった。部長に提案することも考えたが、すぐ諦めた。こうなつては研究所を辞め、ACARへいくほかないかと思つた。

「九鬼さん、一寸いいですか」

いつの間にか、机の近くに、柏田が立っていた。目を閉じて考えごとに耽つたいたせいか、柏田が研究室に入ってきたことに全然気付かなかつた。

「これはなんですか」

目ざとく机の上に放り出された提案書を見付けた。

「見せてもらつていいですか」と言いながら手に取ると、九鬼を促すようにして、柏田は研究室の中央にある作業机に移つた。

提案書を丁寧にも読み返していたが、やがて顔を上げると笑みを浮かべて九鬼をじつと見た。

「なるほどね。よくできている。報告書にしたらい」

「はあ……」

九鬼は要領の得ない返事をしながら、いつそのことはつきり言つたほうがいいのかと思つた。

「実はこれは……」

柏田はじつと耳を傾け、彼の話すことを聞いていた。

「地球温暖化が重点課題からはずれると噂されているが、そうなれば新しいプロジェクトを立ち上げることは難しい。あの件も多分それきりになつてしまうことだろうな」

「あの件……」

柏田は曖昧な笑みを浮かべ、背を向けた。

九鬼は柏田の後ろ姿を見送りながら、身体から力が抜けていくように感じた。急激な気候変動の研究をつづけるなら研究所を辞めるほかないと思ひ詰めていただけに、提案書を報告書にするという意外な話に驚き、信じられないぬ思いに駆られていた。かといって中西がすんなりと了承するか疑わしかった。

「暖水塊の観測に大分執着しているな」

柏田が話しかけても、中西は頑なに口をきつく結び、開こうとしない。

「……暖水塊についてペーパーを纏めて発表したいそうだ」

柏田は何気ないふうを装い、さらつとダメを押す。

「研究報告に纏める？ なにを……」

「さあ、直接学会かどこかに発表するつもりなのじゃないかな」

「そんなことは……」

「でも暖水塊は彼の研究課題として登録されていないから研究所の研究報告書にする義務はないはずだし……、まあ、どうするのかは彼に聞いてみ

るんだな」

柏田は返事を待たずに、中西のまえから立ち上がった。

13

「ねえ……」

「うん」

節分が過ぎて十日にもなるのに冷たい風が吹く寒い日が続いたが、その日は朝から春らしい陽光がリビングルームの奥まで射し込んでいた。

陽一郎は食卓で背に陽射しを受け、朝刊を広げた。

「ねええたら……」

顔を上げると、亜耶子が浮かぬ顔をして彼をじつと見つめていた。

「うん、どうした？」

「アメリカにはわたし行かないわよ」

「え？」

「兄から聞いたわ」

亜耶子の大きな目が尖っている。彼は慌てて目を背け、新聞を閉じる。

彼は一度これまでのことを妻に詳しく話しておかなければならないと思つていた。だがなかなか言い出す機会がなかった。というより、六カ月目に入り幾分目立ってきたお腹をした彼女になんと切り出していいのかわからなかった。彼は煮え切らないまま一日また一日と先に延ばしていたのだ。

彼が大学から新しい研究所に移り、職員用住宅に入つて生活が落ち着いたところで、亜耶子はようやく子供を産む決心をした。だがもし研究所を



辞めることになれば、職員用住宅を出なければならぬし、ここで出産したいという妻の願いも叶えられないことになってしまう。これは彼にとっても辛いことであつた。彼は無意識のうちに妻のほうから一緒に米国へ行くと言つてくれることを待つていたのかもしれない。

亜耶子が大学復帰の可能性を打診したということが彼には救いのような気がしていたが、妻の尖つた目はそれを否定してあまりあつた。彼女は決して彼の大学復帰を願つてゐる訳ではない。ただ最悪の事態に備えて考へていただけだつたのだ。彼は狼狽えた。こういう場合にどう取りつくればいいのか全然分からなかつた。

外から子供の声が出た。振り返ると、ガラス戸越しに枯れた芝生のうえを走る二、三才ぐらゐの兄妹らしいふたりの幼児が目に入った。彼はしばらく幼児たちの動きを追つた。

「わたしはどうなるの？」

「まだ決まつたわけでない。亜耶子はどうしてもここにいたいわけ？」

彼女は黙つて大きな目でじつと彼を見つめてゐる。彼女の目はできればそうしたいと告げていた。

彼は迷つた。暖水塊が襲い、日本を大混乱に陥れるとすれば、ここに留まるという身重の妻を放つておいて外国に行つていいものか。かといつて、急激な気候変動を放置しておけば、日本のみならず世界中に、いや人類に取り返しのつかない被害がおよぶことになるかもしれない。

「陽ちゃんが行かなくても……、でも行きたいんですよ。」

彼女は彼の気持ちを見透かすような目をした。

「亜耶子が一緒に行つてくれると一番いいが……」

「こんな身体では無理よ。知らないところで子供を産むなんていや。それ

にまへのこともあるし……」

大分前に一度流産したことがあつた。そのことを心配してゐるらしい妻のことを思うと、彼はただ頷くほかなかつた。

彼は立ち上がつて、ガラス戸越しに外を覗いた。幼児たちの姿はもうなかつた。ペランダの向こうに広がつてゐる枯れた芝生のなかに点々と顔を出したクローバーの若葉が春の陽光に輝いてゐる。

「散歩に行こうか」

「まだ寒いわ」

「少しは運動したほうがいい」

「インフルエンザが怖いから」

「大丈夫だよ、その辺を歩くだけだから」

彼はまだ諦め切れずにいた。だが諦めるほかなかつた。彼女がここを離れたくない以上じつとしてゐるほかなかつた。研究所を辞めて大学に移れば社宅を出なければならぬし、研究所に留まつていれば暖水塊の観測さえままならないのだ。

彼女が普通の身体だつたらもつと強引にA C A R行きを進めることができただろう。だが身重の妻では一寸力だけで彼女のお腹のなかにいる小さな新しい生命が粉々に壊れてしまふそうで怖かつた。彼は小さな生命が誕生するまで彼女の言いなりになるほかないのかもしれないと思つた。

ガラス戸から射込む春の陽光のなかを漂いながら、彼は一瞬時の流れが止つたような静穏さを感じた。彼は静止してゐる時がこのまゝいつまでもつづくことを祈つた。

「電話よ、兄さんだわ」

突然、妻の声が出た。一瞬、彼女のほうから電話したのかと訝つた。制

止していた時が音を上げて回りだした。

「ACARからのメールを転送した。ACARは貴殿と早急に急激な気候変動モデルについてのミーティングを持ちたいので来所願えないか、都合のいい日を知らせてくれれば航空券を手配する、と言って寄越した」

それだけで言う、電話はすぐ切れた。

不安そうな顔をして彼の様子を窺っている妻を残して、彼は机のパソコンに電源を入れた。彼はメールソフトを起動し、新しいメールを受信する。

メールを映し出したディスプレイのまえに、彼はしばらく身動きもせずじつと座っていた。一度諦めかけていた思いがふたたび勢いを盛り返して、彼を悩ましはじめた。彼はじつと堪えて、気持ちが落ち着くのを静かに待った。

「つぎの土日を挟んで休暇を取って出掛けたら。ねえ、陽ちゃん、行つてらっしゃい。わたしはいいから」

いつの間にか、亜耶子が背後でディスプレイを覗いていた。

「でも……」

「そんなことでクビにはならないわよ。わたしは大丈夫。ここで待っているから」

彼は半信半疑の面持ちで、妻の目をじつと覗く。彼女の大きな深く澄んだ目に笑みが浮いていた。

14

九鬼はACARに出掛けたことを後悔した。妻に背を押されたとはいえ、

自分の判断が甘かった。急激な気候変動モデルについて研究者同士で議論をすれば、どうしても研究をつづけたい気持ちになってしまう。ますます研究を諦めるのが難しくなるだけだった。ことに彼の場合長い間研究を抑えられていただけに、ひとたび火がついてしまうと自分を抑えることができなかつた。

なんとかして急激な気候変動モデルの研究をつづけたいと思った。ACARに出掛けてそこで研究をしたいという思いをどうすることもできなかつた。

だが研究所を辞めるわけにいかなかった。いま引越すはめになったら、亜耶子はまた流産してしまうかもしれない。ふたたび流産することになったら、彼女はもう子供を産むことができなくなるだろう。

彼は毎日なにをする気力もなく、虚ろな目をしてぼんやりとディスプレイに写りだされた暖水塊の影を追っていた。

暖水塊は日本列島に近づくにつれて輪郭が段々ぼやけてきた。最初から追い続けてきた彼の目にはどうにかまだ存在を確認することができるものの、徐々に彼にも識別が困難になっていた。暖水塊は周囲の海水に侵食されて希釈してゆき、存在を喪失しつつあった。同時に、彼の自信もぐらつき出した。

暖水塊が熱を運ぶという考えはやはり単なる仮説の域を出なかったのか、彼は自分に言い聞かせるように口の中で呟く。

もうディスプレイを見まいと何度も思った。だが彼は諦めきれずにいつのまにか電源を入れてしまう。

いつものように、ぼんやりとディスプレイを眺めていたとき、佐々木教授から電話があつた。

「なぜ、断つたのか」

最初から詰問調だった。

「魅力があるのですが……」

九鬼は簡単に事情を説明した。

「きみのアイデアに従って、ACARはメキシコ湾流の観測をW研究所と共同でやることになったと言ってきた。それにきみも是非参加して欲しいといっているのに……。なんとかならないのか……」

「……………」

九鬼はなんと応えていいのか分からなかった。黙って聞いているほかなかった。

「亜耶子はいまのところを移りたくないといっているんだね」

佐々木は返事待たずに電話を切った。だが彼は切れたことに気付かず、しばらくそのまま受話器を耳に付けていた。ようやく受話器の向こうに誰もがいらないことに気付いて、彼はゆっくり受話器を戻した。

そのとき、突然、彼の脳裏にACARでの会議で会った顎髭のせいで一層長くみえるアンダーソンの長顔が蘇ってきた。

中央に大きなスクリーンのある会議室で、ACARの연구원たちを前にして九鬼のレクチャーが始まった。中央のテーブルの最前列で、彼の説明の間中、もじやもじやした赤毛の顎髭をいじくり回していた中年男がプロジェクターのアンダーソンだった。

「わたしはGHG（温室効果ガス）の増加によって海面からの蒸発量が増えて、水蒸気の増加とその温室効果が正のフィードバックに陥ったとき、急激な気候変動が始まると考えていたが……」

アンダーソンは相変わらず顎髭に手をやったまま、前置きをいうと、九鬼のアイデアを繰り返しはじめた。

「……蒸発と降雨の繰り返しから熱塩躍層の上層に淡水の暖水塊ができ、これが寒気による海水の冷却を妨げる緩衝剤の役割を果たし、本来形成されるはずの深層水の形成が妨げられている。その結果、大量の暖水塊が熱塩躍層ともども北極海に移動するため、北極海が急速に温暖化して急激な気候変動を引き起こす。こう理解していいのだね」

間違いのないことを彼に確かめると、アンダーソンは「これを是非検証してみたい」と言い出したのだった。

「検証？」

九鬼にはアンダーソンのいうことが十分理解できなかった。ただACARの連中が九鬼のアイデアに大に関心を持っていることが分かるが、これをどうやって検証しようとするのか分からなかった。

九鬼はそれ以上追及せずに帰ってきたが、佐々木によると、ACARが検証のためにメキシコ湾流の観測を始めるというのだ。彼はひとたびきっぱりと諦めていたと思っていたのに、ふたたび迷いはじめている自分を感じた。

「どうでしたか」

九鬼は机に近づき、顔を上げた中西の目を覗き込んだ。

「ということは……」

中西は曖昧な返事をしながら立ち上がり、九鬼をそばの作業兼会議用の長テーブルに誘う。

「部長に相談してみたが……」

桜木部長は今回のACAR招聘の件に対して極めて消極的だという。

「じゃ、辞めるほかないんですか」

「なんだと、辞める……、なぜだ……」

机から顔を上げた中西が矢継ぎ早に言い、「ダメだ。一度所長と相談してみるか」といった。

九鬼はプロジェクトリーダーの中西が急激な気候変動に関心がないことを思い出し、「わたしが直接伺ってみます」といって、彼は廊下に出ると、所長室の向った。

「オレがやる」

あとを追ってきた中西が九鬼を止める。

所長室は二階だ。エレベーターが上に登りはじめているのを見て、中西は階段を下りていった。

所長室は階段から右に折れる廊下の一番奥にある。東南の角の一〇坪ほどのある長方形のゆったりした室内には奥の壁際に東側の窓を背に執務机とデスクトップのパソコンが並び、その前方に南側の窓に寄せて大きな応接セットがあった。廊下側の壁にはロッカーと本棚が一列に並んでいる。

開いているドアから応接セットが見えた。所長が奥の方のアームチェアで足を投げ出し、身体を椅子のクッションに沈ませ、ソファの人と話をしている。目が合うと、所長は座ったまま、ソファへ手招く。所長の動作にソファの人が振り向いた。桜木部長だった。

中西が室内に入っていくと、所長は丸い身体を起した。桜木は心得たように、ソファから所長の隣のアームチェアへと移る。

「部長からいま話を聞いたところです。やはり、九鬼君を来年度ACARに派遣することはできません。派遣予定者はとつくに決まっていますから

ね。それを変えるわけにはいきません」

所長は中西をじろつと見る。

「ACARは九鬼研究員を招聘したいといっているのです。ですから、それと別口で九鬼研究員を出すことはできないのですか。いずれ、うちでも急激な気候変動の研究をやるときがくるでしょう。そのときのために彼に勉強させておいてはどうですか」

「九鬼を招聘？ どうしてそんな話になったのかね」

所長は桜木と中西の顔を交互に見た。

「……………」

中西は桜木の顔を見た。桜木に詳しく話しておいたのに、所長にはなぜか通じていないらしい。

「佐々木教授がACARの連中に九鬼研究員が急激な気候変動に関心をもっていることを話していたらしい。ACARは今年から急激な気候変動研究プロジェクトが始めていたのですよ」

「佐々木教授……………」

「九鬼君を紹介してくれたT大の先生で、彼の指導教官です……………」

桜木が脇から所長に耳打ちする。中西が大きく頷く。

「今回、九鬼研究員をACARに出せば、海洋科学研究所としても急激な気候変動研究の準備をすることができます。急激な気候変動の研究にはいま世界的に関心が向いています。九鬼研究員を出しておけば、スポンサーから要請されたときにもすぐ応えることができますし……………」

「その研究のために海洋科学研究所から研究員をACARに派遣したとなれば、先走りの非難も覚悟しなければならぬ」

「うちを辞めて行くことも考えているようですが……………」

「ほんとうか、きみ」

桜木が中西に鋭い一瞥を走らせ、「それは仕方がない」という。

「それは困ります。せつかく戦力を補充したばかりで辞められては……」

中西が口を尖らす。

「うちを辞めて、あることないこと発表されても困るか」

桜木がつぶやく。

「……この際、彼の休職を認めてはどうでしょう。休職中でも身分は海洋科学研究所の職員ですから」

「ふむ。そうかね……、まあ、桜木部長、いいね。九鬼君から申請があれば休職扱いでACARへの出向を認めることにしよう」

所長がにこりともせずに言った。

## 第三章

15

六月に入ると、急に蒸し暑くなった。窓から流れ込む空気は湿気が高く、むっとする。吹き出た額の汗を拭いても、すぐ汗が吹き出す。汗で体中がべとべとして気持ちが悪かった。

亜耶子の脳裏に熱中症で倒れた日のことが蘇った。

ひとたび、突然暗黒の闇に引きずり込まれたあの瞬間が蘇ると、一面黒い垂れ幕が広がり、頭のなかのひだに纏わりついて離れようとしなない。

嫌な思い出を一瞬でも早く振り払いたかった。

彼女はガラス戸のカーテンを力一杯開いた。ガラス戸を開け、ベランダに出た。彼女は欄干に身体を預け、芝生の上で遊んでいる子供たちに見られた。

顔中に汗が噴き出し、汗が背中を流れ落ちる。彼女は部屋のなかに戻ると、ガラス戸をぴつちりと閉めて、クーラーをガンガン回した。

汗は退いたものの、閉め切った部屋の空気は次第に淀み、気分を落ち込ませていく。彼女は大きくなったお腹を両手で抱え、胸でせかせかと息をした。

彼女は陽一郎がそばにいないことを恨んだ。

テーブルの上に一枚の絵ハガキがあった。彼女は目をそらし、お預けを食った犬のように、身動きひとつせず、じっとダイニングのテーブルに座っていた。

ガラス戸から差し込んでいた陽射しが弱まり、やがて日が落ちていく。ベランダ越しに見えていた子供たちの姿も遊び声も消えた。

夕暮れが迫った。昼と夜の隙間に、時間を喪失した静寂が一瞬支配する。この瞬間、彼女はいつも底知れぬ深淵に落ちていくような気分を襲われる。

ふわふわとした無重力の感覚のなかで、彼女は一大決心をしておもむろに絵ハガキに手を伸ばす。

ロッキー山脈の山並みを背景に、ボルダー市街のパノラマが広がっていた。

ボルダーはマイルシティといわれているデンバーとほぼ同じレベルにあるロッキー山脈山麓に広がる高原都市で、ロッキーマウンテン国立公園に近い。街の西北部にコロラド大学の広大なキャンパスがある。ACARのほかに、国立科学技術研究所など、いくつかの研究機関があり、市内には二つの大ショッピングモールもあって、スキー場にも近く、学園リゾート都市といった趣があった。

彼女は目を中央の奥のほうに移した。市街から離れた山麓の小高いテラスに小さな建物が淡く浮かんでいる。ここが陽一郎が飛んでいったACARだった。

空には白い雲がたなびき、ACARの背後にロッキーの山並みが連なっている。

亜耶子は飽きもせずに、淡いブラウンピンクの小さな建物をじっと見つめ続けていた。彼女は彼と一緒に行かなかったことを後悔した。

突然、彼女は陽一郎が手の届かない遠いところに行ってしまったような気がした。

「出産に間に合うように、七月の末には一度帰るからね。あつちに着いた

ら、帰りの便を予約しておくから。インターネットもあるし、電話やファックスだつてある。デンバーからはジェット機が毎日便も飛んでいるので、なにかあれば直ぐ帰つて来るからね」

出掛けるとき、陽一郎は明るい声で言った。

しばらくの間、彼の明るい声か耳について離れなかった。だが彼女にはあのとき彼がどんな顔をしていたかどうしても思い出せなかった。

亜耶子は深い穴から這い上がるような気持ちで椅子から立ち上がった。一人だけで食べる食事がこんなに味気ないものとは気付かなかった。このことが分かつていればあんなに易々と陽一郎を送り出すことはなかったにちがいない。彼女は深い後悔の念に囚われ、激しく落ち込んでいった。

だが一週間も過ぎると、彼女は本来の自分を取り戻した。というより、そうせざるを得なかった。

お腹のなかで新しい生命が自己主張をはじめて動き回り、彼女が孤独のなかに打ち沈んでいることを許るそうとしなかった。小さな生命体はなにが気に食わないのか、時折子宮壁を激しく蹴る。すべてがはじめての経験である彼女は不安に脅え、病院を訪ねた。

「いたつて順調ですよ。予定どおりですから心配しないで」

小柄なせいとか、一見亜耶子とあまり年の違いがないように見える中年の女医は笑顔で言った。

それでも彼女はなんとなく落ち着かず、二階に住むほぼ同年代の経験者に助けを乞うた。

これがきっかけとなつて、世話好きな若い主婦が頻繁に顔を出すようになった。彼女にも分からないことに出会うと、自らさらに経験豊富な隣の中年の主婦に相談するといった按配で、陽一郎が居ない分広くなったりピ

ングルームやダイニングルームはいつのまにか隣近所の主婦たちの集まり場となつて、一日中話し声が絶えなかった。彼女には感傷に耽つている時間が全くなくなつてしまった。

二人の子持ちの中年の主婦は、今春、下の子ども中学に入学してようやく子育てを了えたところだった。急に手持無沙汰になつた彼女は、まるで娘を諭すように、妊娠中の注意から出産育児にいたるまで、ことこまかに話してくれる。幼いときに母を失つた亜耶子は母親が生きていればこんなふうに教えるのだろうと思つて聞いた。

亜耶子は主婦たちの話を聞きながら、やはりここで産むことにして良かったとつくづく思う。

こんな様子を陽一郎が見ればきつと安心してよろこんだにちがいないと彼女は思った。彼は身重の妻をひとり残していくことを最後まで案じていた。職員住宅であり、住人たちは研究所の職員の家族だし、気が知れている人々だから安心だといくら言つても、彼は決して納得しようとしなかった。

陽一郎は毎日メールを送つてきた。はじめのうち、亜耶子はパソコンに電源を入れることさえ億劫だった。メールソフトを起動させてメールチェックすることは考えただけで憂うつだった。

いまではそれも慣れてきたものの、書く内容が段々決まり切つたものになつていく。それでも、ふたりは毎日のように、インターネットでメールのやり取りをした。

――相変わらずよ。全く順調。病院を紹介してくださいました二階の佐野さんの美人の奥さんね、美和さんというんだけど、彼女が毎日のように顔を出して様子を見に来てくれるわ。だから全然心配しないで。それに周りの方

もいろいろと気を使ってくださるわ。皆さん、本当に親切な方ばかりよ——

——そうか。それはよかった。でも十分気をつけてくれよ。もう流産の心配はないだろうけれども——

出掛けて一カ月が過ぎたころ、陽一郎は六月の中頃に東海岸から調査船に乗る予定だと知らせてきた。

調査船に乗るのは彼にとつてはじめての経験だった。乗船前の準備や訓練のために月初めにボストンに近いW研究所に移るといふ。

亜耶子にも海洋に浮いている船のなかでの生活がどんなものか分からなかった。地上での生活と同じようにも思えるし、全く別の生活が待っているようにも思われるのだ。微かな不安があった。これでまた陽一郎がさらに遠のいていくように思えた。

——調査船には電話も通信もファックスもあるし、もちろん、メールもOKだそうだ。携帯もある。詳しくはあつちに着いたら連絡するから——

——そうなの。調査船に乗ると、いままでと違って、全く隔離された生活になるような気がしていたけど、いつでも連絡ができるのね。ところで、今日は特別ニュースよ。あのね。皆さんがいうには、どうも男の子らしいって。調べることもできるらしいけど、いまのところ調べるつもりもないので、もしかしたら違っているかもしれないわ。でもほんとはよく動くのよ。男の子なら、やんちゃ坊主よ、きつと。誰に似たのかしら。可愛い名前を考えてあげなくちゃね。考えておいてね——

亜耶子は電灯も点けず、薄暗闇のなかで、いま陽一郎はなにをしているだろうかと思った。

無性に陽一郎の声が聞きたかった。思う存分にこころの中を吐き出した

かった。突然頭のひだに張り巡らされた黒い垂れ幕を延ばしてごしごしと洗いたかった。積もり積もったストレスを晴らしたかった。

だがすでに東海岸に向けて出発したらしく何度電話しても彼を掴まえることができなかった。

16

「ああ、暖水塊が……」

昨夜遅く、九鬼はなんとなく気になって、ディスプレイにミンダナオ島沖から南シナ海海域の画像を映し出した。久しぶりに画像を丁寧にチェックしていくと、高温水塊の存在を示す斑点がいくつも見つかった。

彼はそのたびに原子力発電所の集中立地地点を襲う暖水塊を思い浮かべ、身震いを感じた。

いまでも、電力会社はおろか、日本全体が地球温暖化を遠い世界の絵空事かのように思っているふしがあった。たとえそう思っていないひとでも少なくとも今日明日の問題だとは誰ひとり思っていない。多少二酸化炭素を減らしてもどうにもならないと多寡を括っているのか、政府にしても企業にしてもおぎなりで、誰もが温暖化に対して真剣に立ち向かおうしなかった。

九鬼はひとり苛々してディスプレイに向かい、激しくキーを叩いた。いますぐ、暖水塊の来襲を予告し、臨海発電所に対策を講じさせたかった。

彼は一人残してきた身重の妻を思い浮かべた。なんとかして暖水塊の来



襲による大混乱や被害発生を未然に防ぎたかった。

彼は中西宛にメールを書いた。だが発信する段階になって思わず躊躇った。彼の心配をまともに受け取ってもらえるか疑問だった。ACARへの正規の派遣を嫌い、休職扱いの意向にしたことを考えると、メールはボツにされるか、あるいは誤解されてふたたび物議を醸し出す恐れがあった。

中西は電力会社を説得して対策を勧めるようなことは決してしないだろう。また彼のメールを持って回り、わざわざ桜木部長の不興を買うようなことも決してすまい。休職者のメールは無視され、当然のことのようにボツにすることだろう。

彼はニヒルな柏田の顔を思い浮かべ、それとなく柏田に暖水塊のことを思い出させ、なんらかの行動を起させる方法がないか思い巡らした。

ふと、こんなことをしては職員住宅にいる亜耶子に気まずい思いをさせることになるのではないかと気になった。休職者が物議を醸し出す張本人となつては、一人残っている亜耶子が職員住宅に居づらくなってしまいうちがいない。彼は折角書いたメールを削除して自らボツにした。

彼はACARを離れるまえに亜耶子に電話して、暖水塊のことについて一言注意しておこうと思った。だが彼女の声を聞けばつい余計なことを口走りそうに踏ん切りがつかなかった。迷っているうちに、彼は出発してしまつた。

W研究所に着くと、忙しいスケジュールが待っていた。

「乗船予定が早まつたんだよ」

アンダーソンが空港まで迎えに来てくれた。

設備の整った海洋調査船は世界でも数が限られていてかなり先まで予定が詰まっている。急にチャーターすることができなかつたし、単独では費

用がかさむ。それに数週間にわたる調査に出るとなると、準備にも結構時間がかかるのだ。

調査を急ぐACARは今回単独で調査することを断念して、適当な相手を見付けて割り込み、共同で調査することにした。たまたまW研究所の新鋭調査船をチャーターして北太平洋から北極海にかけて調査するグループがあつて、アンダーソンと九鬼が便乗させてもらうことになったのだ。

アンダーソンは九鬼より一週間まえに来て、調査グループとの打合せや乗船の準備にあつたつていた。

「なにしろ後から参加する形だから、当方の調査項目を割り込ませるのになかなか骨が折れたよ。時間の関係で断念させられたものもある。つぎの調査はACARが主導権をとつてできるように計画しよう。でないとなかなか調査ができないからな」

ACARでの打合せで、一応、調査項目や調査方法を決めていた。調査船も三五〇〇トン級の新鋭船で、定員は船長以下航海士などのクルーや船員が二三名のほか、科学者二三名、技術者一三名であり、予定した調査は十分こなせるものと思われていたのだ。

「もうつぎの船は予約しているのか」

「まだいつになるか分からないし……、うちだけで船をチャーターするとすると経費がかさむ。かといって適当な相手も簡単に見つかるものではないし……。まあ、今回の成果次第でなんとかするさ」

アンダーソンはハンドルに両手を掛け、前を向いたまま呟く。

ボストン市街を後にし、コッド岬に連なる弓なりの海岸を左手に長い橋を渡ると、W研究所がある半島に入る。W研究所は鎌のような奇妙な形をしたコッド岬とは反対側の、半島の南西の端から細長く回廊のように海に

突き出した陸地の根元にあった。

細い陸の回廊の左右に、研究所の建物群があった。アンダーソンが一つ指さして説明するが、九鬼は上の空で聞いた。生物関係のラボアトリーだという大きな建物のそばを抜け、橋を渡り、ウォーターストリートへ出る。

左手に小さな平地が海へ突き出ている。そこにはW研究所の研究棟が建ち並び、海岸に専用岸壁があった。湾に垂直に延びた岸壁に接岸している大型調査船は船尾に装備したウインチを動かし、出航準備に追われていた。

「あれだよ、乗船予定の船は。今回はメキシコ湾海流を追って進み、北太平洋海流に沿ってアイルランド沖を抜け、北極海を目指す。当方の調査が加わったので、なんとか調整したけど、行程が予定より若干伸びるようになるかもしれない」

地球温暖化関連の調査が増えたせいとか、最近では海洋調査船のスケジュールが混んでいて、単独で調査するとなると一年先になってしまうという。相乗り型の調査では参加者間での調査計画や作業手順などの調整が必要となり、いろいろ面倒なことが多い。そのうえ、思うように調査ができないおそれがあった。

「遅くとも七月末までには戻れるんでしょうね」

彼の脳裏を亜耶子の顔が過った。一瞬不安が襲った。彼は今回の調査が他のグループに参加して実施するといっても予定まで変わるということは知らされていないかった。いやそんなことは当然考えられることであつたが、なぜか彼は頭から考えていなかったのだ。

「その頃までには多分大丈夫だろう」

アンダーソンは怪訝な顔をして、彼を見た。

「明日、出航するよ。一応、三〇日間の予定だけど、調子はどうか？」

「暑いわ。とても暑いわ」

「注意してくれよ。熱中症にならないようにね」

「……ええ……」

「どこか具合が悪いの」

「……なんでもないわ。暑いだけ」

「七月三十日の便を予約しているから」

「月曜ね」

「成田には三十一日の火曜日になる」

「そう。三十一日ね」

受話器の奥からテンポのずれた亜耶子の声がいつもと違い、なんとなく弱々しく聞こえる。

「じゃ、またメールするから」

受話器を置きながら、彼は突然激しい不安を覚えた。もしかしたら彼女は熱中症にかかりかけていたのではなかったか。彼はもう一度電話した。

亜耶子は直ぐ出た。

「忙しいんでしょ。大丈夫よ。心配しないで」

彼はようやく落ち着いて、受話器をゆっくり戻した。

17

蒸し暑い日が続いた。湿度が高いものの、雨が少なく、時折強烈な太陽

が顔を出すとといった空梅雨気味の空模様だった。

太陽が出ると、朝から三十五度を軽く超え、真夏の気温となる。急激に襲ってくる異常な暑さに、人びとは熱中症を恐れ、冗談気味に「日本列島が熱中症になってしまった」と言い合った。

暖水塊群が刻一刻と日本近海に近づきつつあった。

亜耶子は陽一郎の声を聞いて幾分落ち着きを取り戻すと冷房の効いたデパートで新生児コーナーを巡り、これまで打つちやっっておいた出産のための準備をはじめた。小さな可愛らしいキャラクターが付いているベビーウェアや縫いぐるみに夢中になった。彼女は知らず知らずうちにすっかり体力を消耗し尽くしていた。そのことに自分でも全然気付かなかった。

非常に簡単なメモ書きであったが、陽一郎は毎日メールしてきた。亜耶子も毎日の出来事を書き送った。

陽一郎が調査船で出発して一週間したころ、亜耶子は身体の異常を覚えた。

突然、身体全体が鉛のように重く感じられた。身体を動かすことが億劫になり、一日中冷房をきかせた部屋に閉じこもっていることが多くなった。これが彼女にかえって悪かった。

七月のはじめ、突然出血し、救急車で病院に運ばれた。その日の夕方、亜耶子は予定より一カ月早く帝王切開で男児を産んだ。一五〇〇グラム足らずの未熟児だった。

一週間ほどして抜糸が済むと、保育器のなかのわが子を残して、彼女は早々に退院した。

久しぶりに戻った部屋は蒸し風呂のようで、カビの匂いがした。ガラス戸や窓を開放してクーラーが掛けた。なにもする気が起こらず、亜耶子は

ソファに身を投げた。身体から力が抜け、怠かった。だがお乳だけが妙に張る。

夢のなかでブザーの音がした。目を覚ますと、玄関のドアのブザーが鳴っていた。

「はい、ただいま……」

亜耶子は返事したものの、なかなか立ち上がることができなかった。

「九鬼さん、退院していらしたの……」

ドアの向こうから女の細い声がした。

二階の佐野美和が立っていた。

「まだかと思っていたわ。早かったわね」

「なんだか、じつとしておれなくて……」

亜耶子は陽一郎に連絡を取ろうと考えていたことを思い出した。入院している間、彼女は彼に男児誕生を知らせようとなんども試みたけれども無理だった。病院の公衆電話から航行中の調査船に連絡するのが難しいのだからと思う、彼女は家に早く戻ってメールしようと考えたのだった。

「無理しちゃだめよ。なにかお手伝いすることないかしら。買い物は……」

佐野美和は目を据え、亜耶子の身体をじっくり点検している。

亜耶子は小さい時からなんでもひとりだけでやってきた。ひとりで生活することはなんでもなかった。美和の目から身を隠そうとしても、気が急ぐだけで身体がいうことをきかない。彼女は否が応でも美和の手助けに縋るほかなかった。

話声を聞きつけ、隣の三木夫人がドアから顔を出した。

なにやかやと世話を焼く二人の声を耳にして、亜矢子は病院から職員住宅のわが家に戻ってきたことを実感した。いつの間にか、彼女は入院する

まえの生活がつづいているような錯覚に陥った。ただ違うことは重かったお腹が気が抜けたように軽くなって膨らみがどこかへ消えてしまったことだった。

隣人たちの声もなくなつて、彼女はようやくメールをチェックする気になり、パソコンに電源を入れた。

コンクリートの階段を上る靴音がした。

買物から美和が戻るにはまだ早い。足音はドアの前で止まった。

ブザーが鳴った。亜耶子はゆっくり椅子から起き上がる。

ぞき窓から外を覗くと、窪んだ小さな目がこつちを見ている。

「あ、お兄さん」

思わず、声が漏れた。

「病院に行ったら、退院したというんでね。もう、いいのか。まだ、病院にいると思つていたんだが……。最近はそんなに早く退院させるのかね」

兄の目になにかしら非難がましいような色が浮いているのを見て、彼女は急に口を噤んだ。なぜか無性に悲しかった。

突然、涙が溢れ、幾分飛び出している大きな眼球の表面を覆い尽くす。

彼女はじつと堪えた。落ち着きを取り戻して目を上げると、潤んだ目におろおろしている兄が映った。泣いたことがない妹の涙を見てすっかり動転しているらしかった。急に可笑しさが込み上げてきた。

「お兄さん、なんでもないわ。なんだか涙もろくなつたみたい。子どもを産んだせいかしら」

「驚かすなよ……。陽一郎くんはまだ知らせないのか」

陽一郎が何度も電話しても通じないので、なにか起こつたのか調べて欲しいとメールしてきたという。返事しないしていると今晚も電話してくる

違いない。

「それで様子を見に来たの」

「まあ、一度、甥クンに会つて敬意を表しておこうかと思つてね」

「当然無理よ。まだ保育器の中よ」

「え？ なんだつて……」

急に帝王切開すると決まったとき、彼女はこのことを誰にも知らせないでおこうと思つた。知らせるのは赤ちゃんが無事に生まれてからでも遅くない。

だがもしものときを考え、兄佐々木俊太郎にだけ出産のために入院すると知らせる気になつたのだ。手術のことはもちろん、出産予定日より一カ月も早いことも伏せたままだった。

「予定より大分早かつたからか……。だから……」

俊太郎は妹の目をじつと見た。

「そうだったのか。陽一郎くんとは連絡がついていてと思つていたんだが……。大変だったね。亜耶子はずーと一人で頑張つていたわけか」

彼女はこころのどこかで自分を責めていた。自分の不注意がわが子を未熟児にしまったという思いをどうしても拭い去ることができなかった。

この思いが知らず知らずに自分を固い殻に閉じ込めてしまつていたにちがいない。陽一郎にも知らせずに済むなら知らせたくなかった。

陽一郎が帰つて来るころには赤ちゃんも保育器から開放されていることだろう。そのとき何食わぬ顔をして父子の初対面を見守ることができればそうしたいと思う。

「未熟児だつて立派に育つから心配しなくていい。それに陽一郎くんもいまが正念場だから別に急いで知らせなくてもいいか……。でも心配してメー

ルを送ってきたから返事しないでいると、何度も電話をかけてくるかもしれないな」

俊太郎は呟くように言う。

「お兄さん、今日メール書くから心配しないで……」

亜耶子はどことなく暗く自信なさそうに見える兄の小さな目を見て、正念場にいるという陽一郎に余計なことを知らせまいとこころに決めた。

「そうしたほうがいいね」

俊太郎は椅子から腰を浮かしながら、「来週、会議でロンドンに出掛けるので、もしかしたら陽一郎くんに会えるかもしれない」と言い残して帰っていった。

18

七月の半ばを過ぎると、太平洋高気圧が日本列島はすっぽり覆い、各地で熱風が吹き荒び、気温が急激に上昇し始めた。朝から三五度を超え、連日最高気温を更新していく。気象庁は慌てて例年より早い梅雨明け宣言を行なった。

「今年は酷いわね。異常よね。休みになったら、すぐ子供たちを連れて実家に帰るわ」

汗を拭きながら入ってきた佐野美和がテーブルのうえに買い物袋を置くと、大きく息を吐いて言う。北国育ちの美和には暑さが堪えるらしい。

「ごめんなさい。暑いところをいつも……」

「なにを言ってるの。うちの分のついでだから、なにも気にしなくていい

のよ」

亜耶子が用意した麦茶を一息で呑むと、美和は帰っていった。

今年の暑さは例年とまるつきり違っていた。とにかく猛烈に暑かった。

亜耶子は一日中クーラーの効いた部屋にいて殆ど外に出なかった。

外気に当たらない亜耶子の身体は次第に暑さに耐える力を失い、暑さに脆くなっていた。ときどき換気のために窓や戸を開放するとき、冷気と入れ替わって部屋に侵入してくるむっとした熱気に外の暑さを感じるものの、それもほんの一時のことだった。

陽一郎は毎日メールを送ってきた。運良く見付けた小規模の暖水塊が北太平洋海流に乗り、北極海に入るところまで追いかけることに成功したらしい。水流規模、水温分布、塩分濃度分布、水蒸気発生量などのデータを観測し了え、帰途についているという。のんびり船旅を楽しんでいると思っていたのに、帰りにも調査を行い、データ整理や分析に追われているらしい。

彼女はまだ男児が生まれたことを知らせていなかった。なんとなくやましい気持ちに襲われながらも、返事のメールでいつも決まったように、相変わらず短く、「元氣、順調」の言葉を繰り返すだけだった。

酷暑の最中に、彼女は一滴の汗もかかずに一日中じつとベッドに横たわり、天井をぼんやり眺め、彼が帰ってくる日を指折り数えた。彼女は時折微睡むことがあったが、脳裏にはいつも保育器のなかの生まれたばかりの小さな赤い顔をしたわが子の姿があった。

退院後、一度タクシーを呼んで病院に出掛けたが、帰ってから体調を崩してしまった。退院後の初めての外出のせいかな、それとも気持ちが悪くなるほど冷房が効いていたタクシーのせいかな、全然分からなかった。

診察を了えた亜耶子は新生児室にまわり、廊下に立って、ガラス越しに小さなおむつを着けた姿で保育器のなかに横たわっているわが子を何時間も見つめていた。前よりも幾分顔の赤みが薄くなつたようだった。時折握りしめている小さな手を力一杯開く。小指が短いところは陽一郎に似ているようにも見える。

「抱いてみますか」

顔見知りの年配の婦長が亜耶子を見て、微笑みかけた。

「大丈夫なですか、外に出して……」

カンガルーケアという、カンガルーの子育てからヒントをえた未熟児のための療法があるという。母親は胸を開けて赤ちゃんを抱き、直に親子の肌と肌を合わせるのだ。

亜耶子は半信半疑だった。保育器は未熟な状態で生まれた赤ちゃんを十分に成育して普通に育てることが出来るまで安全に保育するための器具ではないか。そのため、保育器のなかは未熟児の成育に適した温度、湿度、酸素濃度など、外界とは異なる特別の環境が常時保たれているはずだ。彼女には危険を冒してまで未熟児のわが子とスキンシップを試みようとする勇氣はなかった。

「一時間や二時間は大丈夫なのよ」

亜耶子にその気がないことを感じたのか、婦長は笑顔を残して去っていく。太った寸胴の婦長の後ろ姿が視野から消えたとき、彼女は振り返って辺りを見回した。誰もいないのを確かめると、ふたたび窓のガラスに額を寄せた。

病院から戻ると、亜耶子はぐったりして倒れるようにベッドに横になった。クーラーのモーターが唸る音が耳につく。その音に合わせるように、

わが子を抱こうともしない母親を非難する婦長の険しい視線が執拗に追いかけてくる。

彼女はベッドのうえを輾転とした。

何度も保育器のわが子を思い浮かべ、そのたびに自分の不注意を責めた。わが子を未熟児にしてしまったのは自分のことしか頭になかったからだ。お腹のわが子を考えずに、熱中症の恐怖に脅え、いたずらにクーラーを掛け続けていた自分を許せなかった。熱中症になれば親子ともども危険に曝されることになるかと分かっていても、なぜか言い訳をしているようで自分を許すわけにいかなかった。

彼女は自分と闘っていた。彼女には保育器のわが子が未熟児として産み落とされたことを顔を真っ赤にして怒っているように見える。怒っているわが子を胸に抱き肌と肌を合わせることは、真っ赤に焼けた鏝を胸に当てるようで怖かった。

カンガルーのように未熟児のわが子を自然に抱けたらいいのにと思いつながら、亜耶子は寝つかれないまま何度も寝返りを打った。

## 19

「今年の海水温は異常に高い。なぜですかね」

突然、北原が電話してきた。研究依頼について打ち合わせにきたとき以来、なぜか音沙汰がなかった。中西には北原がなにを考えているのか分からなかった。

「発電所付近の漁民が心配しているんですよ。海水温がこうも高くなると

養殖ヒラメがダメになるといつてね。先生、原因はなんですか。いつまで続きますかね」

「温暖化のせいじゃないでしょうか。はつきりそう言いきるまでまだ説明されていないのですが、科学者の多くがそう思いはじめているようですし、IPCが……」

中西は適当に受け応えをしながら、妙に馴れ馴れしいK電力環境立地部の担当課長だという北原の顔をもう一度思い浮かべた。それにしてもあれほど海水温の上昇を気にしていたのに、なぜ研究依頼を出し渋ってしまったのか、彼は受話器を左手に持ち替え、あれこれ考え巡らす。

「そのIPCというのは、よく聞きますがね、連中の言うことは確かなものですかね。漁民たちには理屈を言っても聞かせても納得しないんですよ。それにとうとう困ったことが起こりましてね。実は……」

北原は声をひそめた。

発電所立地の際に予測した拡散範囲を超えて温排水が広がる現象が最近頻繁に生じているという。

発電所から放出された大量の温排水は海水の水温を上昇させ、海域に棲息する魚介類や海の生態系に影響をおよぼす。このために、発電所を立地する際、電力会社は通例、あらかじめ温排水のおよぼす影響範囲（温排水の拡散範囲）を決め、その海域での漁業を営む権利（漁業権）を譲り受け、補償金を払って漁業権を消滅させてしまう。漁業権を譲り渡せば、漁民たちはその範囲の海域で漁業を営む権利を喪失する。

いま問題となっているのは、電力会社が漁業権を消滅させた範囲（温排水によって海水温が一度上昇する範囲の海域）を超えて水温上昇範囲が広がっていることだった。北原は海水温の異常な高温現象がこれを加速して

いるのではないかという。

それは十分考えうることであった。だが、データがない状態ではなんとも応えられなかった。中西は北原の言うことを聞いているほかなかった。

中西は受話器を置いてからも、なにも手が付かず、ただぼんやりと机に座り続けていた。時折、九鬼のことが思い浮かぶ。あのとき、彼がいうように、海水温だけでも観測しておくべきだったろうか。それにしてもなぜ北原は途中で研究依頼を放棄したのだろうか。温排水の拡散範囲に関する広範にわたるデータの提供を求めたからだろうか。

突然、柏田の顔が浮かんだ。

「中西だけど、K電力の北原という男を知っている？ 環境立地部の担当

課長の……」

「なに、どんな男だつて？」

受話器の奥から柏田の甲高い声が響いた。そそくさに受話器を置くと、

中西は研究室を出た。

「北原という男だけ……」

中西は柏田の机のまえに近くの椅子を引き寄せて座り込みながら、繰り返す。

「うん、いやな奴だね」

柏田はディスプレイを覗きながら、吐き捨てるように言う。中西は一呼吸おいて、北原との電話でのやり取りの一部始終を話した。

「なにをいまさら……、そんなことは……、大体K電力は……」

中西は桜木部長がK電力は漁業権消滅範囲を厳格に決めようとすると言っていたことを思い出した。

「一度上昇による拡散範囲にはある程度ゆとりがあるんだろ」

「拡散範囲の線引きについては当事者双方神経質になる。海生生物への影響範囲であり、漁業権消滅範囲でもあるからな。ちよつとした手加減で、それに伴う補償額が何億も増えたり減ったりする。漁民にとつて海は生業の場だから彼らが真剣になるのは当然だよ。漁業権消滅範囲を超えて一度上昇範囲が広がつたとすると、問題だな。だがそれよりも、もつと困つたことにならなければいいんだが……」

「え？」

柏田はしばらく口を閉ざしていたが、「来るかな……」と呟き、顔を曇らせた。

「なんだ、それは……」

「九鬼陽一郎から聞いているだろ」

「なんのことだ」

「暖水塊のことだ。海水温がさらに高くなつたらどうするんだ。その可能性があることを知っていながら電力に事前に知らせなかつたということがバレたらどうするつもりなんだ。差し詰め、お前さんも同罪ということになるんじゃないの」

「……………」

「どうしてあのとき彼に観測させなかつたんだ。肝心なときに、彼をアメリカへ追い出すとはなにを考えているか分からん。どこに目が付いているんだ、どいつもこいつも。この研究所には先が見えない連中が多過ぎる。研究は先の先を見てやるんじゃないのか」

「暖水塊が接近しているのか」

「さあね。北原がそう言ってきたんじゃないのか。心配なら自分で調べて見るんだな」

柏田は突き放すように言うと、中西を残したまま、席を立つた。

ふと見ると机の上に開いたままのコピーが置いてある。手を伸ばして引き寄せた。彼が突き返した九鬼の提案書であつた。

中西はなんとなく立ち上がる気がせず、しばらく柏田の机の前に座つて、机のディスプレイを覗いた。

「これは……一体なんだ……」

中西は奇声を上げた。

戻つてきた柏田が隣からディスプレイを覗く。画面に黒味がかつた斑点が無数に映りだされていた。斑点群が海流に乗つて日本近海に迫っている。

「暖水塊だ。暖水塊の大群が押し寄せている」

九鬼の心配が現実のものとなりつつあつた。

「いまずぐ電力に知らせるべきだな」

「なんて、誰に知らせるんだ」

「近いうちに冷却用海水温が急上昇するおそれがあると知らせるのだ」

柏田は受話器を取り上げた。

「よせ。部長に話してからだ。所長の了解を取る必要がある」

と言いながら、中西は柏田から無理やり受話器を奪う。

「バカ、そんな余裕はない。勝手にしろ」

柏田は部屋から大股で出ていく中西の背に向つて投げつけた。

20

原子力発電所の若い当直員は中央制御室でオペレーターシートからじつと



前面のコントロールパネル(制御盤)に目を据え、文字盤に表示されている数字を順々にチェックしていく。日頃の決まったルーチンワークだった。

熱波が日本を襲い、酷暑の日々が続ぎ、電力需要も連日ピークを更新した。これにに応じて稼働中の発電所は出力一〇〇パーセントのフル運転を強いられていた。

その日も朝からフルロードだった。夜になっても気温が下がらず、熱帯夜が続く。いつもの夏なら一〇時を過ぎると電力需要も急に落ち込む。それに合わせて出力をダウンさせるが、この一週間はその必要もなかった。

「妙に暑いな。フェーン現象かな」

出勤途中で車の窓を開けたとき、溶鉱炉のそばにいろような熱い風が顔を撫でた。だが一步発電所の中央制御室のなかに入ると、そこは別世界でだった。若い当直員は冷房の効いた室内で作業を続けているうちに、車から降りたとき一瞬全身に纏わりついた異常なまでの熱い風を忘れてしまった。

その日の午後、若い当直員はふと冷却用の海水温がいつもより異常に高いことに気付いた。取水口に設置してある水温計が三五度を示している。

「海水温の表示が異常のようですが……」

彼は背後の机にいる運転総括責任者である当直長に向かって報告する。

「なに？ 水温計が故障したのか」

「分かりません」

「他はどうだ」

「二号機も同じです。三五度です」

「三号機も……」

「このまま運転を続けていいですか」

「いますぐどうということはないだろう。急に出力を落とすことはできない。給電と連絡を取ってからだ」

電気エネルギーは貯蔵することができない。そのため、電気エネルギーはつねに需要に応じて生産し供給することになる。給電指令室では毎日その日の需要を想定して、それに基づき個々の発電所に対して運転の指令を出す。発電所はそれに従い運転し、決められた量の電気エネルギーを送り出しているのだ。

西の空にはまだギラギラ耀く太陽があった。幾分陽射しを弱めたものの、中年女の執拗さで窓ガラスを照らし、ビル壁を焦がしつづける。クーラーはあえぎながらフル回転していた。

退社時間を控え、若い女子社員はそわそわと帰りの準備をはじめ。明日から休日となる金曜日には朝から仕事を段取りよく仕上げ、早めに切り上げる。片付け終わったとき、彼女は昼休みにお金を引き出すのを忘れていたことに気付いた。

時計を見た。五時まで三〇分あった。

若い女子社員はエレベーターへ走った。

銀行のATMのまえには行列ができていた。それでも五分も待たずに順番が来た。

画面にタッチしてカードを挿入した。暗証番号を押し終えたとき、頭上の蛍光灯の照明が一瞬揺らいだ。

これが近畿圏大停電のはじまりの合図だった。

停電は大阪北部から始まった。これが京都から神戸にかけて広がり、瞬く間に近畿圏のほぼ全域が停電となった。

「停電です。ATMは使用できません。しばらくお待ちください」

中年の行員が飛んできて行列に向かつて告げた。

「カードが入ったままなんです……」

行員が近寄ってきて、操作するとカードが吐き出された。リセット装置のボタンを押したらしい。

若い女子社員は不思議そうに行員を見た。確かに天井の照明が消えている。入口のガラスの扉を通して洩れてくる外光だけで回りは薄暗い。

「停電で、ホント？」

「はい、いま問い合わせているんですが……」

行員は近くのATMの受話器を取って、耳にあてる。

「申し訳ありません。回復の見込みが立たないそうです。ここは使用できませんので、一端閉鎖します。回復すれば再開いたしますが、いつになるか分かりません。コンビニにもATMがあります。そちらもご利用いただけます」

広い幹線道路一杯に動きの取れない自動車が犇めいていた。交通信号が消えた交差点をわれさきに通り返けようとして突っ込んだ車が数台、まるで角突き合わせて闘っている牛のような格好でいがみ合い、道を塞いでいた。クラクションが鳴る。

「なんや、なんで渋滞なんや」

「さあ……、事故とちがうか」

タクシートの運転手は無線のマイクを取る。何度呼びかけても応答がない。諦めてラジオのスイッチを入れる。

――京阪神地方に大規模な停電が発生した模様です。回復がいつになるか分かりません。新しい情報が分かり次第お知らせしますが、交通信号が消えているので、事故が多発しているとのこと。車を運転している方は十分注意してください――

「停電？ アホか。降りるわ」

中年の客は犇めく車の間を通り抜けていく。無数のクラクションが鳴り渡る。

上空からヘリの爆音が響く。

若い女子社員はクラクションに耳を塞ぎ、歩道を往くひとの間を縫って急いで会社に戻る。エントランスホールに入って一息つく。エレベーターが動かない。古いビルには非常用の自家発電機はなかった。彼女は覚悟を決めて、一〇階までの非常用階段を上りはじめる。

非常用階段はエレベーターの裏側にあった。入口にはドアに閉ざされており、普通は使用されていない。いつもなら薄暗い照明が点いているが、それも消えてしまい、足下に小さな非常灯が点いているだけだった。手摺りに掴まり、おそろおそろ交互に足を出し、階段を確かめて上っていく。汗が噴き出した。もともとエアコンのない非常用階段は蒸し風呂のようだった。階を重ね、上の階に上るごとに気温が高くなっていく。のどが乾く。彼女はハンカチで何度も額の汗を拭いた。

早く灼熱地獄から抜け出したかった。だが足が上がらない。腿がぱんぱんになった。彼女は手摺りにもたれ、階段に座り込む。非常灯に近づけば、時計を見る。針は五時を指していた。うかうかしていると退社する同僚と鉢合わせになってしまう。

彼女は立ち上がり、筋肉の痛みにも耐え、再び階段を上りだす。

デパートの地下食品売り場にはさまざまな食べ物の匂いが充満し、夕食の総菜を物色する主婦たちが群がっていた。売り子たちがこの二時間が勝負と言わんばかりに声を囁らして客に呼びかける。

デパートの大きな紙袋をぶら下げた熟年の主婦は試食品を楊枝で口に運び、味見に余念がなかった。金曜日は亭主の帰りが遅いのは分かっている。一人でレストランで食事する気にもならないし、かといって料理する気にもなれない。六階の催し会場で自分の買いたい物を済ませると、彼女は美味しそうな総菜を買って帰ろうかと地下の食品売り場を覗いたのだった。

時計を見た。ラッシュが始まる五時まで大分間があった。地下道を通っていけば地下鉄の駅はすぐだ。味見する時間がまだ三〇分はゆうにある。彼女は客の間を潜り、試食品に近づき、楊枝を突き刺す。味見を繰り返すうち、お腹が満たされていく。

地下鉄への地下道入口を示す標識が目に入った。彼女がその方向に動き出した。その瞬間、照明が突然消えた。暗闇が支配した。さまざまな総菜の匂いが強烈に鼻をつく。

小さな豆電球の非常灯が点いた。仄かな光が不安そうに押し黙った無数の顔を照らし出す。

「停電です。一階の出口まで係員が誘導いたします」

その途端、一斉に口を開け、声を発した。一瞬の静寂が破れ、喧騒と化した。買い物が続けようとするもの、係員の誘導を無視してわれさまに階段を上るもの、反対に地下道の方へ進もうとするもの、さまざまだった。

地下鉄も止まった。薄暗い非常灯が車内に閉じ込められた乗客を照らした。乗客の顔に不安が走る。

「そのまましばらくお待ちください。危険ですから線路に降りないでください」

車掌の制止を聞かず、乗客の一人が非常用コックを開け、ドアを開く。一人が飛び降りると、あとがつづく。暗いトンネルの中を駅を目指して人の群れが連なつて線路を伝つて歩き出す。

地下街の買い物客や地下鉄の乗客はわれさまに地上への出口をめざす。出口の階段から人がわき出るようにつきからつきに出てくる。

デパート、ショッピングセンター、モール、映画館からも一斉に人が群れ出て、一瞬のうちに地上の歩道が無数の人びとの群れで埋まり車道に溢れ出す。

五時を回り、仕事を終えたサラリーマンがビルから吐き出され、歩道を埋める。サラリーマンの群れは帯となって私鉄やJRの最寄りの駅に向かう。

停電とともに、地上を走る電車も止まった。車内の冷房も止まり、五分も経つと、西日をまともに受けた車内はオープン状態と化した。

車掌は「しばらくお待ちください。危険ですから線路に降りないでください」と繰り返し、車内に閉じ込められた乗客は「焼き鳥になってたまるか」と非常用コックをひねる。ドアが開くと、つぎつぎに線路に飛び降りる。乗客は行列をつくつて線路伝いに歩きます。西日が執拗に行列を射る。

駅のホームには人が群がっている。電車は止まったままだ。

改札口の回りにも人垣ができた。駅のホールも駅前広場にも人で溢れていた。

駅構内には身動きできない人びとで満ち、むっとした熱気がこもっていた。群れのなかで子どもが悲鳴を上げた。老人がひとりうずくまる。制服を着た女子高生の一団がつきつきと折り重なって倒れた。

「駅員を呼べ。病人だ」

上空をテレビ局か新聞社の取材用ヘリが旋回している。

パトカーがラジオのニュースを流してゆつくり通り抜けていった。

停電が長引くという情報に、サラリーマンがひとりふたり連なって歩き出した。その後を多くの人がつづく。次第に列が膨れあがり、大群となる。家路に向かう大群で歩道が溢れ、車道にはみ出す。人びとは西日を受け、汗を流して歩いていく。

ビルのエレベーターも停電で止まった。ラッシュを控えた時間だったが、面談や用事を終えて会社に戻る人がたまたま乗り合わせて閉じ込められた。電車と違い、エレベーターのなかには扉を開く非常用コックがない。閉じ込められたものは助けが来るのを鉄の箱の中で待つほかなかった。

まだ明るかったが、大阪空港と関西空港も、停電とともに乗客の手荷物検査や荷物の処理が不能になった。航空機の発着が抑えられた。

管制塔には非常用電源が用意されていたが、離着は全面ストップした。着陸も極力抑え、近傍の空港へ回した。空港の出入口は閉鎖された。

「停電？ 五分過ぎても電気が点かなかつたら、店頭で生もの、葉物、冷

凍食品の順で五割引きで売りまくれ。七割引きにしても売れ残りを出すな。早く準備しろ」

照明の消えたスーパーの奥から声がした。

「店長、レジが使えない。つりを出せませんよ」

「端数は切り捨てだ」

まだ明るい店頭で折りたたみテーブルが広げられた。ゴムカッパの店員が魚介類を運び出し、「タイムサービス。半額、お買い得」と掛け声を掛けながらテーブルにトレーの生魚や貝類を並べていく。

「停電か、おい、どうしてくれる。全部やられたか」

ディスプレイが消えた。打ち込み中のデータも消えた。バックアップ用電源のないコンピュータが止まった。決済問題のよもやの停電によって受けた損害は予想を超えてかなりの額に達した。

情報社会で電源が喪失することはジュースやアルコールといった飲み物の自動販売機がただの鉄箱と化するのとわけがちがう。ATMから週末の運転資金を引き出すことができないことぐらいは序の口だった。

停電によって網のように張り巡らされた目に見えないネットワークが突然至る所で分断された。バックアップ用電源の確保が不十分だった。アダプターの付いている固定電話は使用不能となり、ファックスも途絶えてしまった。肝心のセキュリティシステムも半身不随の状態だった。

またバックアップ電源が用意されていたとしても、日ごろの点検がなおざりになりがちで非常用施設が非常時に際して順調に機能するとはかぎらない。停電発生時にスムーズにバックアップ電源が働いたケースは一〇〇パーセントではなかった。自動変換のスイッチの入れ忘れといった初歩的

なミスがかなりあった。

だが大きなシステムに問題があった。バックアップ電源の備えがあるにもかかわらず、なぜかスムーズに機能しないのだ。それにバックアップ電源はあくまでも一時的に用いる非常用であって、永続的に使用することはできない。停電が長期間続くようになるとお手上げになってしまう。

情報社会は不意の停電によってさまざまなダメージを被った。ネットはわずたわずたに引きちぎられ、蓄積したデータが食い破られ、一回限りの貴重なデータが消失してしまった。これらの目に見えないダメージは後遺症となつて追々情報社会を蝕みつづけることになるだろう。

21

「おい、なんや。そりゃ絶対阻止せにゃあかん」

北原は携帯電話を叩きつけた。

「部長、漁民らが社長との直談判を要求して本社にやつてくるそうです。これから〇発電所に出掛けてきます」

照明が消え、窓からの明かりだけで薄暗いうえに、冷房が止まり、締め切った室内は汗臭く暑かった。

北原は天井の蛍光灯が一斉に消えたとき、予期しない胸騒ぎを覚え、不安に駆られた。大漁旗を担いだねじり鉢巻きの一団が脳裏を過った。彼はよもやと思つたものの、すぐさま、〇発電所の環境担当の課長に電話を入れたのだつた。

出掛ける支度をしたものの、足をどうするか迷つた。電車はまだ動いて

いないはずだ。道路が渋滞していないか心配だったが、停電がかなり長引くことを見越して、自社の車で行くことにした。

運転要員に部下の係長をともない、W湾に面した小さな入江の端に立地している〇発電所に向かう。

北原が車の助手席に滑り込むと、係長は車を通用門に回した。

道路には車が数珠繋ぎになっていた。運よく割り込めたものの前の車は動かない。停電がはじまつて間もないこともあり、道路には車が溢れていた。それにラッシュアワーを迎え、車の数が増えはじめる。

「車はいま本社前だが、運がよければ八時か九時には発電所に着くだろう。様子を聞きたいので待つてくれないか。用事があつたら連絡してくれ」

北原は苛々しながら携帯電話を取り出すと、発電所の環境担当課長を呼び出した。彼は番号を告げると、携帯を畳み、シートに身を埋める。

車がゆつくり動いては止まり、また動きだす。それを繰り返す。

交通信号が消えた幹線道路の交差点には交通整理の警官が出て、手信号で車を誘導していた。

空いている道を探して路地に潜り込む車、路地から出てきて隙間を見つけて強引に割り込むとする車、無理やり横から突っ込んできた車で車列は乱れ、流れが完全に止まる。クラクションが絶え間なく響く。前の車が動き車間に隙間ができると、割り込まれないまえに車を動かし少しでも前へ進もうとする。

「全くマナーがなっていない。これじゃ、いつ大阪を抜けられるか分かりませんよ、課長」

運転している係長が悲鳴を上げる。

北原は口をへの字に曲げたまま返事しない。着信メロデーが鳴った。六

甲下ろしだ。携帯を開いて耳に当てた。

「北原ですが……」

○発電所の環境担当課長からだった。隣接するT発電所の担当者にも声を掛けて来てもらおうかという。

「渋滞に嵌まっているんや。いつそちらに着くのか分からんや。ところで、そっちの発電所はどうなってるんや。復旧にはまだまだ時間がかかりそうなんか」

北原はしばらく携帯電話を耳に押しつけていた。長々しい要領の得ない話し方だったが、怒鳴る訳にもいかず、彼は苛々しながら○発電所の環境担当課長が話し終えるのを待った。

話の内容はつぎのようだった。

運転再開は総点検を済ませてからする必要があるのですが、復旧には大分時間がかかるそう。取水時の海水温が著しく高かったという報告があったので、念のために、舟を出して取水口周辺の海水温を測定したが、やはり三五度程度だった。W湾内の方々の生け簀で魚類が全滅したようだ。漁民たちは浮いたヒラメを取り除く作業をしているが、いまのところ際立った動きはない。漁協では役員たちが会議を重ね、組合事務所に漁民たちが集まりはじめているという。

北原はおもむろに携帯を畳むと、車窓に目を移した。車は渋滞のなかだ。車は時折思いだしたように動き出し、数メートル進んでは止まる。そんな繰り返しで、方々からクラクションが響く。

上からあらゆる手を駆使して停電の早期復旧をめざせという業務命令が下されていた。他社からの応援は期待できなかった。静岡から西の一带は同じ周波数の電力が供給されているから、もし西の各社に余力があれば、

直接融通してもらうことが可能だ。だが西日本一帯は連日猛暑が続き、電力需要は連日ピークを更新して余裕はなかった。

たとえ東京や東北など東日本側に余力があつて、余剰電力を回してもらうことができるとしても、そこには周波数の違いという越えがたい壁が立ちほだかっている。壁を越すには周波数を変換する必要があるのだ。だが周波数変換装置は一〇〇万キロの規模に満たず、フル回転できたとしても、これだけでは焼き石に水だった。

大停電を早期復旧するにはT、Oの両発電所を早期に再開するほかなかつた。だが漁民たちが温排水放出阻止の実力行使に出たらどうなるか。

戦慄が走った。発電所再開の決定権が漁民たちに握られているんじゃないか。そんなことがあつてたまるか。彼はなんとしても漁民たちを説得して一刻も早い再開に漕ぎ着けたいと思った。

彼は海洋科学研究所に海水温昇温メカニズムの解明を依頼しなかったことを後悔した。わざわざ研究所まで出向いて打ち合わせをしながら、なぜ依頼しなかったのか。

車窓から遅々として進まない隣の車にぼんやりと目を向けたまま、彼はあのとき中西室長の隣にいた九鬼という一風変わった若い研究員を思い浮かべた。生意気な言動が気になって、研究結果が外に洩れ出ることを恐れたのだ。

つぎの人事で次長に昇格し、いよいよ部長職が射程距離に入ってきているいま、わざわざ危険を冒し、物議を醸すこともあるまい。こう思い、彼は依頼を見送ったのだ。

海洋科学研究所に依頼して、海水温の予測を行なっておれば、大停電を避けられたかもしれない。突然、あのとき同行した部下の顔が浮かんだ。

思わず汗が噴き出した。

胸の奥に立ちはじめた小さなさざ波が次第に大きく広がっていく。彼は無力感に襲われ、全身から力が抜けていくのを感じた。

不意に、マンションの冷房の切れた部屋でペソをかいている末っ子の顔が脳裏に浮かんだ。彼が四〇になってから生まれた子だ。まだ幼稚園だった。妻は男ばかりの食べ盛りの三人の子どもたちの夕食の支度に追われて末っ子に構うこともできずにいるにちがいない。一瞬不安が過った。子どもが止まったエレベーターに閉じ込められたりしてはいないだろうか。そんなことになったら、妻は一番に電話してくるはずだ。

彼は携帯を取り出した。何度も呼び出しを試みるが、通じない。

「課長、通話が集中して通じにくくなっているんじゃないんですか」

係長はちらつと北原の右手に握られた携帯に視線を走らせて言った。

「そやな、電源が切れているんか」

ファックス機能付きや他のアダプター付きの固定電話器は電源が必要で、停電になると電話そのものもダウンして通じなくなってしまう。彼は妻の携帯の番号にかけ直した。やはり通じない。

彼は諦めて、フロントガラスに目を向けた。

22

「おい、きみ、関西で大規模な停電が発生したそうだ」

桜木が中西の研究室に飛び込んできた。

「部長、どうしたのですか」

中西は机に座ったまま、顔を上げる。桜木の血の気のない引きつった顔があった。

「突然、原子炉が自動停止したらしい」

「原因はなんですか」

中西は柏田の顔を思い浮かべた。

「暖水塊とか言ってたな、九鬼が」

「まさか、そんなことはないでしょう」と言いながら、中西はやはりあれが原因だったのかと思った。

「北原課長からなにか言ってきたか」

桜木は勘ぐるような目で中西を見た。

「いえ、まだなんとも……」

「やつこさんには決して暖水塊のことは話すなよ、いいね。そんなことを話したら、なんていちゃもん付けられるか分かったもんでない。停電の責任を擦り付けられたらかなわんからな」

桜木が背を向けたとき、電話のベルが鳴った。反射的に、中西は受話器に手を伸ばす。桜木が振り返り、じつと耳をそば立てている。

「関西で大停電をもたらした暖水塊が北上しているぞ」

柏田だった。中西は受話器を強く耳に押し付け、柏田の声が外に漏れないようにして、桜木の目を見て顔を横に振った。桜木は軽く頷くと、背を向けて出ていった。

「関西で大停電をもたらしたって、どういうことだ。オレはなにも知らないことになっている。暖水塊が原因だなんて、軽々しく言ってもらっては困る」

「おい、そこに誰がいるのか」

受話器を激しく叩きつける音がした。しばらくすると、柏田が血相を変えて飛び込んできた。

「T電力にいますぐ連絡すればなんとか間に合うかもしれない。さもないと首都圏が大停電に襲われるぞ。いいのか」

「オレはなにも知らないと言ったろう」

「そんなことでいいのか」

「桜木部長に言ってくれ」

柏田は中西を睨みつけて出ていった。

亜耶子はリビングルームのテーブルの椅子に座り、音を消したテレビの画面にぼんやりと目を向けたまま、長い間わが子に会いに行くべきか迷っていた。

彼女はまだ陽一郎に男児を出産したことを知らせてなかった。彼が帰ってくる前に保育器のなかのわが子を連れて帰ることができればと何度思ったことか。

だが自信がなかった。体調が優れなかったし、未熟児にはまだ暑すぎるように思えるのだ。

暑い日が連日つづいた。今日も燃えるような太陽にコンクリートの壁が一日中焼き焦がされ、クーラーもあまり効かなかった。夕方になってもとても暑かった。

水を飲むもと立ちかけたとき、彼女は軽い眩暈を感じた。ふたたび椅子に腰を下ろして、彼女はじつと眩暈が治まるのを待った。

そのとき、なにげなくテレビに目が走った。画面に映し出された『京阪神地方で大停電発生』という文字が目飛び込んだ。彼女の目が画面に釘

付けになった。

彼女はリモコンを引き寄せ、音を出し、ボリュームを上げていく。

午後四時四〇分頃、大阪、京都、神戸一帯に停電が発生しました。K電力によりますと、連日の猛暑により一部に電力不足が生じ、これが発端となつて停電が広がつたらしいということです。今回なぜ大規模な範囲にわたり停電を引き起したのか不明で、現在調査中です。いまのところ復旧の見通しが立っていません。中継で現地の様子を伝えていただきますー

駅前広場に溢れた人の群れ。バスに並ぶ長い行列。動きの止まって渋滞している車の列。交差点で四方から突つ込み動きの取れない車の群れ。線路に止まっている電車。太い帯となつて家路を急ぐひとの群れ。車道にはみ出し車の間を縫つてちょこちょこ動く細い列。開場を待つ人の行列で埋まっている野球場のゲート前広場……。

ヘリコプターから撮影したらしい上空からの映像がつづく。

亜耶子は不意になぜか遠い別世界の出来事のような気がした。

画面から目をそらすと、眩暈を恐れ、椅子からゆっくりり身体をもち上げる。ゆっくりり時間かけて冷蔵庫まで往復し、ペットボトルの水をもって戻ったとき、彼女はか細い声で泣く赤ちゃんの泣き声を聞いたような気がした。

テレビ局の女子アナウンサーが団地の一角で、住民たちにインタビューしている。

「水道が止まってしまい、哺乳瓶を洗う水がなくなつて、水を買いに下りてきたところです。停電はいつ復旧するのですか」

「水道から水が出ないのですか」

「十五階まで水をもつて階段を上つて行かなければならないのよ」

二リットル入りのペットボトルを二本ぶら下げた若い母親は泣き出しそ



うな顔を残して走り去る。

団地の全景を背景に、アナウンサーのレポートが始まる。

「この団地にはほぼ千五百世帯が住んでいます。電気が停ったうえに、水道も止まり、冷房のない暑い夜を迎えようとしています……」

一度耳にした赤ちゃんのか細い泣き声に耳について離れようとしな

い。亜耶子はもってきた水を飲むのも忘れ、重いペットボトルを抱え、汗を拭き拭き、息を切らして階段を急ぐ若い母親を思い浮かべていた。

## 23

ビルが建ち並び、アスファルトで覆われた都会では外気の気温は異常に高い。都心では夜になっても気温が下がらず、二週間熱帯夜がつづいたその日の電力需要は夜になっても下がる気配がなかった。

都心に林立する高層ビルでは一日中クーラーが回り、室内の熱気を外に放出し続ける。それに加えて、日中直射日光で焼かれたビルの壁が夜になって逆に大量の熱を放射するのだ。

その日も退社時間になると、サラリーマンの帰宅ラッシュが始まった。ニュースで関西圏の大停電を知っているのか、定時には足早に駅へ向う姿が目についたが、首都圏では電車が走っていることを知ると、帰宅を急ぐ群れも乱れ、ばらばらになっていった。

九時を過ぎると、夕方から続いていた通勤ラッシュが終わる。

地下鉄が何本も交差している都心のビジネス街に近い乗り換え駅のホームでも、乗降客が急激に減りだした。乗降客がまばらになり、閑散となっ

たホームの端を、乗り換えを急ぐのか、残業帰りらしい一人の若いサラリーマンが俯き加減で足早に過ぎていく。時折、飲み会帰りのグループの男女の賑やかな話し声が響く。

一瞬、駅構内の照明用蛍光灯の発光体が揺らぎ、光量が落ちた。

つぎの瞬間、照明が消え、薄暗い豆電球が灯った。

通風口から吹き出していた冷気が止まった。空気が淀みだした。

しばらくして、懐中電灯を手にした駅員が現れ、ハンドマイクを片手に「停電が発生しました」とアナウンスをして歩く。

ホームの乗降客が出口へと誘導され、動かないエスカレーター、鉄の階段を汗を拭き拭き、思い思いに登り出す。

蛍光灯の一瞬の揺らぎが合図だった。

これに続いて停電が生じた。瞬く間のうちに、大都市東京を暗闇のなかに陥れた。

首都圏では、最初、北部の一部の地域で停電が始まった。これが連鎖反応のように広がり、都心全域に大規模な停電を招いた。

ネオンが消え、広告灯が消えた。

交通信号が消えた路上で、ヘッドライトが交差し、交差点に突入した車に横から割り込みようとした車が接触した。後続の車が追突し、そのはずみで横の車に衝突する。いたるところで多重衝突事故が発生した。

交差点には瞬時のうちに、われさきに前に進もうとする車が四方から突っ込み、車で詰まり、動きが取れなくなってしまう。道路に車が数珠繋ぎとなった。線路には電車が列をなして止まり、交通機関は広域にわたり完全にマヒした。

郊外に通じる私鉄ターミナル駅前、JRや地下鉄に通じる入口の階段に

人が溢れた。路上に数珠繋ぎとなっている車が一齐にクラクションを鳴らす。

動けない車はエンジンをかけたまま、クーラーを回している。排気ガスが一面に漂い、ガス臭を帯びた熱風が群衆を襲う。

「蒸すわね。気分が悪いわ。パンクしたのかしら、全然通じない……」

携帯を片手に、女が連れの男にぶつぶつ言っている。

立ち並ぶビルが墓石のような黒い影を落とし、暗闇の中で人が蠢いている。車のヘッドライトや懐中電灯の僅かな光を求めて群衆が動く。非常用電源をもっているのか、自家発電なのか、それともロウソクの光か、暗闇のなかでいくつかのビルの窓や人家からうつすらと灯がもれる。

遠くで、サイレンが鳴った。救急車の警笛音が響く。

手術中に突然停電に見舞われた病院は慌てふためいた。幸運にも非常用電源の用意があるところでは弱い光を頼りに手術が続けられた。用意のないところでは手の施しようがなかった。

電力会社などに非常用電源車の配車を依頼しても数に限りがあったし、運良く配車できても道路が渋滞しており目的地にはなかなか到達することができなかった。他の病院へ搬送したくとも、救急車は警笛を鳴らしたままいたるところで立ち往生させられた。

羽田空港も成田空港も一瞬暗闇に閉ざされた。非常用電源をもつ管制塔では管制官が慌てて離着態勢にある全機に対して待機の指示を出す。間に合わない二機が前後して飛び立った。着陸態勢に入っていた旅客機が機首を上げ、再び上空に舞い戻る。

進入灯に灯が点った。自家発電機が動き出したらしい。だがターミナル

ビルは暗闇に包まれたままだ。

管制官は上空を巡回する旅客機に他の空港への着陸変更を指示する。

航空会社は運航を見合わせ、停電の復旧を待つ。

停電発生から一時間が過ぎた。まだ回復の兆しがなかった。

東京の北部にある建設当時コンクリート箱と酷評された古い大規模な団地でも突然停電に襲われた。古びた不格好な六階建ての建物が無造作に居並ぶ団地でも曲がりなりに二三区内にあり、地下鉄一本で都心まで行ける便利のよさが人気を呼んで、他に引越す居住者は少なく、空き室は殆どなかった。

停電が襲ったとき、幼児や老人はすでに横になり、低学年の子供たちも明日の登校に備えて眠りにつくところだった。停電を機に、テレビやゲームに興じて夜更かし癖の付いた子供もしぶしぶ寝床に着いた。

連日四〇度を超す超真夏日がつづき、強烈な太陽光線に焼かれてすっかり火照ったコンクリートの壁は夜になっても冷えず、クーラーが欠かせなかった。

クーラーがとまると、瞬く間に室内がオーブンと化した。暗い夜空のものと、窓やベランダのガラス戸を開放する音が一斉に響きわたった。

風のない熱帯夜だった。外気はまだ三〇度を超えている。窓や戸を開放しても効果がなかった。

クーラーで冷えて乾燥していた室内の空気が湿度の多い熱い外気と入れ替わった。眠っている子供の体中から汗が噴き出す。母親はタオルで汗を拭き、団扇でパタパタ扇ぐ。子供が泣きだした。

「暑い。冷たい麦茶頂戴」

作り置きのお茶も無くなりかけている。それに何回も扉を開閉されて、冷蔵庫のなかも温まりだしていた。貯蔵してある肉や魚が臭いを発し腐りはじめる。冷凍食品が溶けてぐしょぐしょになりだす。

屋上にある貯水タンクの水もすでに使い果たしたらしく、水道栓を全開しても一滴の水も出なかった。停電で汲み上げ用ポンプの電源が切れ、水の補給ができないのだ。浄水場も停電で大半が止まり、給水がストップしてしまう。

水道が出ないとすると、シャワーも使えないし、水洗トイレの水も出ない。汗まみれになった身体は我慢できてもトイレは我慢できない。汲み置きの水や浴槽に風呂の水があればまだよかった。流す水がないところでは室内にトイレの臭いが漂い出した。

いつもなら一面を照らし出している水銀灯が消え、中央の広場には黒い人影が蠢く。暑い室内から逃れてきた人々だった。

エレベーターは動かない。高層マンションの住人は暗い階段を何百段も下りて行く恐怖におののき、地上に出ることを断念した。突然つくりだされた孤立した空間に閉じ込められたまま、トイレの臭いから逃れて、ベランダで遥か遠くに広がる光の海を眺め、なぜここだけが停電なのかと口汚く電力会社を罵り、溜飲を下げるほかなかった。

時折、上空をヘリコプターが旋回する。パトカーや消防車のサイレンが響く。救急車が走る。

緊急時の通行を確保するために、停電区域への車の新たな乗り入れが規制された。これと並行して、路上で数珠繋ぎになっていた車の移動がはじまった。

警官が動員された。自衛隊の緊急出動要請について検討がなされた。

駅前を埋め尽くした群衆が広場や路上に座り込む。群衆の一部がロウソクの灯を灯している交番を幾重にも取り囲んだ。石が投げ込まれた。割れたガラスが前列の男の額を切った。

そのとき、駅構内の蛍光灯が一斉に点った。

駅構内で係員が動き回り、車両や線路の点検に余念がない。郊外に向かう電車の運転再開がアナウンスされた。

駅前広場に座り込んでいた群衆が一斉に立ち上がり、構内へと移動しだす。駅員はハンドマイクで誘導する。殺到した乗客を一度にさばききれず、改札規制が始まった。

ホームではすし詰めの乗客で膨らんだ電車が発車の合図を待っている。

一番目の電車が動き出して、すぐがくと急停止した。

ふたたび、停電が発生したのだ。辺り一面が闇に戻った。

二時間経ち、三時間経っても、停電が回復する気配はなかった。

上空を旋回するヘリコプターも姿を消し、テレビの取材も一段落すると、駅前が集まった群衆の喚いたり怒鳴ったりする声も小さくなった。暗闇に疲れて座り込み、頭を抱えて眠り込んだ。

24

亜耶子は暑苦しさを覚えて目を覚ました。体中に汗をかいている。首筋から肩にかけてパジャマがぐっしり濡れていた。

彼女は上半身を起こし、足を床に降ろした。意識が朦朧としていた。し

ばらく彼女はベッドの端に腰掛け、意識が完全に戻るのを待った。

背筋を汗が流れた。ベッドサイドのスタンドに手を伸ばし、彼女はスイッチを引いた。何度引いても、スタンドは消えてはまだ。

じつと耳をすました。クーラーの回る音がしない。緑の電源ランプが消えているのに気付き、彼女は一瞬、寝る前にタイマーのスイッチを入れていたのかと思った。だがそんなはずはなかった。夜間はいつも快眠モードで運転しているはずだ。彼女は手元のリモコンをクーラーに向け、ボタンを手当たり次第に押した。全然反応がなかった。

コードが外されているのかと思い、彼女はリモコンを持って、闇の中をそろりそろりとクーラーに近づいていく。分厚い遮光カーテンに触れた。その瞬間、隙間から薄明かりが覗く。彼女は急いでカーテンを開けた。室内に蒼い月明かりが広がった。

ガラス戸を開けた。生ぬるいねっとりとした空気が部屋に入ってきた。汗が滲んでくる。彼女は手の甲で額の汗を拭いた。そのとき、いつも点いている街灯が消えているのに気付いた。

「停電かしら……」

彼女は急いでテレビのスイッチを入れた。部屋の照明のスイッチを入れた。スイッチは乾いた音を発しただけで、なんの反応もなかった。彼女はタオルを持って、電灯のない暗い部屋に座り込んだ。洗面所でタオルを濡らそうと思い、水道の栓を開く。屋上の水槽はすでに空になってしまったのか、申し訳なきように、ちよろちよろと流れて止まってしまった。反射的に、彼女は栓を全開する。だがもうなんの反応もなかった。

彼女は汗を拭きながら、リビングルームに戻り、食卓の椅子にどすんと身体を落とした。両腕をぶらりと伸ばしたまま、早く停電が終わるのを待つ

た。

突然、彼女の脳裡に保育器のわが子が思い浮かんだ。病院も停電なのだろうか。彼女はじりじりしながら、電話機のそばに駆け寄り、受話器を取った。

だが回線が切れているらしく耳にした受話器からなんの音も洩れてこない。ターミナルアダプターを見ると、電源ランプが消えている。彼女は受話器を激しく叩き付けた。

懐中電灯を片手に、彼女は外に出た。通りの街灯がひとつも灯っていないことを確かめると、すぐ引き返して職員住宅の屋上に通じる階段を上った。

階段は建物の中央にある。屋上まで九十九折りの階段が通じており、各戸の玄関が階段の踊り場に面している。彼女は自分の玄関の前を通り抜け、そのまま階段を上りつづける。一段昇るごとに、全身から汗が噴き出した。屋上へ出た。

微かに、風があつた。彼女は病院を探した。闇に慣れた目に深閑と静まり返っている家並みが月明かりに浮かび、輪郭だけが黒く露になって見える。だがいくら目を凝らしても家並みの奥の方は一面闇の世界であつた。

一瞬、病院の方向に薄明かりを見たような気がして、彼女はじつと暗い闇に目を凝らした。か細い泣き声が聞こえてきたように思った。だが暗闇のなかで泣き声は次第に遠のいていく。ふと保育器のわが子が自分から離れて手の届かないところにいつてしまったように思えた。

彼女は一心に手を伸ばして、虚空を掴み、必死にわが子を掴まえようともがいた。額の汗が頬を伝い、滴り落ちる。彼女はようやく諦めて、肩を落として一段一段階段を下りていく。

部屋に戻ると、彼女は開け放たれたペランダのガラス戸のそばにしばらく佇んだ。それから思い出したように、時計を見た。三時を過ぎている。

彼女が屋上を往復したとき、誰一人物音を聞いて顔を出すものがいなかった。彼女が目を覚ましたの逆、職員住宅の住人達は停電の復旧を待ちわびて疲れ果て、ようやく眠りに落ちていったのだろう。

亜耶子は急いで身支度を整えると、外へ出た。

街灯が消えた暗い道を急いだ。生暖かい空気が肌を纏わりつく。夜明け前の闇の中で、家並みの暗い影が一層黒く見える。彼女は身体に纏わりついた生暖かい空気を振り払うように、暗闇を切つて一心に走り出す。

すぐ息が切れた。彼女は肩で息をしながら、足早に歩を進める。

街路には人影がなかった。途中、公衆電話ボックスを見付け、手探りでタクシー会社に電話したが、応答がなかった。彼女は諦めて、また歩き出した。だが道を迷ったのか、行けども行けども暗い闇だった。それでも彼女は先に進むとした。保育器のわが子のか細い泣き声が気になって仕方がなかった。

前方に灯が見えた。彼女は無我夢中で走った。なにか固く丸いものを踏みつけた。彼女の身体が宙に浮いた。歩道のコンクリートのブロックに勢いよく叩き付けられた。そのままうつ伏せになって、彼女は意識を失った。

ふと気付くと、朝の太陽が背中を射していた。真夏の太陽は早朝から真昼並にギラギラと射る。後頭部や背中に受けた日射が全身を射抜いていく。

亜耶子は朦朧とした意識のなかで、ようやく歩道に倒れている自分に気付いた。立ち上がろうとしたとき、左足首に激痛が走った。それでも彼女は歯を食いしばって立ち上がって歩き出した。動いたたびに激痛が脳髄を叩く。

一瞬、目の前が真っ暗になった。眩暈を感じて、身体がくらくたとふらつく。昨夜から殆ど水分を取っていないことを思い出した。

二四時間営業のコンビニの扉は閉まったままだ。彼女は店頭に並んでいる缶ジュースの自動販売機に近づき、硬貨を投入した。硬貨は金属音を発してそのままを釣り銭受けに出てきた。何度やっても同じだった。まだ停電が続いているため販売を止めているのだ。彼女は自動販売機の前を離れた。

保育器のなかの赤ちゃんが目の前に浮かんだ。保育器のなかはどうなるのだろう。保育器のなかのわが子は大丈夫だろうか。

電源の切れた保育器のなかはすっかり暑くなって、赤ちゃんは泣きわめいているだろうか。今日こそ、未熟のわが子をカンガルーのように一日中抱いていよう。

無性にわが子を強く胸に抱きしめたかった。彼女は感覚のない足を引きずり、走りだす。身体が火照り息苦しかった。それでも彼女は自分にムチを打ちつづけた。

事故を起したのか、道路に車が二台放置されている。車の脇を急いで通り抜ける。車の中に人がいたような気がした。だが彼女は目もくれずに走った。一刻も早く、わが子に会いたかった。

暑かった。喉がからからに渴いた。汗は消えた。頭の芯が痛かった。

彼女は突然吐き気を覚え、走るのを止めた。木陰を見付けて休みたかった。それにしても病院が見つからなかった。かなり歩いたのでそろそろ病院の大きな建物が見えるところかと思うものの、まるで見付からないのだ。彼女はやはり道に迷ったのかと思った。

道を探ねたくとも、近くに人影はなかった。店も開いていなかった。彼

女は周りに目を配りながら、ふたたび、小走りに道を急いだ。

背後から射す太陽が光を増し、道路に彼女の長い黒い影を落としていた。彼女はひたすら自分の影を踏みつけるように長く伸びている影を目がけて足を出し、住宅街のなかを横切る東から西に通じる一直線の道を進んだ。

影は踏まれる瞬間、身を翻して前へ逃れる。彼女は機械的に何度も同じことを繰り返した。なんとなく怠く、次第に身体全体から力が抜けていく。足がふらつく。

突然目の前が真っ暗になった。意識が薄れていく。彼女は自分が黒い影の中に入ってしまったような気がした。

## 第四章

25

この数日間、九鬼は日に何回となく胸騒ぎを覚えた。

彼は予定より三日遅れて東海岸のウッズホールから戻ると、ACARでワークショップが待っていた。だが彼はそれをキャンセルして、アンダーソンと簡単な打合せを済ませると、翌日の早朝、デンバー国際空港に向かった。

彼のメールに対して亜耶子からは必ず返事があったが、いつも決まって、順調に過しているという短い文面だけだった。臨月を迎えて彼女もなにかと気忙しいのかとも思ってたが、胸騒ぎが消えることはなかった。

彼は予約の便を早めて、一日も早く日本に帰りたいと思った。だが調査船の帰港が遅れて思うようにいかなかった。それだけ焦りが募った。焦りが空回りし、かえって時間をロスすることもあったものの、どうにかサンフランシスコから予約していた便に間に合うようにデンバーを発つことができた。

サンフランシスコ空港に着くと、九鬼は東京行きに乗り継ぐために国際線の出発ロビーへの長い廊下を急いだ。

アジア方面の国際線ゲートで手荷物の検査を受けて、免税店の前を通り抜け、ロビーに入る。広いロビーにはアームのついたベンチが並んでいた。壁際に搭乗口とカウンターが十数メートルほどの距離を置いて等間隔に設置しており、同時に複数の便の搭乗客をさばける構造になっている。

出発時間が迫っているのに、成田便のカウンター付近にはまだ搭乗客で

溢れている。九鬼は間に合ったと思い、歩調を緩めた。

「アテンション・プリーズ……」

成田国際空港が閉鎖されているため、東京行きの便の出発を見合わせているという。

アナウンスを聞いて、彼はカウンターの係員に理由を尋ねた。そのとき、彼ははじめて日本の首都圏や関西圏において大停電が発生していることを知った。

混雑しているところから離れて、彼はビニール張りのゆったりしたベンチに腰を下ろした。搭乗アナウンスをいまかいまかと待ちながら一時間を過ぎた。

彼は停電によって空港が閉鎖されるとは思ってもみなかった。一刻も早く帰って亜耶子の元気な顔を見たいと思い、もう一眠りしたいところを無理に起きてきたのだ。それなのに、自分と関係ない出来事で出発が遅れ、延々と待たせられてしまい、忌々しかった。

空港の閉鎖といい、サンフランシスコで出発を見合わせるほどの停電規模とは一体どんなものか。暖水塊の仕業だったのだろうか。大停電に襲われ、亜耶子は果たして大丈夫だろうか。熱波が襲い、熱風が吹き荒ぶ真夏の午後ともなれば、クーラーが切れた室内はまさに灼熱の地獄ではないか。

彼は立ち上がって、電話ブースを探した。

いくら待っても受話器の奥からなんの音も漏れてこなかった。佐々木研究室も研究所も同じだった。

彼は待つほかなかった。

四時間後、搭乗アナウンスがあった。機上でさらに一時間ほど待たされ、ようやく地上から舞い上がったのは出発時間を五時間ほど遅れた午後三時

四十五分だった。

空港を離れて安定飛行に移ると、すぐ食事がでた。彼は早々に遅い昼食を済ませると、耳栓とアイマスクを取りだし、眠りの態勢に入った。

まずアイマスクで目を覆い、つぎに鼻で出来たドクターセリエの耳栓を手で温め、柔らかくなつたところで耳に押し込む。彼は耳のなかの空気を抜きながら、機中の話声や食器を片づける音は消えるまで耳栓を強く押し込んだ。微かにジェットエンジンの音が残る。それから静かに毛布を広げ、胸まで引き上げた。

早朝からの疲れにワインを酔いも手伝つて、ジェットエンジンの低く唸る音のなかで、彼はすぐ眠りにおちていった。

彼は夢を見た。

若い女が道路をあえぎながら歩いている。亜耶子だ。彼は後から追う。彼女は彼に気付いて立ち止まり、振り返つてしばらく彼が近づいてくるのを待っていた。彼は急いでそばに行こうとするが、なにかが邪魔してどうしても近づくことができない。彼女はやがてひとりで歩き出す。彼はその後を追う。だがどうしても追いつけない。

突然、黄金の光り輝く花園に出る。彼女はいつものまにか赤ちゃんを胸に抱いて橋が架かっている川のほとりの立っていた。彼は急いでそばに近づくようにするが、彼女は悲しそうな顔をして、掌を立て、近づく彼を押し止める。彼は彼女の制止を無視して、前へ進むともがく。だがどうしても近づくことができない。やがて彼女は川の辺に赤ちゃんを寝かせ、橋を渡り出す。彼は引き返すように言い、何度も名を呼ぶ。彼女は悲しそうな顔をして何度も振り返るが、歩みを止めることはなく、川の向こうでキラキラと黄金の光を発散させている花園へと入っていく。

大声で妻の名を呼ぶ自分の声に驚いて、彼は目を覚ました。体が汗でぐっしり濡れていた。アイマスクをはずして辺りを窺った。機内の照明は落ちて、前方のスクリーンに映画が上映されていた。

彼はふたたびアイマスクを被った。夢の続きを見ようと目を閉じる。脳裏に黄金に輝く花園が鮮明に蘇ってきた。

彼はさつき見た夢をもう一度ゆつくり思い返した。

26

成田国際空港には光りが溢れていた。だが陽一郎の脳裏には夢で見た悲しそうな亜耶子の顔が焼き付いたまま、消えることはなかった。

彼は入国管理でパスポートチェックを済ませ、税関の検査を通り抜けると、タクシー乗り場に急いだ。一刻も早く亜耶子の無事な顔を見たかった。いくら急いだところで、五時間の遅れを取り戻すことはできない。だが、不吉な思いが彼を駆り立てていた。

九時を過ぎていのに、タクシー乗り場には乗客の長い行列があった。彼は電車にしようかと一瞬迷った。だがつきからつきと続いてくる空車のタクシーを見て、彼は行列の最後尾に並んだ。

「お客さんはどちらからですか、飛行機は遅れなかったですか」

タクシーが動き出すと、中年の丸顔の運転手は愛想良く声を掛けてくる。

「サンフランシスコからだけど、大分遅れた……。ところで、大停電だった？」

「昨夜からずーとこの辺の電気が全部消えてしまつてね。信号が消えるし、



全くどうしようもなかったよ。無事家に帰ったものの、暑くて眠れないし、冷蔵庫はぐしょぐしょで、ビールも温くなってまずいし、生ものは全部ダメになって食うものもないし……」

中年の運転手がぼやき続ける。彼は上の空で聞きながら、臨月の亜耶子が熱い停電の夜をどんなふうに通したのか気になった。時差ボケか、それとも日本に帰ってきて緊張感が途切れたのか、彼はそれ以上考えることができず、ただぼんやりと車窓から暗い闇を彩るネオンの輝きや街灯の光を眺めていた。

「お客さん、この辺ですか」

九鬼はいつのまにか微睡んでいたらしい。車窓の外には全然見たこともない闇の世界が広がっていた。

「どこですか、ここは……」

「南が丘の三丁目ですよ……」

「じゃ、その先を左に曲がって真つすぐ行って下さい」

暗いとはいえ、亜耶子となんども散歩した道に気付かなかったとは一体どうしたのか。彼はアメリカにいつているうちにすっかり惚けてしまったのかと思った。

一戸建てが並んでいる住宅街に似付かわしくないひとときわ図体の大きい黒い影が遠くに浮いて見える。

「あのアパートの前で」

九鬼は黒い影を指さす。

「海洋研住宅の前ですね」

黒い影が次第に大きく迫ってくる。彼は胸がときめくのを覚えた。近づくと、十時を過ぎているのに、一階のわが家の部屋という部屋から煌々を

灯が漏れている。急に胸騒ぎを覚えた。一体、なにがあったのだろうか。車の音を聞きつけたのか、ドアが開いて、人影が近づいてくる。街灯の淡い光に白い顔が浮かぶ。

「あ、先生……」

佐々木教授だった。佐々木は走り寄って車から降りてきた彼の両手を取ると、無言でじつと顔を見て動こうとしない。佐々木の両目が濡れて光っている。

運転者はしばらく二人の様子を窺っていたが、トランクからスーツケースと手提げ鞆を取りだして歩道に置くと、タクシーは赤いテールランプの尾を引いて遠ざかって行った。

「亜耶子は……」

と言いかけて、彼は声を呑んだ。怖かった。

佐々木は口を動かしただけで、言葉にならなかった。黙って陽一郎を抱えるようにして、開いたままのドアへ向かった。

冷房の効いた奥の和室に生花で飾られた祭壇があった。そのまえに白い布で顔を覆われた白装束の遺体が薄い布団の上に横たわっている。

佐々木は「きみをずーと待っていたんだが……」と言って、敷居に呆然として立ちすくむ陽一郎の背をそつと押した。

「亜耶子……、一体、どうしたんだ……」

嗚咽が洩れた。陽一郎の背が激しく揺れ、長い嗚咽が続く。時折、思いつくように回りだすクーラーの無機質の微かな唸り音が混じる。

昨夜、佐々木は大学の研究室で停電に見舞われた。

突然、暗闇が襲った。そのとき、彼はノート型パソコンで論文を纏めて

いた。

照明が消えた研究室のなかで、液晶のディスプレイだけが青白く光っている。電源が自動的に内蔵電池に変換したのでデータが消えることがなかったが、彼はとりあえず新しいデータを保存しておこうと、急いでポインターを移動し、クイックした。

データが保存されたことを確かめると、彼はほっと胸をなで下ろして一端電源を切った。液晶画面のバックライトが消えると、研究室を暗闇が支配した。

窓から月光が差し込んでいた。幸いデータの喪失を免れたものの、危ういところだった。もし電池が内蔵されていないパソコンを使っていたらと思うと冷や汗がでた。

月明かりを頼りに、彼は食べかけのおにぎりの残りを頬張りながら、暗い研究室のなかで照明の回復を待った。おにぎりは近くのコンビニから買ってきたものだった。

しばらくして、灯が戻った。仕事を続けようとパソコンの電源に手を伸ばしたとき、チャイムがなって、アナウンスが響いた。

「緊急連絡、緊急連絡……。只今、大学キャンパスを含む広域にわたり停電が発生しました。当大学では非常用電源に切り替えましたが、停電が長引く場合に備えて不要不急の電力使用はご遠慮願います。用務員がこれからパトロール致します。ご協力ください」

彼はどうしようか迷った。このまま誰もいないマンションに帰える気もしなかった。かといって、用務員と顔を合わせるのも嫌だった。

一体、停電はいつまで続くのか。彼は受話器を取った。そのときふと、妹のことが思い浮かんだ。プッシュボタンを押したが、呼びだし音がなかつ

た。彼は所在なく、そのまま受話器を耳に付けていた。

足音が近づいてきた。顔見知りの老けた顔付きの用務員がドアの隙間から顔をのぞかせる。

「先生、お仕事でしたか」

「いつ回復するかね」

「さあ、いつになりますか。時間がかかりそうですよ。東京のほかに、千葉、埼玉、神奈川にわたって停電が広がっているそうですから。ラジオでは首都圏の半分以上がやられてしまっているといっていましたけど……。どうしたんですかね」

額の汗を手の甲で拭きながら「ではごゆっくり」とでも言うように、用務員は目を上げたまま軽く頭を下げた。

冷房が切れたらしく、空気が淀み出した。窓を開けた。風はなかった。開けた窓からじつとりとした暑い空気がじわつと入ってきた。急いで窓を閉めた。

広域にわたって停電しているなら、電車も動いていないだろう。復旧するまで待つほかなかった。彼は室内の照明を消すと、椅子にもたれて目を閉じた。

いつしか、彼は眠りに落ちていった。突然、自分の名を呼ばれたように思っ、彼は目を覚ました。体中にぐっしょりと汗をかいていた。

手探りで机のスタンドのスイッチを探し、何度も押した。非常用電源も途絶えたのか、乾いた音が返ってくるだけだった。暗闇のなかで、彼はあたりを窺い、名を呼んだものを探した。

ふと、妹の声だったような気がした。自分の名を呼んで助けを求めているのではないかと思うと、彼は気が気でなかった。

病院の保育器のなかにいる亜耶子の赤ちゃんは大丈夫だろうか。停電で冷房が切れた室内に置かれた保育器はどうなるのか。保育器の電源も消えているはずだが、一定の温度を保つことができるのか。酸素の補給はどうか……。

外に出ると、街灯は消え、空気は淀んでいた。闇の中で街は死んだようだった。

彼には東の空が幾分白みはじめているように見えた。通りに出て、タクシーを探した。だが車が通る気配はなかった。徐々に白みはじめた通りを彼はゆっくりとした歩調で地下鉄の駅に向かって歩き出す。

ふとエンジンの音に気付いて振り向くと、回送の表示を出したタクシーが近づいてくる。彼は夢中手を振った。

タクシーは彼の前を通り過ぎていった。彼は夢中で走って追いかけた。タクシーは減速して、止まった。窓から運転手が顔を出した。

「お客さん、悪いけど家に帰るところなんだけど……」

「じゃ、途中まででも乗せてくれませんか、電車も走っていないようですので、お願いします。病院にいる赤ん坊が無事かどうか見届けたいのです。全然連絡がつかず、保育器に入れられているので、心配なのです」

運転手は白みがかった闇を通して、彼の顔をしばらく透かすようにじつと見た。

「どちらですか、その病院は……」

彼はうろ覚えの病院名を言った。

「A市にあるんですが……」

「あの病院かね」

運転手は帽子を取って坊主頭の汗を拭いた。よく見ると、白髪が多く、

かなり年をとっているらしい。

「途中、渋滞に巻き込まれるかもしれないが、それでよければ……、近くで降りてもらおうよ」

と言つて、運転手はドアを開けた。

「助かりました。妹の子ですが、連れの留守中に予定より早く産まれてしまつて……」

「心配ないですよ、母親がついていれば……」

「それが身体の具合があまりよくないのですよ。なにしろ、流産しかけて帝王切開で産んだばかりですから。この暑さですし……」

運転手は黙つて車を発進させた。道路には方々に事故車が放置されたままになっている。運転手は地理に詳しく、タクシーはくるくる回つて小さな路地を通り抜け、渋滞している交差点を避けて進む。

空が白み出した。闇が急速に消えていく。激しい胸騒ぎを覚えた。車窓から白んだ空を見上げ、彼はひたすら無事を祈った。

隅田川、荒川、江戸川の橋では車の行列が待つていた。橋を渡る度に激しい渋滞が繰り返えされた。彼を乗せたタクシーがようやく目的地に近づいたときには、太陽がすっかり上りきり、ぎらぎらした真夏の陽光に変わっていた。

「ここで降りて下さい。あそこが病院ですよ。あそこまでいくと、またタクシーを待つているお客さんがいるかもしれませんから。もうくたくたで、早く家に帰って休みたいのですよ」

運転手はしょぼついた目をして振り向き、ドアを開けた。

彼は礼を言つて降り、タクシーが去つていくのを見送つてから、おもむろに振り返つて病院に目を向けた。そのとき、一台の救急車が反対の方向

から病院に近づいてきた。

「亜耶子が意識を失って病院に担ぎ込まれてきたのは今朝の一〇時過ぎだったろうか。わたしが病院についたときに亜耶子が運ばれてきたのです。意識を失って道路に倒れていたそうです」

「でも、なぜ……、いつも順調だといってきたのに……」

佐々木は一部始終を話した。陽一郎は虚ろな目をして嗚咽を必死に耐えていた。

「それで赤ちゃんは……」

「無事だよ。亜耶子もそのことが気掛りだったでしょう。一時、意識が戻ったとき、そのことを知らせたら、涙を流して喜んだ。それを聞いて緊張が解けたのか、急に深い眠りに入っていく、それきり意識を回復することとはなかった……」

27

停電の夜、病院に入院していた患者に犠牲者がでた。集中治療中の重症患者のほかに、体力のない老人や乳幼児のなかにも熱中症に罹った者が多かった。これによって生命を失った者もかなりいた。だが多くの死亡者については死因が突然の停電によるものか、それともたまたまその日の酷暑と重なっただけなのか判然としないまま見過ごされた。

亜耶子のケースもうやむやになった。

それよりも大きな問題が発生していた。停電が復旧しても、その後遺症

が大都市を長い間半身不随の状態にしたのだ。

真夏の一〇数時間におよぶ大都市の停電事故は、都市の衛生環境を著しく損ねた。

浄水場に非常用の自家発電設備がなかったところがあった。またポンプ動力を用いるビルや団地でも早い段階で水道の給水が途絶え、水洗トイレの使用に支障がきたした。排泄された汚物は流されることなく便器に溜まり、悪臭に蠅が群がった。運良く風呂の残り水や汲み置きの水があれば、使用後に汚物は流されたが、次第に一回の水量が少なくなっていくと、汚物が滞り、排水管を詰まらせた。逆流し溢れ出すところもあった。

熱帯夜のもので、停電が一時間も続くと、冷房の切れた室内に放置された冷蔵庫や冷凍庫は温まり、庫内温度が上昇し始める。バクテリアの活動適温に達して、貯蔵されていた肉や魚類などの生ものは急速に腐敗し出された。

開閉の多い一般家庭の冷蔵庫のなかの食べ物、まず、悪くなった。コンビニやスーパーなどの食品売り場の冷蔵庫や冷凍庫に保管されている生鮮食品や生ものが傷みだした。アイスクリームなどの氷菓やケーキ類もダメになった。ファーストフード、レストラン、ホテルなどの冷蔵庫や冷凍庫のなかに貯蔵された大量の生肉や加工冷凍食品など各種の食材も同様だった。

突然襲った停電は乳製品やパン・菓子などを生産する、各種の食品製造工場の生産ラインを停止させた。一〇数時間続いた停電は生産工程の至る所でバクテリアを増殖させて汚染し、洗浄が済むまで当分使用不能といった重大な後遺症を残した。

さらにこれらによって生じた大量の腐敗した生ゴミの処理が問題だった。

家庭から一度に出された大量の生ゴミは収集が追いつかないままさらに放置され、強烈な太陽光線のもとで異臭を放った。山積みされた生ゴミの山に鳥や猫が群がり、食い散らかされた。鳥や猫ばかりでなかった。鳥が去ったあと鳩や雀などさまざまな鳥が飛来し、おこぼれに与った。野犬やネズミが残り物を漁った。

レストラン、ホテルなどでも自前の処理能力を超える生ゴミの予想外の大量発生に悩まされた。コンビニやスーパーなども同様だった。

伝染病など感染症の発生を恐れた行政当局は散水車まで動員して路上に放置され散乱している生ゴミや下水に大量の消毒薬を散布した。消毒の徹底とともに、コンビニやスーパー、レストラン、ホテルなどにも保健所の係官が立ち入り、直接食品を取り扱う部署や担当者に対し再開の指導に当たった。

学校給食はなかなか再開されなかった。

それでも食中毒や〇一五七などの感染症の発生を抑えることができなかった。古い団地で水道水を飲んだ人々の間に原因不明の下痢が集団発生した。屋上の水槽を点検したところ、ネズミのほか、無数の昆虫の死骸らしいものや微生物が見つかった。これに似たような原因不明の下痢患者がほうぼうで見つかった。抵抗力のない老人や乳幼児、それに病人はまず下痢による脱水症状を呈し、急速に血圧を低下させて意識を失った。早期に適切な手当てを受けることのできたものだけが命を取り止めた。

停電後においても、似たような症状による死亡者が続出した。これらがすべて停電事故の後遺症とはいえない。あの日以降も四〇度を超す酷暑の日が続いていたからである。それでも人々の多くはこれらのすべてが大停電の後遺症だと信じて疑わなかった。

大都市における広域停電の影響はいろいろな形でまだまだ続いた。

停電による食品製造工場の生産中止は広い範囲に影響がおよび、多くの原料生産者や納入業者を巻き込んだ。これとともにスーパーやデパート食品売り場への各種の加工食品の供給が滞り、品不足を呈した。これらは生産の再開とともに、次第にもとに戻っていったが、経済的損失はかなりの額に上った。

またその夜の交通事故数は当該地域の一年間の発生件数を超えた。これに加え、ロウソク火が原因の火災も数多く発生していた。これらに伴う保険金の支払い額は一五〇〇億円に達した。

政府が必死に隠していたため、一般に知られることはなかったが、際どい防衛上の問題もあった。不意の攻撃に備え、訓練を装い、海上には自衛艦が配備され、沿岸では自衛隊が臨戦態勢で監視活動に当たった。

28

「停電事故の原因を早急に解明し、将来、二度と発生しないように徹底した対策を講じること」

電力行政を所管する監督官庁の担当課長は今回の停電事故を起した電力会社の社長を呼び出し、こう厳命した。キャリアの若い課長は停電が広域にわたったことと、一〇数時間も長時間にわたって大停電が継続し、復旧が遅れたことを問題にした。

事故当事会社のみならず、電力サイド全体で今回の事故の原因究明に当たることになった。海洋科学研究所にも協力が求められた。

研究担当の村井常務は今回の広域停電事故に対して機敏に反応した。彼は電力の要請を事前に予想して、密かに今回の停電を招いた原因の究明を命じていた。

彼は暖水塊研究に関する東野所長の新提案を拒否し、葬り去ったことをどう繕うか思い悩んだ。暖水塊についての研究開始を妨げたことが電力に知れると、今回の停電規模が大きかっただけに、彼に対する電力サイドのサポートが一挙に崩れかねない。そのことをなによりも恐れる彼は早急に妥当な対応策を用意する必要がある。研究所内のライバルを蹴落とし、さらに上の地位を確保するためには、どうしてもスポンサーサイドのサポートが欠かせないからだ。

彼は研究所所長の東野を排除する戦略に出た。彼は内緒で桜木部長と中西を本部に呼びだした。

「中西くん、きみは暖水塊についての研究が時期尚早と言っていたそうだが、いまもそう思っているかね……」

村井はじつと中西を見た。釈明を求める語調は詰問調だった。桜木部長が隣で不安そうな面持ちでちらりと中西に視線を走らせる。

「暖水塊のことではなく、ノンリニアタイプの気候変動モデルの開発研究はまだ時期尚早だと言ったのです」

中西は同意を求めるように部長に目を向けた。小心者の桜木は目をそらし、中西と目を合わせることを避けた。

「暖水塊の調査はその一環として行なうものではなかったのか。調査そのものまで、きみは実施する必要がないと言っていたそうだが……」

「……………」

「なぜだね」

「あの……、ノンリニアタイプの気候変動モデルの開発研究が時期尚早だと思っただけです」

中西はしどろもどろになつて、同じことを繰り返す。

「電力の話によると、暖水塊が迫り来ることが事前に分かっていたら、なんとか手を打つことかできたが、暖水塊が来襲するとは予想もしていなかったと言っている。たとえあの調査を実施していたとしても、W湾など発電所集中立地地点の海域を暖水塊が襲うとは予測できなかったとは思わなかね」

「はあ……」

中西は要領をえない表情をしてしばらく村井の顔を見ていたが、ようやくその意図に気付いたらしく「……そうです。その通りです」と急いで付け加えた。

「桜木くん、いいね、暖水塊来襲の件はこの線で行くことにしよう。よく打ち合わせておいてくれ、頼んだよ」

村井はふたりが室を出ていくのを見届けると、壁際の執務机に移った。革張りの椅子の腰を下ろしたとき、彼の脳裏に一瞬、東野所長の整った顔が浮かんだ。新たな不安が彼を襲った。「なんとか圧力をかけて、あの奴の口を封じなければ」と口の中で呟く。

所長に頭を下げるのもシヤクだった。ふとひとつのアイデアが浮かんだ。

たとえ暖水塊が今回の大停電発生をきっかけであつたとしても、追及すべきは停電がなぜあのように大規模化したのかではないのか。停電の大規模化を防止する安全装置のリレーが十分機能していれば停電の大規模化を防ぐことができたはずだ。それができなかったのはなぜか。むしろ問題は電力送電システムにあるのではないか。

「部長、九鬼が帰っているそうですよ」

中西は桜木の後を追って部長室に入り込むと、ソファに腰を浅く掛け、桜木のほうに顔を突き出すようにして、低い声で囁くように言う。

「え？ いつだ」

「さあ、同じ職員住宅にいる男から聞いたんですが、なんでも奥さんが突然亡くなったとか……」

「なんだって、本当か。それで葬式は？」

「とりあえず、密葬を済ませたらしいですが……」

「なぜ、研究所に知らせないんだ」

「休職中ということで遠慮したんじゃないんですか」

「彼が余計なことを喋ることはないだろうな。よく言っておけよ」

中西は桜木の不安そうな目を見て、ふと額の禿げ上がった柏田の大きな顔を思い浮かべた。

「もつと手強い奴がいますよ。一筋縄にいかない男が……」

「誰のことだ」

「柏田ですよ、水理の……」

中西は思いだすような目をして遠くを見た。

「どうして彼が出てくるのだ」

中西は「柏田が停電事故の直前に暖水塊が来襲するかもしれないと指摘していた」と言おうとしたが、桜木の困り切った顔を見て言いそびれてしまふ。

あのととき、柏田がすぐ電力に連絡したほうがいいと強く言い張っていた口調が蘇ってきた。一瞬、もしかしたら柏田が電力会社に事前に知らせて

いるかもしれないと思ったが、彼は返事の代わりに、なに食わぬ顔で薄笑いを浮かべ、桜木の目を見る。

「とにかく、暖水塊の来襲は予測できなかったということだ」

「そうじゃないでしょう。暖水塊が原子力発電所集中立地地点を襲うことを予測することができなかったということでしょう」

「暖水塊の来襲は予測できていたが、これが原子力発電所集中立地地点を襲うことは予測できなかったと言いたいのか」

「そうですよ、常務もそう言っておられたではありませんか」

「だが、それでは暖水塊の来襲を知っていながら、なぜ事前に連絡しなかったのかと突っ込まれたときにどう言い逃れるつもりか。九鬼がどんなことを言いだすか分からないし、経営推進会議での新提案もあったことだ。これらは当然電力に筒抜けになっていると思っただろうがいい」

「……………」

「だから、第一段階では一応、暖水塊の来襲を予測できなかったと言っておくほうがベターだ。これに対して、反論されたときに、第二段階として、暖水塊が原子力発電所集中立地地点を襲うなんて到底予想できなかったと言えばいいのだよ」

中西は小刻みに頷き、この種の用意周到さがこれといった業績のない桜木を部長まで昇進させたのかと思った。

桜木は機会あるごとに中西を呼んで、電力会社対応について何度も打合せた。そのたびに、桜木は九鬼の様子を聞いた。中西はすっかり嫌気がさし、いい加減に応えた。

「九鬼はまだACCARに戻らないのか」

中西は桜木が九鬼を早くアメリカに追いやってしまいたいと考えている

のだなと感じたが、彼は素知らぬ振りをしていた。

「電力からなにか言ってきているのですか」

「食品メーカーや販売業者、流通業者が損害賠償を求める動きがあるそう  
だ。もつとも損保の対応いかんにもよるだろうが……。まあ、これらの動  
きを見て、電力は国と相談して原因解明の落とし所を決めることになるだ  
ろう。だからそれまではわれわれの出番はないな」

「そんなもんですか」

中西には分からないことだった。

「ヘタをすると、監督官庁の責任問題に発展しないともかぎらないからな、  
彼らはいつも保身と自分の将来のことしか考えていないんだ」

中西には桜木がまるで自分のことを言っているように思えた。

「ところで所長に相談しなくてもいいのですか」

「所長？　なんでだ。経営推進会議での新提案のことはわれわれと一切関  
係がないんだ。事前に一言も相談を受けていない。あれは所長の独断だっ  
たのだ。あのことに關してはわれわれはいまもツンボ棧敷に置かれたまま  
だ」

「だから、なにも知らなかったと言いつ張るわけですか」

「そうだ。そのほうが所長のためにもなる」

中西には桜木の考えていることが分からなかった。

29

九鬼は廊下からガラス窓越しに透明プラスチックのフードを被っている

保育器のなかを覗く。ガーゼのマスクをした肉づきのいい中年の看護婦が  
フードを開き保育器のなかから赤ちゃんを抱え上げ、開いた右の掌に小さ  
な頭を載せて左手で身体を抱きかかえると、彼の目の前に連れてきた。眠  
りを妨げられたのを怒っているのか、赤子は目を閉じたまま、顔を真っ赤  
にして固く握りしめた小さな拳を突き出し、大きく伸びをした。

彼は窓ガラスに額を付けて、わが子をじつと見た。ふと赤子が亜耶子に  
抱かれているような錯覚を覚えた。そのとき赤子は目を開け、辺りを見回  
すように目を動かしてから彼を見た。しばらく彼のほうに目を向けていた  
が、ふたたび目を閉じた。腕の中で眠りに落ちたらしく、看護婦は彼に微  
かに会釈すると、窓から離れて赤ちゃんを保育器に戻した。

看護婦が彼が立っている窓ガラスの近くに保育器を寄せた。

彼はしばらく廊下に立ったまま、保育器のなかを覗く。赤子はプラスチッ  
クの箱のなかで何事もなかったように眠っている。

目を開いたとき、わが子は自分を父親だと気付いただろうか。看護婦に  
抱かれているのに、母親の胸に抱かれていると思っていたのではないだろ  
うか。

「もうしばらく保育器が必要ですが、カンガルーケアもやってみましょう  
かとお話していたのですが……」

担当の女医が遠慮がちに言う。

彼はプラスチック箱の孤絶した世界に閉ざされ、一度も母の胸に抱かれ  
たことのないわが子に、亜耶子の死をどう告げるべきか、思いあぐねてい  
た。彼女をひとり残してアメリカに出掛けなければ、彼女を死なすことは  
なかったし、わが子に母親の死をどう告げるか悩むこともなかったと思え  
て仕方がなかった。彼は後悔した。身重の妻をひとり置いてきぼりにして



ACARに行つた自分が許せなかつた。

彼は妻の死を知つたとき、背に重い重しがのしかつたように感じた。亜耶子が背にのつているのだと思い、重しに耐えた。背の重しに耐えながら、彼は亜耶子を探し求めた。もし亜耶子が手を伸ばして彼の手を取り手元に引いてくれるなら、彼は引きずられるまま彼女のもとにいったことだろう。

亜耶子が停電事故のまえにすでにわが子を出産していたことを知らされたとき、彼は不思議な思いに駆られた。もし停電事故中に出産を迎えていたらどうだつたらうか。もし手術を要する難産だつたらどうなつたらうか。真つ暗な闇の中で、陣痛に耐えなければならなかつたら、彼女はどんなに不安に駆られ、怖い思いをしたことだろう。

停電の暗闇のなかで、保育器のなかの小さな命は生命を取り止め、小さな生命を産んだ母親はわが子を案じて彷徨い、自らの生命を失つた。保育器のなかの小さな孤絶の世界で母親が死んだことも知らずに小さな生命は生き続けている。

「おれは新しい生命が誕生したことも、妻が生命を賭けてわが子を案じて彷徨つていることも知らずにいたのだ……」

それにしても、なぜ、あのときすぐ暖水塊来襲の危険を社会に対して警告しようとしなかつたのか。事前に警告を発しておれば、電力会社は対策を講じて大停電を避けることができたかもしれない。いやきつとできたはずだ。大停電さえなければ、亜耶子が生命を落とすことはなかつたのだ。

たとえ、海洋科学研究所をクビになつても、あのとき裏付けのデータがなくとも論文を公表しておけば、大停電を食い止めることができたのだ。いや、たとえ停電になつたとしても、論文の発表によつてACARに行く

機会を失つていただろうから亜耶子のそばにおれたはずではないか。

彼は自分を責め続けた。自分を許すことができなかった。彼にはデータが不十分なまま、暖水塊の危険を警告することは預言者ならいざ知らず、科学者としてはやるべきことではないという思いが強かつた。だからデータを十分整え、一日も早く社会に警告を発するため、ACARへ行くことにしたのだつた。

彼はこう考えて自分を納得させ、身重の亜耶子を一人置いてACARへ行く後ろめたさをかなぐり捨てようとしたのだ。だがそれは自分に都合のよい言訳に過ぎなかつた。

彼はノンリニアタイプの気候変動モデルを構築することが人類のためになるのだと思ひ上がつていた。暖水塊が大停電を引き起すかもしれないこと知りながら、そのことを放置したまま、ACARでの研究を選んでしまつた。自分のアイデアを育て、業績を上げ、研究者として認めてもらいたいという気持ちが自分をこのような行動に走らせてしまつたのだ。その代償として、亜耶子を失つたことになつたのだつた。

彼は重しを背負い、孤絶した世界のわが子を見つめながら、研究者としての自己満足に打ち克つことができなかつた自分を羞じた。

30

「理事長、わたしが参ります。暖水塊来襲の予測が不可能であつたことをよく説明して理解してもらいますから、なんら心配はいりません」

村井は自信あり気に言う。

田中理事長はアームチェアに背をもたげたまま、しばらく村井をしげしげと見ていた。

「社長会だよ。きみじゃまずい」

「それじゃ、わたしが理事長について参ります」

電力会社の集まりである業界団体の事務局が海洋科学研究所に対して、突然、社長会で暖水塊についての説明を求めてきたのだ。暖水塊といった技術的な問題について、電力トップの集まりである社長会が直に海洋科学研究所に対して説明を求めることは異例なことであった。

「きみは暖水塊の研究に反対して、東野くんの新提案を葬り去ったんじゃないか。きみは暖水塊の研究に反対して、東野くんの新提案を葬り去ったんじゃないか。その張本人が暖水塊についてどう説明するつもりかね」

田中は皮肉な眼差しをして、村井をじろりと見た。

「いや、それは……」

「きみは社長会でどんな展開になると予想しているの」

社長会の議題は電力会社全体に関わる経営課題や高度な政治的判断が必要なものに限られる。それゆえ海洋科学研究所に期待しているのは単なる技術的解答ではあるまい。だがなにを求めているのか、田中は社長会の意図を読めずにいた。

ドアのノックに続いて、流行の楕円形の小さなメガネをかけた痩身の秘書課長が入ってきて、理事長にメモを渡す。

「ここに通してください」

一瞬、秘書課長は「いいんですか」といった表情をした。

「東野くんに来てもらった」

田中はことさら無表情で村井に向かって言った。村井は怪訝な表情を浮かべたが、田中は秘書課長と入れ替えにドアを開けた東野をソファに招く。

東野は村井と目を合わせ、一瞬躊躇したが、軽く会釈して村井がいるソファの反対の端に腰を下ろすと、田中に目を向ける。

「東野くん、実は暖水塊について説明を求められたので、一緒に社長会に出てもらおうかと思っているんだが……」

「はあ」

村井が目を見つめた。東野は村井の怒った顔に気付いて、曖昧に返事した。

「どうかね」

田中は村井を無視して、ふたたび促す。

「お役に立つかどうか自信がありませんが、それでもよろしければお供させていただけますが……、でも、わたしよりも適任者がほかにいますか……」

「誰かね。その適任者というのは……」

「それは……、九鬼陽一郎研究員です」

東野は一瞬言い淀んだが、村井の顔を見ずに続けた。

「九鬼はダメだ、あの男はいま休職中じゃないのか」

村井が口を挟む。

「彼のほかに適任者いません、この問題には」

「きみがそう言うのなら、きみの補助者としてきみが連れてきたまえ」

「ダメです、彼を出せません」

「村井くん、どういうことかね」

「研究担当理事として責任が取れません。休職中の彼を出すことはできません。お断りします」

「なぜだね、休職中なら、海洋科学研究所としては休職中の行為まで責任

を取る必要はないんだよ、きみ」

「……………」

「東野くん、すぐ連絡は取れるかね」

「はい」

「あの男は日本にいない」

「アメリカの研究機関で研究しているところですが、いま日本に帰っていません」

村井は口を歪め、忌忌しげに東野を見た。

「村井くん、あのとき、東野くんの新提案を取り上げ、電力側に注意を喚起しておれば、あの大停電事故の発生を未然に食い止めることができたとは思わんのかね」

田中はじつと村井を見た。額から汗が噴き出している。

「とにかく、社長会では小細工がきかないんだ」

田中は村井に引導を渡すように言う。

31

「理事長、お願いします」

ダークの背広を着た事務局の若い男が大会議室隣の控室のドアのところまで軽く会釈した。室内の中央に置いてある応接セットのソファから田中は腰を上げた。

事務局には女子職員を除いてプロパーの職員はいない。すべてが各電力会社からの出向者だった。この若い男もどこかの電力会社からの出向だろ

う。東野も理事長に続いて腰を浮かしかけたが、若い男が手で制し、田中だけを大会議室へと案内した。

大会議室の扉が開かれ、田中は中へ入っていく。中央に置かれた大きな楕円形のテーブルの壁側の席に会議のメンバーである電力会社の社長たちが居並び、それに対する向かい側の中央から入口の扉に近い席を事務局側が占める。そこには進行係を務める事務局の企画部長や陪席の関係部長らが神妙な面持ちで席についていた。

田中のために用意された席は議長の真向かいの事務局サイドの中央にあつた。

休憩時間なのか、田中が席に近づいていってもメンバーたちはお喋りを止めようとしなかった。議長役の会長は田中が席に着いたのを見ても素知らぬ顔で隣の社長と話を続けている。

業界団体の会長は電力会社の大手である中央の三社が代わり番に引き受ける。現在の会長が経営している電力会社は幸い停電事故を免れたが、他の二社は自社電力供給区域において今回大停電を引き起こしていた。

田中は事務方や目を合わせたメンバーの社長たちに愛想笑いを浮かべて会釈した。

「それでは海洋科学研究所の田中理事長にお出でいただきましたので、つぎの議題に入らせていただきます。今回の停電を引き起こした暖水塊についてですが……、いかがいたしましたでしょうか」

進行役の企画部長が議長役の会長に伺いを立てた。

若いころ剃刀と渾名されたT電力の社長が議長の隣の席で大きな目をぎょろりと光らせた。一瞬、会議室に緊張が走る。

「海洋科学研究所は今回の暖水塊来襲を予想していたようですね」

「はあ？」

田中は意表を突かれた。頭の中が一瞬真っ白になった。とにかく冷静を装わなければならない。ここでどう振る舞うのが一番良いのか、つぎの瞬間、彼は頭をフル回転させていた。

「各社の給電所に暖水塊来襲予告のメールが送られてきたというが……」

「何時のことですか」

田中はこんな情報があつたとは全然聞いていなかった。

「一週間程前のことらしい」

田中は発言者を見つと見た。なんとなくはつきりしない言い方が気になった。かといってそれを糺す余裕はなかった。自分の知らないところで、海洋科学研究所から電力側へ重大な情報が流れているとは、こう思うだけで彼は怒りで打ち震えた。こともあろうにこんな席で、最高責任者としての情報管理の不手際を指摘されようとは思わなかった。彼は思いきって賭けに出た。

「そのメールの発信元が海洋科学研究所だと言われるのですね」

「そのとおり」

「どうして海洋科学研究所が発信元と分かったのですか。発信者が海洋科学研究所となっていたのですか」

全身から汗が噴きだした。

「……………」

発言者は薄い唇を結んだまま、大きな目をぎょろりと光らせ、不愉快そうな顔で田中を見つと見た。

田中も口を固く閉じ、返事を待った。両脇と背中を汗が流れた。

「……匿名だったが、調べてもらったところによると海洋科学研究所のコンピュータから発せられていたことが分かった」

田中はどう対応すべきか、迷った。海洋科学研究所が暖水塊の来襲を電力会社に内々に知らせていたとすれば、研究所としての責任を果たしていたことになるではないか。それなのに、発言者は犯人探しを強要している。

もし電力側が暖水塊来襲を事前に予測しておりながらなんらの対策も講じていないことが分かれば、停電により発生した膨大な被害に対する損害賠償責任が問題となるからか。この際、電力側としてはとにかく犯人を捜して口を封じておきたいということか。

かといって、海洋科学研究所が暖水塊来襲のことを全然知らなかったとあえておおよけにすれば、逆に、海洋科学研究所の責任や存在理由が問われかねない。

「それは……本当ですか……。そのメールは電力のほかにも送られていたのですか」

声が掠れた。田中は恐る恐るメンバーの面々に視線を走らせた。鋭い視線の集中から逃げる術はなかった。面々の鋭い視線に駆り立てられ、彼は知らず知らず焦っていた。もがけばもがくほど、思考能力が低下していく。

「そこまでチェックしていない。もし電力以外にも送られているなら問題だ」

「メールを送った目的は……」

そのとき、突然、なんの脈絡もなく、田中の脳裏に一瞬東野の顔が浮かび、つづいて彼が連れてきた九鬼陽一郎の顔が浮かんだ。

「単なる情報提供か、それとも警告といったところか」

「……そうですか。分かりました。多分、あの男でしょう。連れてきてい

ますから、ここに呼びましようか。メールの宛先も明らかにするでしょう」

電力会社出身の田中は研究機関としての海洋科学研究所の役割を思うまえに、あつさり電力サイドの要望に応えるほうを選んでしまう。だがこれは研究機関の長として軽はずみで、不用意な発言だった。

議長が発言者に目を向ける。これに依えて、発言者は軽く頷いた。

「間違いないのですか、その男が発信したというのは」

議長は穏やかに、田中に尋ねる。

「はい、間違いありません」

一瞬、田中の脳裏を不安がかすめた。

「ここで犯人探しをやっても結果が好転するとは考えられない。だが大停電を引き起こした暖水塊の到来を予測していた男がいたなら、是非、一度話を聞いておきたいものだ。その男をどう処置するかは海洋科学研究所の問題だ。それはここでの話とは全然別個の問題だね」

発言者は議長と田中を半々に見ながら、冷たい声で言った。

九鬼陽一郎は東野の後に従い、会議室に入った。案内の男が田中の横に二人を導く。

田中が二人を簡単に紹介した。九鬼は東野に従い、紹介された時に立ち上がって軽く会釈した。

メンバーである電力会社の社長たちの視線が九鬼に集中した。

日本の電力産業の支配者たちを目の前にしても彼にはなんの感慨も湧かなかった。むしろ偉そうな顔をして横柄に見下しているような目付きが気に入らなかった。

「では、今回の暖水塊問題についてお話し願いますか」

正面の丸顔の議長が鷹揚に言う。

「暖水塊の予測に絞って、ご説明すればいいのですね」

田中は議長の了解を取ると、ちらりと東野を一瞥してから九鬼に目を向け、説明を促した。

「本当に予測できていたのか、できていたとすればどうやってそれを行なったのか、その辺のところを説明してください」

さつきから九鬼を見つめていた小柄なメンバーの一人が発言した。

九鬼にはなぜ電力首脳が暖水塊来襲の予測に拘るのか、よく分からなかった。もし予測が可能であればその対策を講じていなかったことで、今回の停電事故に対する責任が問題となることを恐れているのだろうか。だがそんなことは彼にはどうでもよかった。

「赤道付近で発生した暖水塊が北上しはじめたところから、日本列島に近づいてくる可能性があることは十分予想できましたが、原子力発電所立地地点を襲うかどうかを事前に正確に予測するのは難しいことです」

九鬼に向けていた視線が僅かばかり和らいだように見えた。

「予測することが難しいのに十分予想できたというのは、どういうことですかね」

「わたしは予想という言葉を手感的な判断による時に用い、予測という言葉は客観的なデータを用いて科学的に未来における発生可能性を検討したときに用いますが……」

「直観的判断と科学的検討の違いだというわけか。だが直観的判断が正しいときもあるが、とにかく科学的には予測できなかったということだね」

一部のメンバーから笑い声が洩れた。

「そうです。でも……」

「では……」

質問者は口を開きかけたが、一瞬怪訝な表情を浮かべたものの、九鬼の発言の続きを待っている。

「暖水塊の北上ルートについて事前に正確に予測することは難しかったのです。ですが、暖水塊が原子力発電所の集中立地地点を襲えば周辺海域に大量に放出されている温排水を取り込んでさらに数度高温の海水域がつくり出される可能性があるものです。暖水塊が熱水塊と化して、発電所の冷却システムをアタックすれば、今回のような事態が発生し、大都市での大停電を引き起こす可能性が極めて高いことは十分予測できることでした」

「九鬼くん、それは言い過ぎじゃないか」

田中が慌てて隣の東野を越して、彼を制する。

そのときはじめて、彼は纏わりつくような目で見つめているメンバーたちの非難がましい厳しい視線に気付いた。その視線がかえって彼を燃え立たせた。

「今回の停電事故の問題点は暖水塊の来襲もさることながら、大容量の原子力発電所を集中立地地している点にあつたのでないでしょうか。これが大停電を招いた直接の要因だっと思えます。大容量の原子力発電所を一カ所に集中立地さえしなければ、暖水塊が突然襲ってきてても大停電を引き起こすことはなかっただろうし、わたしの妻も生命を奪われることもなかったでしょう……」

九鬼の両眼から大粒の涙が頬を伝って流れ落ちた。

「……なぜ大容量の原子力発電所をあんなに集中して立地したのですか。電気事業者には供給責任が課せられていることは知っています。だからといって、大容量の原子力発電所を安易に集中して立地するというのはどう

いうことですか。今回は暖水塊という自然的な現象が原因でしたが、暖水塊が襲う代わりにミサイルが打ち込まれても同様なことが起こることでしょう。放射能洩れの事故でさえもそのおそれがあるでしょう。それに大容量の原子力発電所集中立地地点から大需要地である首都圏へ電力を輸送する大容量の送電線路は、いたるところに分断の危険性を秘めるまさに長大なアキレス腱ではありませんか。このような危険性をはらんでいるのに、どんな対策を講じているのでしょうか……」

九鬼は一気に言うと、一呼吸を置いてつづける。

「……首都圏が大停電に襲われたのは京阪神地方に大停電が発生から数時間後のことです。首都圏で大停電が発生するまで数時間の余裕があつたのです。その間停電を回避するために、どんな行動がとられたのでしょうか。

そのとき考えうる適切な対策が十分なされたのでしょうか……」

九鬼にはあのととき適切な対策がなされていたなら、そして首都圏の大停電が回避されていたら、という思いが強かった。

「……暖水塊の来襲といつても突然生じた自然現象だというわけではありません。暖水塊の発生が工場や火力発電所などでの化石燃料の燃焼から排出される二酸化炭素などの温室効果ガスによる地球温暖化からもたらされたものであることを考えれば、これも人間活動の結果ということになるでしょう。地球温暖化がはじまっているのに、これに対してどれほど真剣に考え、対処しているのか……」

「きみ、止めさせたまえ」

田中は隣の東野に命じる。だが東野は聞こえないふりを装い、平然としている。

「……」

「……愚かにも自ら危険性を増殖させ拡大させるこのような人間の行為はなにも今回に限ったことではありません。社会全体が現代文明の恩恵のみに目を向け、それを最大限享受することのみに頭を働かせ、それに伴い幾何級数的に増殖して巨大化している危険に目をつむり、未来に思いをはせることなく、いまこの瞬間の利益を貪り、現世の快楽に耽っているだけです。ですからこのことを批判したり非難する資格は誰にもないでしょう。とはいっても、それを煽り、助長し、無力の多くの人々を食いものにして金儲けに血道を上げておきながら、問題が生ずれば責任逃れをしようとする。このことはどうしても許すことができせん。企業というシステムは社会的に認められた特定の活動を効率良くするために考えられてたものです。ですから、企業活動が拡大すればするほど、社会に対する責任も大きくなるものです。大企業には貪欲な攻撃的な行動よりも抑制された品格ある行動が求められるはずですよ」

「説教とは恐れ入った。電力はつねにそう心がけているよ」

メンバーのひとりが苦々しく言う。

「そうあって欲しいものです。それでは事故に対する責任逃れに心を砕くよりも、これからのことに気を配るべきでしょう。地球温暖化はすでにはじまっているのです。地球温暖化の進展とともに、今後、ますます暖水塊の来襲が増えると予想されます。日本列島の周りに暖水塊が押し寄せ、日本列島を熱水がぐるりと取り囲むことになるでしょう。発電所の冷却水である海水が熱水化することでしょう。このための対策をすぐはじめるべきです。さもなければ、いずれ日本全土が大停電におそわれることになるでしょう。それなのにいまもって地球温暖化は先のことだと頬被りをきめ込み、これといった効果ある対策を積極的に講じようとしなさい。これではあのよ

うな大停電事故をこれからも何度も繰り返すことになるのではないでしょうか」

九鬼は自分を抑えることができなかった。なにかが胸の奥から迸るのを感じ、自分を激しく責める。

あのとき、なぜ職を辞してまで社会に警告を発しなかったのか。どうしてあのとき日本を離れていたのか。その結果、自ら最愛の妻を死に追いやったのだ。このことをいくら悔いても悔いきれなかった。もう二度とこんな経験を繰り返したくなかった。

彼は目を上げ、表情のない一樣な顔をした会議の出席者を一瞥した。会社という組織を背負った無機質の表情が連なるなかで、唯一人大きく頷き微かに笑みを浮かべた顔があった。

ふと保育器のなかで赤い顔をしてすやすやと眠っているわが子の姿が脳裏に浮かんだ。そのときなぜか大停電に見舞われた大都市が巨大な保育器のように見え、そのなかに囚われた無数の人びとが右往左往し、犇めている様子がかくつきりと見えた。

人類はもはや自ら造りだした保育器のような都市という現代文明の枠組みのなかでしか生きることができないのだろうか。そして一艘の船に乗り合わせた乗客のように、人類は保育器のような現代文明という船に乗せられ、現代文明のプラスを享受するかがざり、これが齎すマイナスも甘受しなければならぬ運命におかれていくのだろうか。

彼は棒立ちになったまま、数多くの犠牲者を生み出した今回の大停電事故をもう一度ゆつくり振り返った。

太陽のエネルギーを受けて駆動する地球気候システムが人間が吐き出す大量の二酸化炭素などの温室効果ガスによって狂いだし、直径数百キロメー

トルもの渦をもつ巨大な高温海水塊を生み出す。高温海水塊は狂いだした地球の熱分布をただすべく、無数の暖水塊をともない海洋を動き回るのだ。いくつかの暖水塊が大量の温排水を吐き出す原子力発電所集中立地地点を襲い、発電を止め、大都市を半身不随へと追い込む。

そのときふと、彼は現代文明が自らの巨大さを持て余しているような気がした。人類が造りだした現代文明という怪物がもたらすプラス面もマイナス面も巨大化し過ぎて、すでに人間のコントロールを超え、制御不能に陥り、管理不能の状態にあるのだ。

彼は深い無力感に囚われ、議長に軽く会釈して席を離れた。

会議室を出ると、扉を開いているエレベーターには目もくれず、彼は階段を駆け降りた。ビルの外に出た。

歩道には人が溢れていた。彼は人込みに紛れ、当てもなく歩き出した。



## エピソード

多くの生命を奪った大停電事故は現代都市生活の脆弱さの一面をあらわにしたが、結局誰も責任を取ることなく、また、なにひとつ解決することなく終わった。現代文明はもはや創り主である人間の手に負えないものになっているのか。

人間は飽くなく動き回り、二酸化炭素を吐き出しつづける。

あくる年も四月に入ると早々と夏日が現れた。幸いなことに、まだ太平洋高気圧の勢力が例年より弱かったが、暖水塊の北上が続いている。

大停電事故調査報告書が公表された。

これによると、最初の停電が発生したK電力管内では、O発電所一号機の冷却水系に異常を見出した当直員が原子炉の自動停止を回避するために手動に切り替えて急激な昇温に対応しようとしたが、出力調整がうまくいかず、急激な出力ダウンを招いた。これが引き金となって電力の供給不足が生じ、運転中の他の発電機に過重な負担がかかり、連鎖的に自動停止していったという。

つづいて発生したT電力管内の停電は原子炉の突然の自動停止に起因するものであった。その後の経緯はK電力のケースと同様で、多くの発電所を巻き込み大停電に発展したのである。

突然の発電停止による供給不足が停電事故発生の直接の原因であるが、両電力管内でなぜ供給不足に即応するはずの安全システムが作動せず、供給不足が供給不足を呼ぶ悪循環を招くことになったかについては原因を特

定するにいたらなかった。連日の酷暑によって、停電範囲の拡大を防ぐ機器の機能が低下していたのか、それともあのような大規模な供給不足の事態を想定していなかったために、電力システム制御のコンピュータソフトに欠陥があったのか、現在さらに検討を重ねている。

回復に時間を要したのは、いくつもの要因が複雑に絡んでいるものの、要は予備用の電源が十分に確保できなかったのが最大の理由であった。東西の大需要地での大停電の同時発生によって余剰電力が極端に不足したことで、周波数の違いから東西間の電力融通が十分できなかったこと、これらに加えて、電力自由化の煽りを受け、過剰なコスト削減の揚句、予備率を極端に低く抑えていたことも災いしたと思われる。

それに原子力発電所を再度立上げるにはどうしても時間がかかるということだ。点検に要する時間は延べ数千時間におよぶが、なんとか人海戦術でしのいだという。

冷却水が急激に昇温したメカニズムは発電所群を襲った暖水塊が温排水を取り込み、熱水塊化したためである。来襲した数一〇〇キロ規模の暖水塊が原子力発電所集中立地地点の前面海域に停滞し、冷却水の取水口と温排水の放出口を覆い尽くした結果、暖水塊の表面に形成している渦が七度上昇した温排水を暖水塊の高温部に取り込む形で吸い込み、これらが混入して暖水塊を高温の熱水塊と化したと考えられる。

このようなメカニズムが発電所が稼働している間中続き、熱くなった海水が取り込まれてはさらに昇温するといった悪循環に陥っていたのである。

海洋科学研究所では理事長が交代した。新理事長のもとで改革再編が進められた。だが村井は東野を切つて自分は無傷で残り、組織の改革や再編

にも消極的であつた。

地球温暖化がふたたび最重点課題となり、ノンリニアタイプの気候変動モデルの開発に取り組みはじめたものの、リーダーの中西はあくまでリニアタイプのモデルをベースに置いていた。九鬼の姿はなく、ノンリニアタイプのモデルを担当する人材もいなかった。

(第一部 完)

(この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものと一切関係がありません。)

主な参考文献

R・B・アレー／M・L・ベンダー「グリーンランドの水が語る気候の激変」(日経サイエンス1998年5月号)

地球温暖化の果てに第一部―熱水列島

生野以久男

二〇〇七年十二月三十一日第二版発行

(c) Ikuno Ikuno 2007

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kinokopress.com](http://www.kinokopress.com) 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウトデザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし